
じょいふる！ Music

につくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じよいふる！ Music

【Nコード】

N35040

【作者名】

につくん

【あらすじ】

兵庫県芦尾市に位置する浜唯高等学校は、県内でも有数のお嬢様お坊ちゃま学校。そんな高校に存在する吹奏楽部は関西大会に毎年出場する強豪校。一見、美しいハーモニーを奏でる部員たちだが、実際は雑多な想いが渦巻く複雑な状況である。そうした状況が影響し、近年は県大会突破すら危ういような状態に陥っていた。しかし、それを革新しようとする男子生徒が一人、そしてそんな彼と出逢った新任教師。彼らにより、浜唯高校吹奏楽部は新たに生まれ変わるうとしていく……。

ブローグ 僕らは毎年ダメ金だ

今年もやって来た、全日本吹奏楽コンクールへの予選となる、関西吹奏楽コンクール。この時間は、審査の結果発表となっていた。

「プログラム15番 私立 浜唯^{はまゆい}高等学校吹奏楽部……」
皆の心臓が嫌でも高鳴る。コンクールは中学の時から経験している者も多いが、やはりこの瞬間は慣れない。

「金賞、ゴールド！」

「うおおおおおお！」

「やったあああああ！」

悲鳴に近い喜びの声が上がる。けれども、この先が重要なのだ。

その後、金賞受賞団体から全国大会へと出場できる、代表の選出が発表された。今しがた喜びの声を上げた私立浜唯高校の部員たちは祈る思いで手を合わせていた。

やがて、プログラム7番と13番の団体が代表に選出される。

（頼むでー！）

「プログラム」

心臓が爆発してしまうのではないかというほど緊張していた。

「じゅー」

（頼む！）

（お願い！）

「ろくばんー！」

「……っ！」

全員が顔を上げた。歓声が、彼らとは違う場所で起きる。

（また……アカンかったんか……！）

大粒の涙が、少年の頬を伝った。

「ハッ！」

目を覚ますと、全身が汗だくだ。まだ4月1日というのに。少年はグシャグシャと前髪を摩った。

「この時期になったら、なんか知らんけど思い出してまうなあ」
首を横に振り、少年はベッドから起き上がった。

2010年4月1日、兵庫県 神崎市かんざき。新しい門出を迎える人々に、春麗らかな日差しが降り注ぐ中、彼は少し面倒そうに部屋から出て行く。

「ん？」

彼の部屋にどこから紛れ込んだのか、桜の花びらが一片ひつら、落ちていた。

「……綺麗やな」

少年は思わず微笑んだ。

「よっしゃ、頑張ろうか」

彼は伸びをして、部屋を出て行った。

主な登場人物 及び 浜唯高校概要

「私立 浜唯^{はまゆい}高等学校とは？」

昭和2年6月1日に旧制浜唯中等学校として開校。戦後の昭和25年に現在の浜唯高等学校に制度及び名称を変更。昭和30年、中学校を新設。平成22年現在、普通科・体育科・商業科の3つの学科が存在する。総生徒数1658名。

<主な登場人物>

ネタバレ注意！

第1話現在

「20」は年齢を示し、
は3年生、
は2年生、
は1年生を示しています。

<主要人物>

もりた しゅうへい
森田 周平

>i13648—150<

兵庫県 神崎^{かんざき}市在住、私立 浜唯^{はまゆい}高等学校に通う3年生。浜唯高校は基本的に裕福な家庭で育ったお嬢様・お坊ちゃまが通う高校だが、周平の実家はごくごく一般的な中流家庭で、周平自身も自分が

お坊ちやまだとかいう風には考えていない。浜唯高校には母の勧めで情性的に入ったこともあるが、吹奏楽部のレベルが周囲の高校に比べて高いというのが一番の決め手となった。

パートはアルトサクソとソプラノサクソ。底抜けに明るく、何かと生真面目すぎる吹奏楽部をこれまで変えようとしてきたが、なかなか理解しない先輩、同級生、後輩の態度に疲弊し、今では若干冷めた雰囲気も併せ持っている。

後藤 未樹

> i 1 3 6 4 7 — 1 5 0 <

兵庫県神崎市在住、私立浜唯高等学校に通う3年生。未樹は周平と違い、神崎市の中でもやや裕福な家庭に住む、園和地区在住。性格はサバサバとした大阪のオバチャンのような性格で、曲がったことが大嫌い。それだけに、周平が吹奏楽部を変えようと行動したことに賛同したが、結局先輩たちの反対を受け、中途半端な対応になり結果として周平を怒らせてしまい、今では疎遠になっている。

パートはチューバ。華奢に見えるが肺活量も体力も気合も十分な少女。実は周平のことが1年生当時から好きなのだが、自分の中途半端な対応で彼を怒らせ、周りからも非難された経緯があり、言い出せないまま片想いが続いている。

【Flute】

氷室 照

> i 1 3 6 3 6 — 1 5 0 <

ピッコロも兼任する中学からの経験者。ハキハキとした性格で、中途半端なことは嫌い。兵庫県 芦尾 市に住む、生粋のお嬢様。汚れるようなことは嫌いで、マーチングも中学の頃は参加しなかった。面倒くさがりのくせに目立ちたがりという少し厄介な性格をし

ている。

大平菜々香 おおひらな か

> i 1 3 6 4 4 — 1 5 0 <

兵庫県

宝宮 たかのみや

市の高級住宅地に住むお嬢様。自宅の坪数は10

0坪ほどだとか。中学からエスカレーター式で進学してきた。自宅には執事やメイドもいるため、自分で進んで何かをするということをしていない。

下条 由里 しもじょう ゆり

> i 1 3 6 1 8 — 1 5 0 <

優しい微笑みを浮かべながら毒舌を繰り広げる、少し常識のない女の子。何でも自分が一番にならなければ気が済まず、ファーストの取り合いを菜々香や照と毎回繰り広げている。

柳下 明莉 やなぎた あかり

> i 1 3 5 8 8 — 1 5 0 <

フルートさえ吹ければそれでいい。他人は知ったこっちゃないというようによく言えばマイペース、悪く言えば自己中心的な性格の少女。

栗田 雛 あわた ひな

> i 1 3 6 0 4 — 1 5 0 <

引つ込み思案で、人に何かを言うというようなことを知らない少女。そのため、由里や明莉たちが嫌がるややこしいソロなどをいつも押し付けられてしまう、美味しいようでは実は損な役回が多い。

【Obboe】

北堀 朋矢 きたほり ともや

> i 1 3 6 2 5 — 1 5 0 <

マイオーボエを既に所有している、お坊ちやま。しかし、中学受験をしたのみでその後はエスカレーター式に進学しているため、頑張るといふことをあまり知らない。オーボエも今までは奏者が自分しかいなかったため、必然的にソロを任されているので、楽器面でもほかの事に関しては何かと手抜きがち。

葛和 良平
くすわ りょうへい

> i 1 3 6 0 0 — 1 5 0 <

自己主張の激しい少年。それゆえ、朋矢に異常な敵対心を燃やしたり、何かと頑張ろうとする周平にも異常な嫉妬をしたりする。オーボエの技術は優れている。

【Bassoon】

園田実香子
そのだ みかこ

> i 1 3 6 4 1 — 1 5 0 <

クールで部内の揉め事やいさかいは一切関与しないと決め込んでいる。バスーンの練習に対しては非常にストイックで、後輩の久美にも厳しく指導する。

八木沼久美
やぎぬま くるみ

> i 1 3 6 0 8 — 1 5 0 <

この部では貴重な天然系少女。優しい性格でもあるので、何かと不器用な未樹と頑張り屋の周平を繋ぎ止める役割を実は果たすことが多い。

【E Clarinet】

松本 弓華
まつもと ゆみか

> i 1 3 6 3 4 — 1 5 0 <

未樹と未央の幼なじみで、周平に片想いしていることを知っているので応援もしてくれる親友。数少ない未樹の味方とも言える存在で、少しでも部の雰囲気を変えようとしている様子が見られる。コンサートミストレスを務める。

【B Clarinet】

竹中 将輝
たけなか まさき

> i 1 3 6 4 0 — 1 5 0 <

クラリネットパートリダー。勉強もでき、運動もできるがそれ故に勉強や運動のできない人を見下すところがある。初心者は基本的に指導せず、2年生に任せるといふ無責任なスタンスを持っている。

和泉 朋子
いずみ ともこ

> i 1 3 6 4 6 — 1 5 0 <

木管セクションリーダー。温和な性格だが、波風を立てられるのを嫌うので、結果的に部を変えようとしている周平やそれに一時期同調した未樹のことを苦手だと感じている。

伯方 未央
はかた みお

> i 1 3 6 3 7 — 1 5 0 <

未樹と弓華の幼なじみにして親友。弓華と同じく未樹の数少ない味方といえる存在で、少々お節介な面もあるが、周平と未樹を接触させようといろいろ気を遣ってくれている。

田中 雅貴
たなか まさたか

> i 1 3 6 1 6 — 1 5 0 <

あらゆるジャンルの音楽をオールマイティーに演奏できるクラリ

ネットの期待の星。同じくジャンルを問わずあらゆる曲を吹きこなし周平に憧れているが、部内で浮いている彼にその気持ちを勘付かせないため、接触を控えている。

倉吉 晴菜

> i 1 3 6 2 1 — 1 5 0 <

雅貴のことが好きなおっとり系少女。損得勘定で動くところがあるので、思い切った行動ができず、後悔することがしばしばある。

平群 明巳

> i 1 3 6 0 9 — 1 5 0 <

典型のお嬢様で、まるで絵に描いたような高飛車な性格。先輩・同級生・後輩問わず自分が気に入らないと思っただ人にはキツく当たる。

近江亜梨沙

> i 1 3 6 2 8 — 1 5 0 <

明巳に異様な敵対心を燃やす典型のお嬢様その2。ただし、明巳のような高飛車な部分はないため、後輩たちには人気がある。

住友 麻衣

> i 1 3 5 9 3 — 1 5 0 <

周平と同じ中学からこの浜唯に進学した。これまでの環境とあまりにもギャップがあるため、驚きの毎日を送っている。

地頭所留梨

> i 1 3 5 9 6 — 1 5 0 <

あまりにもマイペース過ぎて将輝や未央、朋子たちの手にも負えない自由人。しかし、吹奏楽に関してはなぜかやたらと気配りができるため、演奏させると表情を付けるといっ点では群を抜いている。

竹中 美波
たけなか みなみ

> i 1 3 5 9 2 — 1 5 0 <

将輝の妹。兄を心から尊敬している。それゆえ、性格も似ており自分が演奏できればそれで良いというような考えの持ち主。

【Alto Clarinet】

上杉 翔太
うえすぎ しょうた

> i 1 3 6 0 2 — 1 5 0 <

練習熱心なアルトクラリネット奏者。アルトパートがない場合はB クラリネットを担当。

本当は周平の考えに同意したいが、下級生のために言い出しづらく、言えないままになっている。

【Bass Clarinet】

安西 菜砂
あんざい なすな

> i 1 3 6 3 0 — 1 5 0 <

神奈川出身で、高校から兵庫県西塚にしづか市に越してきた。神奈川でもそれなりにお嬢様やお坊ちゃまの集う学校に通っていたが、あまりにも強烈すぎる浜唯高校の状況に驚かされっぱなしである。

【Alto Saxophone】

大西 優花
おおにし ゆか

> i 1 3 6 4 5 — 1 5 0 <

何かと人の目を気にするタイプである。そのため、本当は周平のことを支えたいと思っていたり、未樹の考えに賛同したりしたいのだが、それが言えず結果的に部全体の方針に情性的に従っている。

山口 華名
やまぐち はな

> i 1 3 6 0 6 — 1 5 0 <

吹奏楽をしたい、レベルの高いところがいいということでこの学校に進学してきたが、あまりにも人間関係のゴタゴタが多すぎ、部の雰囲気も独特すぎる部分があり、一時期それらを理由に休部していた。今は周平の支えもあって、復帰。

秋吉 和洋
あきよし かずひろ

> i 1 3 6 0 5 — 1 5 0 <

自分こそがソプラノサクソスやアルトサクソスのファーストを吹くべき人物と自負している自信過剰な少年。

【Tenor Saxophone】

藤田 光晃
ふじた みつあき

> i 1 3 6 1 0 — 1 5 0 <

笑顔がステキなテナーサクソフォン奏者。周平と中学から先輩・後輩の関係であるため、周平がしがらみに揉まれるようになった現在でも、彼とは親しくしている。ホルンの洋平やバリサクの猛と同じく、周平の数少ない部内での仲間。

榊 郁斗
さかき いくと

> i 1 3 5 9 7 — 1 5 0 <

中学時代に抱いていた理想と現実の浜唯高校吹奏楽部のギャップに幻滅しており、部活をサボることもしばしば。

【Baritone Saxophone】

七瀬 猛
ななせ たける

> i 1 3 6 1 5 — 1 5 0 <

高校からバリサクを吹き始め、吹奏楽も高校時代からという初心者。初めはクラリネットを吹いていたが、将輝に当時の顧問へ「クラリネットには不適」と言いつけられ、バリサクに回される。しかし、周平に親切丁寧に教えてもらったおかげで、メキメキ実力をつけている。

【Trumpet】

金木 愛美

> i 1 3 6 4 3 — 1 5 0 <

吹奏楽部部长。自分の思い通りにことを運ばせるのが得意で、人を上手く使って自分は楽するのが得意中の得意。しかし、それを見抜いている周平だけは上手く動かすことができず、それが腹立たしいため周平に冷たく当たる。

櫻井智香子

> i 1 3 6 1 9 — 1 5 0 <

2年生代表。半ば愛美の腰巾着状態で、愛美に絶対服従を誓っているような状態。自分ではできないことでも平気で完璧を求める。

木下 美里

> i 1 3 6 2 4 — 1 5 0 <

智香子のようなやり方を徹底的に嫌うため、トランペットの中でも浮いた存在。未樹や周平の考えと合うため、何とかして彼らに近づこうと考えている。

下条 都夢

> i 1 3 5 9 4 — 1 5 0 <

由里の弟。由里の影響を完全に受けており、自分の思ったことは

包み隠さず思い切り言ってしまう。そのため、ケンカ寸前になることが頻繁に起きる。

琴弾 ことひき 音弥 おとや

> i 1 3 6 2 0 — 1 5 0 <

ただトランペットを吹きたいだけなので、気の乗らない地域行事などは欠席するようなことがよく見られる。ただし、技術は確かなものがある。

【Trombone】

福崎 ふくさき 利緒 りお

> i 1 3 6 3 5 — 1 5 0 <

中学からエスカレーター式に進級した生徒。周平や未樹と同じ神崎市で、しかも下町の雰囲気が残る地域に在住しているため、実はお嬢様らしい雰囲気は少ない。未樹とは特に気が合う様子。

広瀬 ひろせ 譲 ゆづ

> i 1 3 6 1 2 — 1 5 0 <

高校2年生から、ホルンからトロンボーンへ異例の転向。まだな慣れないため、ぎこちない音が響いてくる。それが周りに迷惑を掛けていたのではないかと心配し、ますます音が萎縮気味になっている。

酒井 さかい 進士 しんじ

> i 1 3 6 2 0 — 1 5 0 <

楽器が変わったばかりの譲を優しく指導する同級生。トロンボーンパートは基本的に「マトモ」な部員が揃っており、その代表例が進士と言っても過言ではない。

島本あずさ

> i 1 3 5 9 5 — 1 5 0 <

純粹がそのまま人間になって歩いているような少女。この浜唯高校吹奏楽部に渦巻く雑多な思いには全然気づいていない。

岸本 佳澄

> i 1 3 6 0 1 — 1 5 0 <

あずさと同じく、純粹そのものの少女。多少の浜唯高校の雑多な思いには気づいているが、それを直視するのが嫌で知らないフリを決め込んでいる。

【Horn】

佐藤 洋平

> i 1 3 6 4 2 — 1 5 0 <

小学校時代からの周平の親友。現在はホルンを担当しており、音大推薦の話が来ているほどにホルンが上手い。実は部員たちも知らない、周平との秘密がある。周平の数少ない味方。副部長を務める。

安本 桃

> i 1 3 6 0 7 — 1 5 0 <

高校時代からホルンを始めた元・初心者。洋平に優しく教えてもらったため、後輩にも同じように接したいと考えている。が、それが充香と意見が合わず、ケンカが絶えない。

相内 良輔

> i 1 3 6 3 1 — 1 5 0 <

常に冷静に周りを観察し、必要に応じて必要な言葉をかけることができる。部の中でも特にイケメンなので、モテ度が高いが彼はどこ吹く風という様子。

岡本 充香

> i 1 3 6 2 7 — 1 5 0 <

中学時代から浜唯に通っており、厳しい指導を受けているため、それをホルンパートでも引き継ごうとしている。それに反対する桃やあまり好ましく思っていない洋平と頻繁に衝突する。

小林 樹

> i 1 3 5 9 8 — 1 5 0 <

病気のために1年遅れて入学。そのため、実年齢は17歳だが高校1年生に当たる。本来なら同じ年の充香に時として偉そうなことを言われるため、我慢の日々を過ごしている。

古舞このは

> i 1 3 5 9 0 — 1 5 0 <

ホルン初心者。そのため、充香から嫌味を言われたりすることもある、辛い境遇にある1年生。しかし、洋平の支えもあって現在も続けられている。

【Euphonium】

三沢 大輝

> i 1 3 6 3 3 — 1 5 0 <

大企業社長の真面目な息子。しかし、お金持ちだと思われるのが嫌いなので自立した男を目指すとしている。そのため、何かと部を変えようと動く周平に賛同することが多い。

武田尾真咲

> i 1 3 6 1 7 — 1 5 0 <

自分のことは後回し、とにかく世のため人のため！とは縁遠い少

女。悪気はないのだが、なんとなく自分の得になるように物事を動かそうとする。よくいえば要領がよい、悪く言えばずる賢い少女。

【Tuba】

京谷 航平

> i 1 3 6 2 2 — 1 5 0 <

この部では数少ない中流家庭の育ち。逆に高級料理や綺麗過ぎる施設の利用などは嫌いなタイプで、汗だくの泥だらけになるようなことが大好き。チューバを選んだのは、どっしりと構える重厚感に惹かれたため。

皆見 陽菜

> i 1 3 5 8 9 — 1 5 0 <

航平、未樹、周平と同じ中流家庭の育ち。お嬢様育ちの人たちの感覚を知りたいと思って受験し、合格したが今はかなり後悔しており、退部&退学すら考えている危険な状況。

【String Bass】

月島 拓久

> i 1 3 6 3 8 — 1 5 0 <

プロヴァイオリニストの父を持つ少年。父の影響でストリングベースを弾いている。何かといえは「父が言うには」がすぐに出てくる。父の功績も自分のことのように語る節がある。

脇川 美琴

> i 1 3 5 8 6 — 1 5 0 <

大阪の下町に住む、バリバリの下町娘。凜とした表情から、冷たいと思われがちだが、実はめちゃくちゃ明るく活発。その性格が周

平と合い、彼女と周平は頻繁に言葉を交わす仲。

【Percussion】

立花 悠馬
たちばな ゆうま

> i 1 3 6 3 9 — 1 5 0 <

周平が吹奏楽部男子の中で洋平の次に仲の良いパーカッションリーダー。自分の信念を貫く意志が強いため、人に左右されないタイプ。

吉武 友
よしたけ ゆう

> i 1 3 6 3 2 — 1 5 0 <

初心者で入部し、先輩の厳しい指導に耐えて今では悠馬にも劣らぬほどの実力をつけている。が、それを自分でも認めようとしない。

葉月 佳穂
はつき かほ

> i 1 3 6 1 3 — 1 5 0 <

友と同じく、初心者で入部。しかし、友と違い自分ができる女と思い込んでいる。思い込みの激しさが、時に演奏時に取り返しのつかない状況に陥らせることがある。

野田 詩音
のだ しおん

> i 1 3 6 1 4 — 1 5 0 <

小物楽器が得意な小柄な少女。自分の意見や感情は二の次で、理性を優先させてしまうタイプ。

今中 未紅
いまなか みく

> i 1 3 6 2 9 — 1 5 0 <

お嬢様なのだが、そのように扱われることを極端に嫌う。そのため、部内では下町娘の美琴が一番の親友となっている。

稲葉 紗重

> i 1 3 6 0 3 — 1 5 0 <

無口で何を考えているのか読めない部分が多い少女。しかし、打楽器のことは大好きなようで、部室に一番にやって来て基礎練習を毎日一人で行っている。

広島 杏子

> i 1 3 5 9 1 — 1 5 0 <

とにかくお喋り好きの噂好きで、部内のゴシップ的な話題を彼女から聞き出せば、全員分の話が出てくると恐れられている。ちなみに、元々はトランペット奏者だった。

吉田 達矢

> i 1 3 5 8 7 — 1 5 0 <

とにかくボーツとしたノホホン主義の少年。しかし、尊敬できる人のためにはいくらでも動きたいと考えている。現在、そのような人物がいなかったためなんとなく情性で毎日を過ごしている。

【Conductor】

島崎 大地「24」

> i 1 5 4 3 5 — 1 5 0 <

吹奏楽部顧問。2010年から正式に浜唯高校の教員として採用され、気合い十分。長年のしがらみに絡まれてきた吹奏楽部に新たな風を吹き込むキツカケとなる人物。とにかく楽しく音楽しよう！という考えの下、自分のやりたい音楽を部員たちに次々と提案していき、周平や末樹は元より部員のほとんどを驚かせるような選曲や考えを次々と披露する。

<周平と仲の良い部員>

八木沼久美 / 山口 華名 / 藤田 光晃 / 七瀬 猛 / 佐藤 洋平 /
脇川 美琴

<未樹と仲の良い部員>

八木沼久美 / 松本 弓華 / 伯方 未央 / 福崎 利緒

<周平に好意的な部員>

田中 雅貴 / 上杉 翔太 / 大西 優花 / 木下 美里 / 三沢 大輝

<未樹に好意的な部員>

大西 優花 / 木下 美里

第001話 情性走行

「ふあーあ……」

新学期早々というにも関わらず、校庭の片隅でやる気のないアクビをしている男子生徒がいた。

ここは兵庫県芦尾市の北部に位置する私立 浜唯はまゆい高等学校。芦尾市は兵庫県内でも特にお金持ちの住む高級住宅街として知られ、芦尾市に住んでいる「お金持ち」というようなイメージが完全に定着している。

しかし、ここでアクビをしている少年は芦尾市在住ではない。彼はどちらかといえば大阪寄りと言った方が正しい、兵庫県神崎市在住だ。

少年の名前は森田 周平もりた こへい。この春、浜唯高校の3年生にめでたく進級した。それにもかかわらず、周平からは既に気だるそうなオーラが出ている。

「なんや、なんや〜？ やる気のないオッサンが一人座つとんな！」
周平が振り返ると、小学校からの親友である佐藤さとう 洋平ようへいが立っていた。

「オーツス。おはようさん」

「おはようさん。何で朝からそんなダルそうやねん？」

「いやさあ。ほら、1年入ってくるやる？ 午後から入学式や」

「そうやなあ」

洋平と周平は並んで座った。洋平がペットボトルを取り出し、お茶をグイッと飲む。

「どうや？ 今年こそは雰囲気変えてくれそうな1年、入ってくると思わへんか!？」

洋平が鼻息荒く語る。しかし、周平は首を横に振る。

「ムーリやって、絶対ムリ!」

「またお前はそうやってすぐにムリって何でも決め付けてさあ。なんでやねん？」

洋平は不服そうに頬を膨らませた。

「だって考えてもみいや。こんだけ金持ちのお坊ちゃんお嬢様が揃うような学校やぞ？ どれ！ 一丁吹奏楽部変えたるかあ！ みたいな気合い入ってるようなヤツ、おると思うか？」

「……………」

洋平が黙り込んでしまった。

「ほらな。黙ってまうってことは、お前もあんまり期待してへんつちゆうこつちや」

周平は制服が汚れるのも気にせず、地面に寝転がった。

「なーんも期待せんところや。無難に1年過ごして行こう」

寝転がった視線の先に、白と黒の何かが見えた。

「ん？」

「ん？」

周平はようやくそれが何なのか気づいた。

周平の視線の先にいるのは、周平が在籍する吹奏楽部でチューバを吹いている同学年の後藤^{ことう} 未樹^{みき}だった。

「……………」

「……………」

つまり、周平が見ていたのは未樹のスカートの中ということになる。普通ならお互い大声で叫びそうなものだが、周平はスツと起き上がるだけ。未樹もすぐにその場から離れただけで、特に何も言わなかった。

洋平が心配そうにその場を離れた周平の後を追う。

「しゅうへい。まあだ後藤のあの時のこと、根に持っとなん？」

周平がすごい形相で洋平を睨みつけた。

「当たり前や」

「そ、そうか……………」

洋平はそれ以上何も言えず、苛立った様子で歩いていく周平の背

中を見送ることしかできなかった。

同じ頃、昇降口では未樹の幼なじみで吹奏楽部ではエス・クラリネットを吹いている松本^{まつもと} 弓華^{ゆみか}が洋平と同じように心配そうな様子で未樹の後を追っていた。

「未樹い〜」

「あ……弓華」

未樹は恥ずかしそうに笑う。

「アンタら、まだマトモに口も利けへんの？」

「うん……」

未樹は寂しそうに笑った。

「しゃあないとは思ってるんよ。だって、あれは全部あたしが中途半端なことしたんやし」

「そう思ってるだけちゃうの？ 森田くん、あんまり根に持つタイプには見えへんけど……」

「それは弓華に対して何もないからやん。あたし、森田に同調するだけ同調して、ちょっと先輩風吹かされたら怯んで……。中途半端で拳句に先輩側に加担したから……嫌われてても恨まれてても、しゃあないと思うんよ」

未樹は半ば諦めたように言った。

「まあ、あと1年もないしね。ウチらが一緒に部活すんの」

「でも……そんなん、寂しいわあ」

「しゃあないやん！ そんな全員が仲良しこよしの部活なんてありえへんって」

未樹は諦めた様子で靴を履き替え、音楽室に向かった。

未樹、弓華、洋平、そして周平が在籍している浜唯高校吹奏楽部は、昭和59年の設立以来、全日本吹奏楽コンクールの全国大会に15回出場している強豪校であった。「であった」の言葉どおり、2001年以来、浜唯高校は全国大会に出場していない。いつも関西大会まで出場するのだが、金賞受賞はできるものの、全国大会への代表には選出されずにいた。いわゆる「ダメ金」と呼ばれる状態

に留まっていた。

周平は中学時代、神崎市内ではトップをいつも保守していた吹奏楽部の出身である。もちろん、洋平もこの吹奏楽部の出身で、和気あいあいと部活動を行い、先輩後輩問わず率直に意見を言える雰囲気がこの吹奏楽部にはあった。

高校進学時、周平は吹奏楽部のレベルの高さに惚れこみ、この浜唯高校に進学した。しかし、実際に待っていたのはあまりにも先輩の権力が強すぎて後輩は先輩の指示に絶対服従、意見などとてもできるような空気ではなかった。

雑用は当たり前。コンクールメンバーは選抜という名の年功序列だった。周平はかつて、こうした異様な歴史と習慣に激しく違和感を覚え、直接当時の部長に訴えた。そして、部長は笑顔でこう返したのだ。

「お前、入部したばっかの1年のクセに生意気な口利くやんけ」
それからの周平は散々だった。雑用はすべて周平に割り当てられ、楽器も一番粗末なものに替えられた。それでも周平はこの部の雰囲気を変えてやると心に決めていた。味方を作るため、自分が中学時代に経験したことを、気心が知れてきた仲間に伝えた。そして、同調してくれたのが現在の同級生数名だった。その中に、未樹も入っていた。

しかし、そうした行動が目をつけられないはずがなく、すぐに先輩はもちろん、同級生からもひどい仕打ちが始まった。それでも負けないと誓っていた周平だったが、後に衝撃的な事実が判明する。

その事実が判明して以来、周平はいわゆる燃えつき症候群のようなものにかかっていた。それまでコンクールや本番には一人だけでも燃える姿勢を取っていたが、今となってはなんとなく出ているだけという感じであった。それと同時に、ほとんどの同級生や先輩、後輩に対して心を堅く閉じてしまった。未樹とは口を利かなくなり、はじめは仲の良かった弓華をはじめとする部員たちとも次第に口を利かなくなり、今となっては同級生では洋平のみ。後輩も数名しか

話し相手がいない。

それでも周平が吹奏楽部を辞めない理由。それは単純明快だった。楽器が好きだから。

彼が吹くのはアルトサクソフォン。サククスが吹けるならそれだけがいい。

周平は今となつては、サククスを吹くためだけに吹奏楽部に在籍しているようなものだった。

そして、そんな惰性走行の周平の部活動もいよいよ、最後の年を迎えようとしていた。

第002話 離任と着任

一見ダラけている周平は、決してこの現状に甘んじているわけではなかった。今年を最後のチャンスだとむしる彼は捉えているのだった。

今日は入学式があったほかに、離任式と着任式があった。離任式で、昨年度まで吹奏楽部の顧問をしていた堅物教師・新橋健郎が異動となったのだ。そして、入れ替わりでやって来た明らかに周平たちと10歳も離れていない（新任ということなので、おそらく20代前半）、島崎大地という教師がこのたび、吹奏楽部の顧問に着任したのだ。

周平はその島崎に期待していた。若いのだから、ひよつとすると自分の考えに同調してくれるかもしれない。そう期待していた。

「今年は何とかなるかもしれへん」

そう思い、密かに笑みを浮かべていると背後からキツイ言葉が飛んできた。

「ちよつと、雑用係」

ムツとした様子で周平が振り返ると、部長である金木愛美が立っていた。

「なんやねん。雑用ちゃうわ。美化係つちゅー名前があんねん」

「アンタなんか昔っから雑用しかしてへんねんから、これくらいがちよつとええ名前やんか」

周平はすぐにそっぽを向いた。

「それより、今日の指示先生から聞いてきてくれへん？」

「は？ なんでオレが行かなアカンねん。部長の仕事やろうが」

周平は不服そうに振り向きながら反論する。

「何言うてんのよ。新しい先生が来はってんで。会いたい思わんの？」

「全然。どうでもええわ」

周平が立ち上がり、部室を出ようとしたときだった。

「金木部長は新入部員にこの部の伝統を説明するために大変お忙しいんです。ヒマな先輩が行くべきやと思います」

完全なる愛美の腰巾着である2年生代表・櫻井智香なぐさい ちかこ子がドアを塞いだ。この櫻井のことが周平は苦手を通り越して生理的に受け付けなかった。彼女と喋るくらいなら、雑用をしているほうがマシだと思っただけであった。

「うっさいコシギンやな。お前と口利くくらいなら指示聞きに行ってるほうがマシやな！」

周平は怒りに任せてドアを開け、部室を出た。後ろで愛美と智香子がニヤニヤと笑っていることくらい、わかっただけが振り返りもせず、周平は職員室に向かって歩いていった。

職員室の扉を開けるなり、大声が飛んできたので周平は思わず顔をしかめた。

「アツカンわー！ こんな堅すぎる曲選んどつたら、ほんまアカン！ それに課題曲はコイツら向きちゃうやろー、これは！」

おそろおそろ周平は声のする方を覗いてみた。声の主は、吹奏楽部顧問に着任したばかりのあの島崎 大地だった。

「つたく〜……ん？」

カチツと周平と目が合う大地。大地は周平に気づくと「おっ！

吹奏楽部のアルトサクサク吹いてた男の子やん！ どないしたん？」と陽気に挨拶した。

周平は姿勢を正して挨拶をした。

「はい！ えっと、その前にいいですか？」

「うん。何や？」

「えっと、俺……吹奏楽部でアルトサクサク吹いてます、森田 周平といます。以後、よろしくお願いします」

大地は呆気にとられた表情をしていたが、すぐに「ああ！ よろしくな！」と笑顔で返してくれた。

「そんで？ 用事か？」

「はい。あの……今日の部活の指示を聞きに来ました」

「おつ。そうか。ほんなら、今日は皆に大事な話あるから……そうや。1年も何人かもう見学来てるんやろ？」

「はい」

「その子らも含めて、話あるから音楽室に午後5時半に集合って伝えといて」

「はい。わかりました」

周平はペコリとお辞儀をして職員室を出ようとした。

「あー！ ちよつと待て、森田！」

「はい？」

「これ、持って行つといてくれるか？」

そう言つて渡されたのは楽譜が入つた分厚い封筒だった。

「なんですか？ これ」

「新しい曲が入ってる」

「吹くんですか？」

「ほぼ決定やな」

「いつ？」

「それを話すから、とりあえずそれ持つて音楽室行つといてくれるか？」

「はあ……わかりました」

周平はあまりの分厚さに少し驚きつつ、職員室を後にした。

「なあんの曲やろなあ……」

周平は気になつて封筒の中身を出してみた。すぐに出てきたのはフルートの楽譜。タイトルには『A Weekend In New York』とあつた。成績が優秀な生徒に入る周平には、なんてことない英語である。

「A Weekend In New York……。ニューヨークの週末か」

聞いたことのない曲ではあつたが、作曲はあのフィリップ・スパ

「クである。見ると、それほど簡単ではない曲であるのは一目瞭然であった。」

「こんなムズい曲、いきなりどないするつもりなんやろ？」

周平には大地の考えることがよくわからずにいた。首を何度も傾げながら、周平は音楽室の重い扉を開け、楽譜を片手に中へ入っていった。

第003話 述べよ!

「何よ、これは」

愛美に分厚い封筒を渡した。

「知らんがな。島崎先生から渡されたんや」

周平は呆れた様子で楽譜を愛美に手渡し、自分のパートのロツカ
ー前に立つ。

「何やの。渡されたから受け取るだけ？ ちゃんといつどこでどう
いう理由で吹くんか、聞いてくるのが筋やんか」

愛美はブツブツ文句を言いながら封筒を乱暴に机の上に置いた。

「そんなもん、オレが聞かんでも今から島崎先生が来て直接説明し
てくれはるわいな」

「そうなん？」

「そう。そういう指示もろて来た」

「あ……そう。じゃあ、みんなにそうやって指示するわ」

愛美は適当に聞き流し、部員たちに島崎が来る旨を伝え、着席を
指示した。周平も面倒そうに着席し、島崎の登場を待つ。

5分もしないうちに、島崎はペタペタとスリッパの音を派手に立
てながら音楽室に登場した。部員たちは一応、私立高校に通うお嬢
様、お坊ちゃまが大半だ。挨拶なら手慣れたものである。

「こんにちは！」

あまりに揃った挨拶に島崎は驚いていたが、すぐに笑顔になった。

「初めまして。今日から、この吹奏楽部の顧問になりました、島崎
大地と申します。これから、どうぞよろしく申し上げます」

「お願いします！」

周平は優しそうに話す島崎を見て、職員室で何事か喚き散らして
いた時とのギャップの大きさに少し、違和感を覚えていた。

「さて……と。まず、聞いていいかな？」

いきなりフランクな喋り方になったので、少し戸惑う部員たち。とりあえず数名が「はい」と答えた。

「金管セクションリーダー、誰？」

「はい！」

福崎 ふくざき 利緒 りおが手を上げた。トロンボーンのパートリーダーも務めるしつかり者で、常に動きがテキパキとしている。

「うん。まず、自己紹介頼むわ」

「はい。福崎 利緒、3年トロンボーンです」

「うん。福崎さんね。福崎さん。聞きたいんやけど」

「はい」

「君ら、自由曲で『ノートルダムの鐘』やるんやんな？」

「はい！」

利緒はこの曲をできることをかなり嬉しく思っており、人一倍練習に注力していた。そのため、今から急に合奏と言われてもほとんどミスなく吹ける自信があった。

「ほんなら聞きたいんやけど。このノートルダムの鐘。デイズニーで映画になってるな？」

「は、はい」

利緒は予想外の質問に少し戸惑った。

「いつ公開？」

「え？」

「西暦何年公開？」

「え……つと……」

利緒は答えに詰まってしまった。5秒経つとすぐに島崎は「もうええわ」と遮ってしまった。

「木管セクションリーダーは？」

「はい」

和泉 いずみ 朋子 ともこが恐る恐る手を上げた。

「うん。君は？」

「和泉 朋子、3年クラリネットです」

「できれば、手を上げた時に名前と学年、パート言うてな」

島崎は少し不機嫌そうに言った。

「は、はい」

「はい。西暦何年公開？」

「せ、1996年です」

朋子の声が震えていた。島崎はニッコリ笑い「正解」と優しく言った。朋子はホッと胸を撫で下ろす。

「ほんじゃ和泉さん。ノートルダム大聖堂が舞台の作品やけど、ノートルダム大聖堂ってどこにあんの？」

「え！？」

朋子はオロオロした様子でキョロキョロしていた。

「もうええわ。はい、次。君は？」

ビクツと震えたのは、朋子と同じクラリネットの竹中たけなか将輝まさきだった。

「えつと……えーつと」

「名前」

「あつ！ た、竹中 将輝です！」

「はい。竹中くん。場所は？」

「えつと……ええつと」

「はい次。君」

続いて当てられたのはフルートの大平おおひら菜々香ななか。

「はい。フルートの大平と申します」

「はい、太平さん。どこにある？」

「フランスはパリです」

「正解」

菜々香は自信満々と言う様子で笑う。しかし、島崎の質問は容赦なく続いた。

「じゃあ大平さん。ノートルダム大聖堂の最終的な竣工はいつ？」

「えつ……？」

菜々香も黙り込んでしまう。その後、何人もの3年生が当てられ

だが、誰も答えることなどできなかった。

周平はなぜかスルーされてしまったのだが、結局2年生も誰も答えられず、嫌な沈黙が起きた。

不意にドサツ！と音がした。クラリネットメンバーの目の前に『ノートルダム』のスコアが放り投げられていた。

「お前ら、ホンマにこの曲吹く気あるんか？」

「はい」

あっさりそう答えたのは、朋子だった。

「へえ」

島崎は笑顔で答える。そして、その笑顔のまままで続けて言った。

「その割に、この曲のこと全っ然知らんねんな」

「……。」

「ノートルダム寺院のこととか、そもそもこの『ノートルダムの鐘』の物語とかを知らんで、よくまあノウノウとこの曲吹いてられるわ。その神経にビックリやな」

誰も何も答えられなかった。

「主人公は？ どういう職業に就いてるん？ そもそも物語の大

筋は？」

「……。」

周平がそつと手を挙げた。部員全員と島崎が視線を周平に移す。

「はい、森田」

「え……なんで？」

愛美が声を上げた。

「ん？ ああ、俺が森田を知ってる理由？」

愛美が驚いた顔をしてうなずいた。

「さつき、部長の代わりに指示聞きに来た時に仲良くなったよな？」

森田

「へ？」

ニコニコと笑う島崎の目を見て、周平は恥ずかしそうに笑った。

「それで、森田。主人公は？」

「はい。カジモドと言って、ノートルダム大聖堂で、鐘つきをしています。容姿は良くないのですが……。捨て子だったところをフロロに拾われ、育てられた人物です。ヒロインはエスメラルダ。美しいジプシーの娘で、フェビュス、カジモド、フロロの3人から思いを寄せられています」

「うん！ もうそこまでいい。それだけ知ってるだけでも十分だ」
それから全員を一瞥した。

「しっかしまあ……お前ら、曲の中身を知らんとホンマに吹いてるんな。ビツクリするわ」

誰も返す言葉がない。島崎はさらに続ける。

「ま！ 言うとかくけどもうこの曲、コンクールでは吹かへんからな」
一気にざわつく音楽室内。島崎は気にせずどんだん話を進める。

「まあ心配すんな。新しい自由曲候補は持ってきてる。それから、課題曲も変更するからな」

「ちよつと待ってください！」

愛美が怒った様子で立ち上がった。

「もうコンクールまで3ヶ月程度しかないんです！ ムチャクチャ言わんといってください！」

「は。ムチャクチャ？」

「3ヶ月で曲が全部仕上がりとは思いません！」

「やけど、お前ら今の自由曲と課題曲、いつから練習始めたん？」

「1月ですけど……」

「なあんや！ 3ヶ月しか経ってへんやん！ 一緒一緒！ それに1年がこれから入ってくるんやから、結局ふりだしに戻るようなもんや。気にせんと、気持ち切り替えていこう」

しかし、まだ納得の行かない愛美は食い下がる。

「待ってください。ホンマ無理です。私たち、もう『ノートルダムの鐘』でコンクール進む気満々でいてるんで」

「はあ……」

島崎がため息を漏らした。

「あのさあ。お前らの3月の市吹奏楽連盟の定演の音源、聞かせてもらったんやけど」

次の言葉に全員が真っ白になった。

「サイターの演奏やったで」

「……。」

サイター、という言葉が周平の胸に突き刺さった。

「ど、どのへんがですか!? あたしらをバカにすんのも、やめてください!」

ピッコロの氷室 ひむろ 照 てる が激怒して立ち上がった。

「全部や!」

島崎の大声に照が驚いて座り込んでしまった。

「何の表情もない! フォルテもピアノシモもあんまり差がない! ただ譜面の音符をそのまま吹いてるだけ! 物語を思い出させるような雰囲気全然ない! 冒頭の重々しい雰囲気も全然出てないし、そもそもホンマにコイツらノートルダム大聖堂を思わせるような曲やって理解して吹いとんか!? って思わせるぐらい、ヒドい演奏や!」

もはや、言い返せる者はいなかった。

「自由曲はさつき、森田が持ってきた楽譜を使う。『ノートルダムの鐘』のことは忘れる。同じく、課題曲は『オーディナリー・マーチ』から『うちなーのでいだ』に変更するからな」

「……。」

「返事は!?!」

誰も返事をしない。その代わりに、周平がそつと立ち上がった。そして、そのままクラリネットメンバーの間を縫って歩き、そつと、先ほど島崎が放り投げた『ノートルダムの鐘』のスコアを拾い上げた。

「……。」

周平はジッと島崎を見つめる。

「なんや?」

周平は深呼吸をして島崎に言った。

「先生の言うとおりです……。俺も、音源聴いた時にそう思ってた」

その言葉に未樹や大輝が目丸くした。

「でも先生」

周平が寂しそうな目をして訴えた。

「俺らが演奏下手なだけなんです……。スコアを……。こんな、床に放り投げんといってください」

「……？」

島崎も目を丸くしている。部員たちは呆然と周平のほうを見ていた。

「この曲作った人と……。編曲してくれた人に、申し訳ないやないですか」

周平はギュツとスコアを抱くように胸元へ寄せた。スコアがクシヤツ、と音を立てて丸くなる。

「……すまん。悪かった」

島崎が素直に謝った。

「俺……。さっきの新しい楽譜取って来ます！」

周平はバタバタと慌てて音楽室を出て行った。

「……。」

島崎も愛美も、未樹も洋平も、誰も何も言えず周平の背中を見送ることしかできなかった。

第004話 思わず出た感情

「……ビツクリした」

周平は部屋に駆け込んでから、スコアをもつ一度抱き締めるように胸元に寄せながら呟いた。まさか、自分の気持ちがあればほど率直に言葉になって出てくるとは思わなかったのだ。

この部活に入った頃は、あまりに異様な状況に閉口してしまつたが、状況を変えようと必死に頑張つてきた周平。自分の気持ちを率直に言葉にして、先輩や同級生に訴えかけてきた。しかし、それが何をどう頑張つて訴えても裏目になって返ってくる。それが辛くなり、次第に周平は自分の素直な気持ちを部活では吐露しなくなつてきていた。

今となつては、ただ楽器が好きなので辛うじて部活に在籍できているような状況だった。それにもかかわらず、久しぶりにあのような気持ち、まるでバケツから溢れかえるように一気に湧き出てきたのだ。

ノックの音がした。

「森田？」

大地の声だった。

「は、はい」

「入つてええか？」

「はい。あ、いま開けます」

周平が慌ててドアを開けると、すぐに大地が入ってきた。

「良かった」

第一声がそれだった。

「泣いてへんねんな」

カアツと周平の顔が赤くなつた。

「な、泣いてはないです……」

「だってお前、泣きそうな顔して出て行くんやもん。ビックリするわ」

「す、すみません！　そういうつもりじゃなかったんですけど……」
周平は恥ずかしくなって大地の顔を見ることができない。

「ゴメンな？」

大地がそう言ったのを、周平はもう一度聞きなおしてしまった。

「へ？」

「あ、だから……スコア、放り投げたりして、ゴメン。お前の言うとおりやから……」

「……いえ」

周平は少し嬉しくなって、笑顔が久しぶりに出た。それを見た大地が笑いながら言う。

「笑ったら可愛いやんけ。ブスツとしてんと、笑ってたらええのに」

周平が苦笑いする。

「や……まあ、いろいろあるんすよ」

「いろいろ？」

「……じきに先生もわかりますよ」

周平はハッキリ言わずに言葉を濁しながら部屋を出ようとした。

「あー！　ちよい待ち。これ、持って行って配って」

大地は『ウィークエンド・イン・ニューヨーク』の楽譜が入った封筒を周平に手渡した。ズッシリとした重みが、周平の両手に^の押し掛かる。

「……。」

周平はその封筒をジッと見つめた。

「どないしたん？」

「先生」

周平の目つきが突然真剣になったことに、大地は少し戸惑いを覚えた。

「なんや？」

「俺たちね……ここんとこ、関西大会突破どころか、県大会突破す

「ら危うい感じなんですよ」

「そうなんか？」

周平は小さくうなずいた。

「先生」

今度は周平の目が、大地に対する希望のようなものでいっぱいになった、少し潤んだ目になっていた。

「俺……先生を、信じてます」

「……。」

「課題曲変わってもいいです。自由曲も変えてください。お願いです！ 俺を……」

俺を、と言いかけて周平は訂正した。

「俺たちを……全国大会に連れて行ってください！」

「……。」

返事の代わりに、大地はスツと手を差し出した。

「よし。その話、しっかり受け止めた」

周平が笑顔になる。

「その代わりに、ピシバシ行くぞ？ キツいことも言うし、キツいとさせるし。ハッキリ言うて、今のお前らの雰囲気じゃ、俺に明らかに反感持つてるヤツが多いやろうと思う。それでも、俺は俺の姿勢を貫くからな」

「……！」

周平はその言葉に衝撃を受けていた。

「お前は、俺にいま、全国に連れて行ってってくれって言った以上は、俺の練習にしっかり、ついてきてくれるな？」

「……。」

大地が右手を差し出した。

「もしも、ついに行ったらろつやないか、って言うんやったらこの手を握れ。そんなもん、やってられるかいアホ、言うんやったら、握らんでいい。10数えるから……」

しっかり考えろ、と言おうとした大地の右手に、周平の意外と大

きな手がガツシリと交わった。

「え？」

そのあまりの速さに、大地も思わずキョトンとして間の抜けた言葉を出してしまった。

「よろしくお願ひします！」

「……よっしゃ！ お前ならそう言うと思つてた！」

大地と周平は笑い合い、ガツチリと握手を交わした。

「じゃあ俺、この楽譜配つてきます」

「おう。よろしく頼むで」

周平は『ウイークエンド・イン・ニューヨーク』の封筒を抱えて、音楽室へと向かつて歩いていった。

再び開いた音楽室のドアを、部員全員が凝視した。思わず怯みそうになるが、周平はその気持ちにグツと堪えた。

「島崎先生から、新しい楽譜預かりました。これが、今年のお自由曲に正式に決まった、曲です」

「……。」

誰も何も答えなかったが、周平は続ける。

「えっと、楽譜配るんでパートリーダー取りに……」

ガタン！と音がしたので、未樹は驚いてそちらを見た。クラリネットの竹中將輝たけなかまさきだった。将輝は立ち上がり、そのまま周平のほうへ近寄った。そして思い切り周平の襟を掴み上げたのだ。

「何言つてんの？ お前」

「あ、新しい自由曲配るつて言つてる」

「フザけんや。あんなワケのわからん顧問とかいう兄ちゃんに自由に自由曲も課題曲も変えます言つて、お前ははいそうですか、ほな頑張りましようつて言つたんか？」

周平は小さくうなづく。

「先生は、これで全国連れて行つてくれるつて言つた……」

「アホらしくつて付き合つてられへんわ！」

思い切り将輝が周平を突き飛ばした。思わぬ衝撃に周平はそのまま

ま尻餅をついてしまい、封筒と一緒に落としてしまった。将輝は気にも留めず、そのまま音楽室を出て行った。その後も後輩や何人も同級生が出て行ったが、誰も周平に声もかけないまま出て行ってしまった。

「森田くん……」

見かねた未樹が声をかけようとした瞬間、周平は勢いよく楽譜をかき集め、そのまま音楽室を飛び出してしまった。

「……。」

未樹はどうすることもできない自分に複雑な感情を抱きながら、寂しそうに走っていく周平の背中を見送ることしかできなかった。

第005話 数少ない味方

「くっそ〜……ドイツもコイツも俺をバカにしおつて〜」

周平は泣きそうになる気持ちをはえながら、ブツブツと呟きつつ廊下を歩いていった。しばらくすると、パート練習が始まったのか、各部屋から楽器の音が響いてくる。

「……。」

本来なら、パートリーダーに選任されている周平もサックスパーの部屋へ行つて練習を開始するべきなのだが、今日の周平はともではないがそんな気分になれなかった。まだ、サックスには自分に対して異様な敵対心を持っているような部員は少なかったため、気持ち的にはずいぶんと楽なほうだった。しかし、今日ばかりはキツかった。

周平は黙つて屋上への階段を上がり、ドアを開けて屋上に出た。春の匂いがする風が、周平の頬を撫でる。

グラウンドでは運動部が準備体操をしていたり、既に練習試合を開始している部もあった。どの部も本当に楽しそうにしている。本来、部活動というのはああいふ具合に協力し合い、ひとつの目標に向かつて進んでいくものなのだろう。

しかし、現在の吹奏楽部はもはや、バラバラもいいところであった。正直なところ、周平が感じているのは去年から吹奏楽部は破綻状態にあったということである。

周平が夢に見た関西大会での出来事。あれは一昨年、周平たちの学年が1年生だった頃のことだ。それ以前から、既に浜唯高校は関西大会突破もできない状況に陥っていた。そしてとうとう、昨年は県大会突破すらかなわなかったのだ。これが部員たちには大ダメージとなつてしまった。

関西大会出場経験があるのは、周平たちの学年だけになつてしまった。そのせいか、今年もダメなんだろうという雰囲気が入生生の

間にもなんとなく広まっていて、それがいつの間にか波及して、部員たちの士気も低下していた。

「なあんかもう……いろいろアカンなあ」

ハア、と周平がため息を漏らしていた時だった。

「セーンパイッ！」

明るい声が聞こえたので振り返ると、バスーンの八木沼 久美がいた。

「おう。八木沼ちゃん」

久美はこの部活の中で数少ない周平と親しい部員の一人である。快活な性格で、誰とでも分け隔てなく接することができる。やや天然なところがあり、それが何かとストイックで真面目な園田実香子をイラつかせることもあるようだった。しかし、周平にとっては彼女のようなキャラクターはとても安心させられる。

「あたしにも、その新しい曲くださいよ」

「え？ ウィークエンド・イン・ニューヨークのこと？」

「それ以外にないでしょ！」

久美は嬉しそうに周平の横に立った。

「早く、早く！」

「はいはい」

周平はガサガサと楽譜の入った封筒を探った。ピッコロ、フルート、エスクラリネット、オーボエ、トランペットの楽譜が出終わった後ようやくバスーンが出てきた。

「うひょー！ すっごい！ なんか冒頭からめっちゃ忙しいですねえ！」

久美は思い切り嬉しそうに楽譜を見つめた。周平も改めてアルトサクスのファーストの楽譜をしてみる。すると、冒頭に近い部分にソロがあるのだ。それだけではない。ソプラノサクスもあり、かなり目立つ動きをしているところがあるのだ。

（他の部分はどないかってんねんやろ……）

周平は好奇心から、他のパートの楽譜も引っ張り出して見る。す

ると、ホルンにもメロディがある。バスクラリネットにはソロがある。ウッドブロック、グロッケン、シロフォンも大活躍。珍しくトランペットはどちらかというと裏方に徹する部分が多かった。

「へえ」

後ろから別の声がしたので振り返ると、ホルンの相内 良輔がいた。

「あいうっちゃん」

「スゴいですね。これが新しい候補曲ツスカ？」

「ああ、うん」

「どれどれ」

良輔も楽譜を手に取ってみる。久美も良輔も真剣だ。

「なんか、実感湧かへんよね」

急に久美が良輔にそう言ったのだ。

「そっやなあ……。やっぱ、少人数でもいいから吹いてみんなわか
らへんわ」

良輔もすぐに同意する。周平だけはいまひとつ、意味がわかっていないままだった。

「ねえ、先輩」

良輔が再確認する。

「今年、自由曲コレでしょ？」

「あ、まあ多分……」

「ほんなら話は早いですね！ オレら、遅れ取ったらアカンし練習
しましょ！」

「あ、ああ、うん」

「先輩！ 早く早く！」

久美に引つ張られるように、周平は屋上からの階段を駆け下りて
いった。

階段を降りて音楽室に戻ると、心配した表情をした洋平が待つて
いた。

「どこ行っとな！ 心配したやんけ」

「ゴメンゴメン。ちょっとまあ……オセンチになつてたんや」

周平は苦笑いしながら答える。洋平はしょうがないな、というよ
うな表情を浮かべながら言った。

「頼むで。自由曲候補持ったまま、失踪すなよ」

「あ……でもさあ、さつきから聞いてたら、ペットとかは相変わ
らずノートルダム吹いてるけど？」

周平が心配そうに聞くと、洋平は「顧問の島崎先生がウィークエ
ンド・イン・ニューヨーク」を正式な自由曲にする言うてたんやろ
？」と聞いた。

「うん」

「ほな、別にアイツらが勝手に前の自由曲にこだわってるだけやん
け。気にする必要なんてないし」

「そういうもん？」

「そういうもんや」

何のためらいも無く洋平は答えた。

「ま、今ここにおける部員は少なくとも、ウィークエンド・イン・ニ
ューヨーク賛成派ってこつちや」

周平がふと気づくと洋平、久美、良輔以外に部員の姿がチラホラ
あることに気づいた。松本 弓華、三沢 大輝、立花 悠馬、七瀬
猛、藤田 光晃、山口 華名の姿があつた。

「結構多いやろ？」

「……。」

周平は言葉が出なかつた。既に9名が自由曲変更に対し意外にも
あつさりと賛同してくれていたのだ。もちろん、賛同しないという
ことはコンクール自由曲を変更するという顧問の意見に反対するこ
とを意味しているのだ。しかし、この4月に入って自由曲を変更し、
課題曲も変更するというのはかなり危険な行為だとも言えた。

しかし、それを承知でここにいる部員たちは曲目変更を受け入れ
てくれたのだ。

自分は一人ではない。60名ジャストの部員のうちの6分の1だ

が、賛同してくれている部員がいる。それだけで、周平は思わず胸が熱くなってしまった。

「あー！」

洋平が突然叫んだ。

「周平涙目なってるー！」

「ア、アホか！ そんなこと……」

我慢ができなくなった。いつの間に関自分はこれほど涙腺が緩くなつたのかと周平自身驚くほどだった。

「……先輩っ！」

猛が周平の肩を叩く。

「頑張りましょうね！」

「……うん！」

周平は満面の笑みで強くうなずいた。

第006話 そつは言っても

4月10日土曜日。浜唯高校吹奏楽部ではこの日、午前9時から午後5時まで練習になっていた。午後からは課題曲『うちなーのていだ』と自由曲候補『ウィークエンド・イン・ニューヨーク』の合奏をする予定となっていた。

いくら方法がムチャクチャで、自分たちとは合わないと思っっている部員でもさすがに顧問の指示を無視するわけにはいかないと感じたとようで、渋々といった様子ではあるが午前中のパート練習では特にウィークエンド・イン・ニューヨークの練習をしていた。

ちなみに、ここで1年生の状況に少し触れておく。浜唯高校は中学校・高校がそれぞれあり、中学生はそのまま高校に進学するものが大多数である。そのため、1年生と言っても既に部活に本格的に参加している者が多数いるのだ。弦バスの脇川 美琴をはじめ、粟田 雛、竹中 美波、秋吉 和洋など。他にも多数いる。そのため、まだ仮入部期間でもないのだが、1年生の初々しい姿が吹奏楽部でも見られた。

正式には、新入生歓迎会が週明け4月12日に挙行される。さらにその2日後、部活紹介があり、それ以降仮入部ということになる。その日以降に入部届けを出して初めて、部員になれるのだ。

だが、それはあくまで形式上。こうしてエスカレーター式に進学した1年生は、既に部活動に参加しているのである。

午後1時半。

「はい、まいど〜」

ご機嫌な様子で大地が音楽室にやって来る。部員たちは「こんにちは！」と気合いの入った挨拶をするものから、面倒そうに挨拶をするものまで様々であった。

「はい、ほな合奏の前に聞きます。今日、パー練で基礎練習を全員でやったパートは？」

周平が迷わず手を挙げる。それから、将輝も手を挙げた。

「何？ サックスとクラだけ？」

沈黙が流れる。

「あ、そ。ほんじゃま、ええわ。チューニングしよか。はい、竹中から順番に。先生が指示するから、それから入ってきて。ああ、指示された人の二人前の人は、指示された人が吹いたら抜けてな。指示された人は、前の人の音をよく聞いて入ること。はい、行くで」

そう言って大地はハーモニーディレクターでベアの音を鳴らす。

大地に指示され、将輝がベアの音を吹く。そして、隣では伯方^{はかた}未央^みが楽器を構えて準備しているのだが、なかなか指示が入らない。

戸惑っているのは未央だけではなく、将輝も同じような様子だった。そして、息切れした将輝が息継ぎをしようとして一瞬音を止めたと同時に、大地もハーモニーディレクターを止めた。

「竹中」

「はい」

気まずい雰囲気になっているのを周平も未樹も感じ取っていた。

「いつまで吹いてるん？」

「え？」

「音、合ってへんのん、わからなかったか？」

「……。」

将輝は答えない。

「わかってたか、わかってへんかったか聞いてんの」

「……ちよつと、合ってない気はしてました」

「あ、そう」

大地が目を丸くする。

「それなのに、いつまでもアホみたいにポケーと音、吹いてたん？」

「……すいません」

「はい、出て行って」

「え？」

将輝が驚きの声を上げた。驚いているのは彼だけではない。隣に

いる未央も、後ろにいる弓華や照も驚いていた。

「そんな合わす気もない人はいりません。出て行って音程しっかり合わせてから戻ってきてくださいませ」

「……。」

将輝が悔しそうに唇を噛み締める。

「早はよ行け！」

「！」

大地の大声にビクッと将輝が体を震わせて、慌てて部室のほうへ駆けていった。

「はい、次。伯方」

「はい」

未央は緊張のあまり音が震えて頭から音程が乱れた。

「はい、退室」

「……。」

未央も悔しそうにながら部室のほうへと向かう。続いては、朋子である。朋子はいつもどおり、深く息を吸って芯のある音を吹いた。納得した様子の大地は田中 雅貴たなか まさたかのチューニングを始める。雅貴も無事クリア。倉吉 晴菜くらのよし はるなも無事通過。平群 明巳へぐり あけみ、近江 亜梨さ もくりあしたが、1年生で将輝の妹である美波は退室させられてしまった。続く弓華も無事通過。その後のピッコロ、フルートはなんと全員が退室させられてしまった。

そしてその後、全パートをチューニングし終えてから残っていた部員は以下のメンバーだった。

- ・ 和泉 朋子
- ・ 田中 雅貴
- ・ 倉吉 晴菜
- ・ 平群 明巳
- ・ 近江 亜梨沙
- ・ 園田 実香子

- ・八木沼久美
- ・森田 周平
- ・大西 優花
- ・山口 華名
- ・藤田 光晃
- ・七瀬 猛
- ・金木 愛美
- ・木下 美里
- ・福崎 利緒
- ・佐藤 洋平
- ・相内 良輔
- ・三沢 大輝
- ・後藤 未樹
- ・京谷 航平
- ・脇川 美琴

パーカッションを除くと、壊滅状態だった。フルート以外で全滅パートこそなかったものの、トランペット、トロンボーン、ユーフォニウム、ホルンは全滅寸前。完璧だったのは未樹と京谷 航平のいるチューバのみだった。

「なんちゆう結果や……最悪やな」

大地もさすがにこれには参ったようで、大きなため息を漏らした。
「まあ……しゃあないな。もうええわ。とりあえず、追い出した部員たち悪いけど部長、呼んできてくれる？」

「はい」

愛美は渋谷部室へと歩いていった。

「はい。えーっと」

大地はしばらく言葉を選ぶのに迷っていたようだったが、バツサリ遠慮なく切り捨てる方向を選んだ。

「残念ながら追い出された人は、練習不足はなはだしいです」

その言葉に将輝や月島つきしま 拓久たくひさ、岡本おかもと 充香みかがシヨツクを隠せない様子になる。

「それから、今回通過した人の中でも、正直きわどい人が多くいます」

未樹や航平が複雑そうな表情を浮かべる。

「とりあえず、ウィークエンド・イン・ニューヨークの初見合奏します。はい、楽譜用意して」

「はい！」

負けてはいられないとばかりに部員たちも気合いを入れて返事をする。いつの間にか、大地に対する変なイジの張り合いのようなものは消えていた。

「いくで？」

「はい！」

大地が指揮棒を振り下ろすと、真っ先にチューバの伸ばしが響き渡る。そしてトランペットや木管、グロッケン印象的な音が響いてくる。

「そのサスペンドシンバル下手くそ！」

葉月はづき 佳穂かほがしかめっ面になる。

「コラー！ なんやそのソプラノサククス！」

和洋の吹くソプラノサククスに怒鳴り声をぶつける大地。

「ヘニヨヘニヨやないか！ やる気あんのか！？ トロンボーンもじゃ！ 酔っ払いかホンマ！ 情けない音吹いとつたらアカンで！」

続くは、バスクラリネットの上昇音系。同じ形をクラリネットも吹いている。

「コラー！ ごぼごぼごぼごぼ言うてて何の音やらサツパリわからへん！ クラリネットからソプラノに受け渡す形、上手く吹けや！
そして、周平がサククスソロを吹く前に大地が曲を止めた。

「もうう、どうしようもないくらい下っ手クソで先生は大変驚かされました」

「……。」

誰も何も言い返せなかった。何せ、楽譜すら未だにマトモに読めないのだ。楽譜をもらって数日経過していたが、それでこの出来である。

「今日は合奏、これで終わり」

「え？」

愛美が驚いて目を点にしている。

「後はパート練習でもう一度、よく課題曲も自由曲候補もさらっておいてください」

「……。」

「返事！」

「はい！」

大地が出て行った後、部員たちはポカンとした様子でしばらく座っていたり、その場で立ち尽くしたりしていた。

(言ってることキツいけど……顧問やしな。あれでも一応)

周平は大地に驚かされっぱなしだなと思いつつ、楽譜を手にとって音楽室を出ようとした。

「どこ行くん？」

愛美が慌てて周平を止めようとする。

「どこって……パー練ですよ。あ、サククスパートさん。2時からロングトーンやって、ほんでウィークエンド・イン・ニューヨーク練習するからヨロシク」

「は、はい……」

微妙な空気を破るように、周平は音楽室をそつと後にした。

第007話 真つ黒な楽譜

「先輩、まだ練習されるんですか？」

山口 華名が楽器を片付けながら聞く。

「あー、うん。なんかかなり強引やし、恨まれそうやけど秋吉からソロもろたし……。あさつての合奏でダサイことならへんように、もうちょっと練習していく」

「そうですか……」

華名が少し寂しそうに呟いた。

「まあ、山口さんも部活復帰してすぐに、島崎先生の登場とかあって気疲れしたやろ？」

「いえ！ あたしはそんな！」

華名は首を激しく左右に振った。

実は、華名は昨年11月から今年の2月中旬まで休部していた。どうしても人間関係でいざこざの多いこの部の状態に、繊細で人に気遣いのできる華名は気疲れしてしまい、結果として休部してしまったのだ。

周平はこの時、かなり悔やんだ。どうして毎日同じ空間にいて、同じ曲を練習して、同じ楽器を吹いてきた仲間の苦しさを理解してやれなかったのか。

表面上は気づいていた。「大丈夫か？」と声を掛けることも一度や二度ではなかった。そのたびに華名は「はい。大丈夫です」とやわらかく答えていたので、周平も安心しきっていたのだ。その矢先突然華名が休部したと前の顧問から告げられたのは、定期演奏会終了翌日のことだった。

その日から、少しでも元気になってもらうために周平は週1回、部活を早退して華名の家を訪ねた。幸い、華名の母も理解ある優しい女性で、娘が部活を休部するほどに追い詰められたにも関わらず、その部活の生徒を家に招きいれてくれたのだ。周平は華名の母にも

感謝してもしきれないものがあつた。

けれども、その間にいつの間にかソプラノサックスの座が周平から、まだ入部資格すらない和洋に移されていた。これには周平もキツネにつままれたような感覚になった。当時の顧問にはあっさり「先生が決めたことだ」と言われてしまい、周平は抗議するのモアホらしと思ひ、何も言わず押し付けるように和洋にソプラノサックスも、楽譜も手渡した。

そして、3月初旬から華名はきちんと部活に来るようになった。周平にしてみれば、華名のその元氣そうな姿を見るだけで十分だつた。

しかし、それから事態は急転直下。ソプラノサックスが大地の指示によりあつという間に周平の手元に帰ってきたのだ。それと同時に、ソロ奏者という立場も一気に周平と同じ3年である大西おおにし 優花ゆかに舞い戻ってきた。もちろん、2人は最高学年なので、ソロはもちろん、ソプラノサックスなども原則として優先的に吹く立場にあるのだが、いかんせんこの浜唯高校ではそうした自明のことも流されてしまうような事態になっていたのだ。

「……久しぶりやなあ、ソロなんて」

早速、『ウイークエンド・イン・ニューヨーク』の序盤部分にあるアルトサックスのソロを吹く。これ以前に、ソプラノサックスのソロがあるが、そちらは優花に任せている。

周平はiPodの電源を入れ、彼が吹くことになったソロ部分から再生する。それに合わせて演奏する周平。気に入らない部分が出てくるとすぐに音源を止め、メモを楽譜に記入する。

ニューヨークというと、周平の中ではかなり大人の世界というイメージがあつた。周平が一度行ってみたい都市でもある。まだ見知らぬ街。周平はそんなニューヨークをイメージしながら何度も何度も冒頭のアルトサックスソロを練習した。

「ん？」

午後7時45分。部員は周平以外帰つたはずなのだが、なぜか音

楽室は電気が点いていた。

「誰か消し忘れたんかいや」

周平は電気を消そうと部屋に近づいて、足を止めた。

チューバの音が響いてきたのだ。周平はそつと柱の影から音楽室を覗いてみた。案の定、部屋には後藤^{ごとう} 未樹^{みき}がいた。

「……………」

周平は声を掛けようかどうか迷ったが、女子一人をほったらかしにして帰ることに気が引けたので、思い切って声を掛けた。

「後藤さん」

「あ」

周平に呼ばれて未樹が反応する。

「森田くん……………」

不自然なよそよそしさの残る二人。

「俺、そろそろ帰るんやけど。自分、どうする？」

「あ……………あ、ほな、鍵閉めんとアカンよね」

「いや、別にそんな急がねんけど……………」

「いいよいいよ。あたしもそろそろ帰ろうって思ってたし。急いで

片付けるわね」

未樹は慌てて楽譜を畳んで、譜面台を片してすぐに音楽室を飛び出した。

「……………」

周平は電気を消そうとして、部屋の中に楽譜が一枚落ちているとに気づいた。

「落とし物すんなよな」

周平は呆れた様子で楽譜を拾い上げて、衝撃を受けた。

新しく課題曲候補となった、『うちなーのていだ』の楽譜であった。しかし、まだ配布されて数日しか経っていないにもかかわらず、既に楽譜は何ヶ月も経過したかのように、たくさんの書き込みで真っ黒になっていた。

「すっげ……………」

周平は言葉を失った。まさか、未樹がこれほどにまでこの曲に練習時間を費やしているとは思ってなかったのだ。

ガラ、と音がして音楽室の扉が開いた。

「あ……これ」

周平がぎこちない様子で楽譜を手渡す。

「……ありがとう」

未樹もぎこちない動きで楽譜を受け取った。

「……。」

会話が生まれない。そもそも、この二人はここ一年ほど、まともな会話すら交わしていないのだ。それ以前に起きたあの出来事が、二人の間に重く押し掛かっていた。

「帰ろっか」

未樹がにこやかに笑う。驚くほどに自然な笑顔だった。

「うん……」

「あ、そうや。あたしが鍵掛けとくわ」

「え？」

「構わんよ。森田くん、先に帰つといて！」

「せやけど……」

「いーから、いーから！ はい、お疲れ様！」

「お、おう」

周平は半ば強制的に先に帰らされてしまった。

「……。」

周平はなんとなく落ち着かないので、悪いと思いつつ階段の少し横にあるスペースに隠れて未樹が出てくるのを待った。

「……」

しばらくすると聴こえてきたのは、自分たちが少し前まで練習していた課題曲『オーディナリーマーチ』のメロディだった。しかし、未樹の楽器はチューバである。伴奏中心のはずの彼女が、なんとソラでメロディを口ずさんでいるのだ。

「パツパツパツパツパーン　タラララッターン」

実に楽しそうに歌う未樹。終盤部分だった。そして、鍵の閉まる音と同時に未樹の歌う課題曲が終わりを告げる。そうかと思っていたら、どうやら聴いているiPodの再生がリピートされたようで、今度は裏メロディを歌い始めた。フルートのトリルからユーフォoniumの裏メロディまで。まったくもって、完璧だった。

「……楽しそうやな」

周平は思わず呟いていた。どうしてもこの吹奏楽部にいると、人間関係のいざこざで疲れてしまい、音楽を純粹に楽しむことを忘れそうになってしまう。しかし、未樹のような部員がまだいることに、周平は安堵していた。そして、自分もまた、音楽を心から楽しみたい。そう思っていたのだ。

声を掛けようかどうしようか、周平はかなり迷った拳句、掛けずに彼女の背中を見送ってしまった。

周平と未樹の関係が微妙な理由。それは遡ること2年前。周平と未樹が吹奏楽部に入ったばかりの2008年4月のことであった。

第008話 心の距離

2008年4月。森田 周平（当時15歳）が吹奏楽部のポスターをジッと見ていると、突然後ろから「ねえ！」と声を掛けられたので彼は驚いて後ろを振り向いた。

「あなた、吹奏楽に興味あんの!？」

異様に馴れ馴れしい言葉遣いに周平は少し違和感を覚えたが、名札のバッジの色を見てすぐに同学年と分かり、警戒心を解いた。

「うん。中学校からオレ、サククス吹いてるから高校（こ）でも続けようって思ってたから」

「そうなんやー！ あ、あたし4組の後藤 未樹！ あたしも吹奏楽、中学からやっててな。チューバやねんけど！ ホンマは友達連れて行くのかなあって思ってたけど、なんか行かへんって言うからどないしょーって思ってたんよ」

間髪いれずにしゃべり続ける未樹に少し戸惑いながら、周平は相槌を打った。

「ほんでさあ、せっかくやねんから、一緒に見学行かへん？」

「へ？」

周平は目を丸くした。

「せやからあ！ 見学、一緒に行こうって!」

「あ……でもいきなりそんなん」

「いきなりでも全然問題ないって！ だって、自由に見学来てくださいって書いてあるやん！」

「そういう問題やなくて」

周平が言いたいのは、男女がいきなり一緒に部活見学に来ると何だか妙な勘違いをされそうな気がするということだったのだが、未樹はまったく聞く耳持たずだ。

仕方なく、未樹に引つ張られる形で吹奏楽部の見学に行くことになった。

「すみませーん！」

未樹の大声が音楽室中に響いた。すると、当時の部長であった女子生徒が「はい！」と元気な顔をヒョコツと音楽室の扉から出した。

「見学に来ました、1年4組の後藤 未樹と……あんだ、名前は？」

「は？」

「は？やなくて、名前！」

周平はこの後藤という女子が自分の名前も知らずにいきなり話し掛けてきたのかと思うと、不思議で仕方がなかった。ひとまず、周平は戸惑いながらも部長に挨拶をする。

「1年2組の、森田 周平です」

「……ふーん」

冷めた声と表情に周平はドキツとした。嫌な感じが背中をなぞっていく。しかし、未樹は全然そんな冷めた気配を感じず、「頑張りますのでお願いします！」と早くも入部意志を見せていた。

周平のいやな予感はズバリ、的中した。

周平が入部した当時、部員数は周平たち1年生を含めて96名にもなっていた。当然、コンクールに1年生が出られるはずもなく、日々パート練習で厳しい指導を受け、下級生なのだから当然とばかりに部室や音楽室の掃除、参加もしない合奏の準備と片付けに追われていた。とてもこれでは普通に練習することもできない。

そうした状況で鬱憤が1年生の間に積もっていったのだ。そして、拳句の果てにそれらに耐え切れなくなり、34名も入部した周平たちの学年も、徐々に退部する者が増えていった。

それらの鬱憤を爆発させたのが、周平と未樹だったのだ。自分たちも対等に部活に参加したいと顧問と部長、パートリーダーに訴えた。しかし、顧問は「運営も基本的にお前らに任せてるから」の一点張り。仕方なく、周平と未樹は部長、副部長、パートリーダーに現在の状況を改善してほしい、と訴えたがこうだったのだ。

「なんなん？ 部の方針に従われへんわけ？」

驚いて周平と未樹は目を丸くした。しかし、部長は続ける。

「聞いとん？ 人の話……」

「聞いてます」

未樹がハッキリと続けた。

「せやけど、おかしいもんはおかしいと思うんです。それを直してほしいうて、意見を述べさせていただいたんです」

すると、それまで黙って状況を聞いていたチューバのパートリーダーが立ち上がり「後藤さん、ちょっといい？」と彼女を連れてパート練習部屋に行ってしまった。

それは周平も同じだった。そして、耐え難い時間が始まった。

「どういづつもりなん？」

「部の雰囲気……変えたくて。エへへ」

「笑わんといってくれる!？」

ビクツと周平は体を震わせた。

「こつちは真剣やねん」

「すみません……」

先輩は面倒そうな表情で言った。

「中学の時は自由気ままにできたかもしれへんけど。ウチの吹奏楽部は伝統つてのがあるんよ。わかる？」

「……。」

「わ・か・る？」

先輩の強い口調に周平は少しひるみそうになった。しかし、部の雰囲気や方針が古いので、何とか変えたいと思う周平はこのまま負けるわけにはいかないと考え、さらに答える。

「……わかります。でも、いつまでもずっと同じままじゃきつとよおないと思うんです。やから、ちょっとでも状況変えたいと思うんです。1年が何言つとんねんって思われるかもしれませんが」

「わかってんねやったら、1年が部のことにギヤーギヤー口出さんとして」

「……。」

「返事は!？」

「……はい」

周平はかなり渋々返事をした。そして追い出されるようにパート練習の部屋を出ると、先ほどほぼ同時に呼び出された未樹がトボトボと廊下を歩いてきた。

「よお、後藤」

「ああ……」

「どないやった？俺はなんか部の方針やねんから、この雰囲気はぶち壊すようなことせんといてくれって言われてさ」

「森田くん」

未樹の落ち着いた声に周平は思わず喋るのをやめた。

「うん？」

「あたし……森田くんのこと、手伝われへんようになった」

「は？」

周平は未樹の言葉をまったく理解できなかった。

「ちょ、ちょお待てや後藤。なに言つとん？」

「森田くんのこと、手伝われへんようになった……」

未樹は同じことを小声で繰り返した。

「な、なんで……？」

「……。」

未樹は俯いたまま答えない。

「先輩に、言われたからか？」

ビクツと未樹の体が反応する。かなりの間を開けて、未樹は小さくうなずいた。

「は……そうでっか」

周平は大きいため息を漏らした。

「いいですよ。いいですよ。そうですね。先輩との関係、大事ですよね」

未樹はハツと気づいたようにフォローを入れる。

「でもあたしに手伝えるコトあったら」

「今さらさあ、何言うてんの？ 今さっき、俺のこと手伝われへんようになった言うたんちゃうん？」

未樹は戸惑いつつ「そうは言うたけど、でも、陰ながら手伝えることがあるかなあって思ってた」と答えた。その言葉に周平はますます苛立ちをあらわにした。

「あのさあ！ 手伝われへんようになったんやろ！？」

「……。」

未樹は俯いて小さくうなずいた。

「鬱陶しいねん！ 手伝われへんようになったのに、陰ながら手伝えたいとか！ あれやろ。どうせ先輩とか同級生とかに悪く思われるんが嫌なんやろ？ そうやんな。敵なんか作って部活しとおないわな！ そうですな〜そうですな〜！」

「ま、待って森田くん」

「馴れ馴れしく呼ばんといてくれますか？ 後藤さん」

「……。」

周平は自分でも最低なことを言っているのはわかっていて。しかし、味方だと思っていた人物がこうも呆気なく味方でなくなってしまうのは、もの凄い空虚感を生み出してしまふ。周平は胸が苦しくなり、涙が出そうになった。

「もうええわ」

吐き捨てるように周平は言った。

「なかったことにしよ」

「……。」

未樹は泣きそうな顔をして周平を見つめる。その表情を見て周平の心が一瞬グラついたが、彼の決心はなんとか揺るがなかった。

「俺とアンタはもう、まあちょっと心の距離がある、ただの部員同士。そういうわけで、よろしく。まあ、必要最低限の会話だけできればええんちゃう？」

味方だと思っていた人物の謀反は、いつもの周平の優しさや明るさを一瞬で奪っていき、卑屈な考えと言葉を次々と溢れ出させた。

「もうええよ。一緒におつたらおかしいやん。練習戻ろう」

周平は踵を返してパート練習の部屋に戻り始めた。しかし、これだけは言っておきたかった。

「俺は」

未樹がハツと顔を上げる。

「この部をこのままにしとくつもりはない。独りになっても、絶対意地でもこの部を変える。やから、部活を辞めるつもりもない。ただの掃除係になろうが、ワザとコンクールメンバーから外されようが、絶対に辞めるつもりはない」

これは自分への宣言でもあった。絶対にそうするとこの瞬間、周平は誓ったのだ。

そしてこの日以来、未樹と接触することは皆無に等しかった。事務的な会話すらない、すれ違いの日々。お互いの苗字を呼ぶことも月数回というような異常事態だった。

気づけば、そんな状態のまま最高学年になっていた。周平は最高学年である今年2010年が、最後のチャンスだと考えていた。

部を変える最後のチャンス。

そして、もうひとつのチャンスはこの2010年しかないと、彼は確信していた。

第009話 化けの皮、はーがれた！

「おーい！ 集まれえ！」

翌日曜日。突然、大地がパート練習をしている部屋に入り込んできたのでサククスパート全員が目丸くした。

「ど、どないしはったんですか？」

「いやあ〜！ ほれ、12日に新入生歓迎会あるんやろ？」

「あ、ええ。ありますけど……」

「あれに出てくれて校長に言われてな！ 出るで！」

これには周平も驚きを隠せなかった。

「え、ええ！？ ちょ、先生！ だって明日でしょ！？」

「そつやで！ 明日やから、午後から急いで合奏するで〜。これ、吹く予定の楽譜置いとくから、よろしくな！」

そつ言つと大地は扉を閉めて隣のクラリネットの部屋へ行つてしまった。

「……正直、俺はついていけませんけどね」

和洋が大げさにため息を漏らして楽譜を一瞥する。周平が手にした楽譜を見ると、いきものがかりの『じょいふる』、ニューサウンズインブラスの『第三の男』と『デイズニー・クラシックス・レビユー』が置かれていた。

隣のクラリネットでもサククスパートと変わらず飄々とした雰囲気大地は楽譜を置いていった。呆れた様子で未央と朋子が楽譜を手取る。

「うわあ〜……さすがやな。ポップスばかりやで」

今まで学校内で演奏する機会があつても、クラシックや吹奏楽オリジナルが多かっただけに、ポップスを演奏するのは本当に久しぶりだったのだ。

「どんなんやねん」

将輝がその3曲のうちの1曲を手を取った。その途端、将輝の目がキラキラと輝きだしたのだ。

「ど、どないしたん竹中くん？」

未央が驚いて尋ねる。

「これ、ホンマにするんか!？」

「す、するんちゃうの? 先生が楽譜置いて行っただし……あ、竹中くん!？」

未央の言葉を最後まで聞き終わらないうちから、将輝は職員室に向かつて駆け出していた。

大地がウィークエンド・イン・ニューヨークのスコアとにらめっこしていると、「島崎先生!」という大声が職員室中に響いたので、大地も他の先生も驚いて入口のほうを振り向いた。そこには将輝が肩を揺らしながら立っていた、

「静かにせんかいな! 職員室やで?」

大地は慌てて将輝のところへ駆け寄って声をかける。

「ほんで、どないしてん?」

「あ、あのっ……『じよいふる』って、吹くだけですか!？」

「吹く以外に何があんねん?」

大地はキョトンとした表情で返す。

「あの、PVにダンスあるじゃないツスカ!？」

「あー……あのポッキーのCMのんか?」

将輝はウンウンと大きくうなずく。

「あのダンス、やったらあきません!？」

「へ?」

大地は呆気に取られてしまう。しかし、目をキラキラと輝かせる将輝の表情に押され、思わずこう答えてしまった。

「別にアカンことはないけど……」

「ありがとうございます!」

将輝は最後まで聴き終わらないうちに、職員室を飛び出していた。
「なんや、アイツ……」

大地は頬を掻きながら首を傾げるしかなかった。

実は将輝はいきものがかりの熱狂的ファンである。いきものがかりのコンサートにはすべてと行って良いほど参加している。これまでに、部活も何度か家庭の事情と称して休み、コンサートに参加したことがあるほどだ。

そして、何を隠そう熱狂的ファンである将輝は、この『じよいふる』のプロモーションビデオで公開されている、実に楽しそうなダンスをすべて踊ることができなのだ。カラオケへ行くことも稀にある将輝だが、一人カラオケの時には踊り狂っている。じよいふるの演奏が決まったならば、このダンスは絶対に踊りたい。将輝はそう考えていた。

おまけに、新人生歓迎会だ。盛り上げた者勝ちだと彼は考えていた。

階段を駆け上がった将輝が真っ先に駆け込んだ部屋は、トランペットの部屋だ。

「金木！」

部長の愛美の部屋に駆け込む。

「どうしたん？ 珍しく慌てて……」

「お前、じよいふるのダンス踊れたりせんか！？」

「は……？ 何、それ」

愛美の反応にガツクリ肩を落とす将輝。

「ええわ！ ありがとう！」

「へ？ ああ、うん……」

愛美は隣のトロンボーンの部屋に駆け込む将輝の背中を呆然と見つめていた。

ロングトーン真っ最中であつた利緒は、いきなり開いた扉の音の大きさに驚いて飛び跳ねた。

「ビックリさせんといてよ！ 竹中くん！」

「ゴメン！ あのさ、この中でいきものがかりのじよいふる歌える人おる！？」

利緒、讓、進士の3人が顔を合わせる。

「俺は歌えますけど……」

進士が小さく手を挙げた。

「ほな、PVのダンス踊れる!？」

「それはさすがに無理っすよお」

「そうかあ……すまん、邪魔して! ありがとう!」

その後も将輝はあらゆるパートの部屋に駆け込んでいったが、返ってくる答えは「踊れない」ばかり。将輝はそのたびに落胆していた。

将輝が通り過ぎていった後のパートの部屋では、ざわめきが起きていた。あのクールな将輝が躍りになって、ダンスをできる部員を探しているのだからその衝撃はかなり大きかった。

最後に残ったパートを見て、将輝は大きいため息を漏らした。

「サックスか……。一番行きたくなかったけどなあ」

将輝は渋々サックスパートの部屋の扉を開けた。

「……失礼しまーす」

周平が将輝の姿を見て目を丸くした。

「ど、どないしたん？」

優花も滅多に姿を見せない将輝の姿に目を丸くする。

「あ……あのさ……」

将輝は大声で彼らに聞いた。

「この中で『じょいふる』のダンス踊れる人おる!？ PVのダンスやねんけど!」

「踊れるよ」

即答したのは、なんと周平だった。

優花、和洋、光晃、猛の4人が驚いて目を丸くする。

「踊れんの!？ 森田くん!？」

優花が驚いて大声を上げた。

「うん。だってオレ、いきものがかり大好きやから……うわ!？」
将輝が手を握ってきたのだ。

「ホンマか!？」

「う、うん」

「ほな、お願いがあんねん！」

「何？」

将輝の勢いに押されるまま、周平は問い掛ける。

「俺と一緒に新入生歓迎会でダンス、踊ってくれ！」

目が点になってしまふ周平。

「お、踊ってくれへん?じゃなくて、踊ってくれ？」

「頼む! な!?! 場を盛り上げるんにちょうどええやる!?!」

周平は押されるがまま、うなずいてしまった。

「やったああああ! ホンマやで!?! 約束な!」

「わ、わかつたわかつたから!」

「よっしゃー! やる気出てきたあ!」

将輝は大声を上げてクラリネットのパート練習の部屋に戻っていた。啞然とした様子ばかりのサックスパートの面々。優花は「ホンマに踊るん?」と周平に聞いた。

「あそこまで熱望されちゃあなあ……」

周平が苦笑いする。

「せやけど……アイツ、クールなヤツやと思つたのに……。なんか、化けの皮剥がれたな」

周平はクスツと笑った。何か熱いものがこみ上げてきた。不思議な気持ちだったが嫌な気持ちではなく、気持ちの良い感情であった。

第010話 羞恥心なんて飛んでけ！

「はい！ほんじゃ、合奏始めようか！」

大地がご機嫌で指揮台に立つ。愛美はやはりまだ複雑そうな表情で「起立、礼」と挨拶をした。部員たちは一応、大声で「お願いします！」と挨拶をする。大地はその一応、という雰囲気を知りたのか、微妙な笑みを浮かべるだけだ。

「ほんじゃ、じよいふる行こか。どないや、竹中と森田。踊り、できるか？」

「はい！」

将輝がやる気マンマンという様子で答える。

「森田も、大丈夫やんな！？」

「う、うん」

周平は初めて将輝に笑顔を向けられた気がしていた。悪い気はない。

「そんじゃ、頭から通すから1回、踊ってみてくれへんか？」

「はい！」

未央と朋子が顔を合わせる。こんなテンションの将輝は確かに今まで誰も見たことのないものだ。

周平は将輝と並んで前に立つ。後ろから部員たちの視線が刺さっているような気がする周平は、なんとなく落ち着かない。一方の将輝はと言うと、踊る気マンマン。心なしか頬が紅潮しているようにも見えた。

とりあえず、PVの流れどおり冒頭は箒をギターに見立てて弾く素振りを見せることにしている。そして歌詞が始まる部分から箒を置いてダンスを始める。サビの部分で一番有名な、あのポツキーのCMと同じ踊りを披露することになっているのだ。

ふと周平が大地を見ると、笑いをこらえているのが丸わりの状

態だった。周平は思わず赤くなる。すると、その様子に気づいた将輝がダンスを止めて大地に文句を言い始めた。

「ちょ、先生！　なんで笑うんですか!？」

「いや……ホンマごめん！　ごめん……でも、ちょっとだけ……アハッ、アハハハハハ！」

大地が笑い始めると、すぐにその笑いが連鎖していき朋子、未央、悠馬、利緒が笑い、気づけば部員のほとんどが大笑いしていたりクスクスと堪えつつも笑っていたのだ。

「なんなんですか！　俺ら真剣やのに！」

将輝も真つ赤になつて地団駄を踏み始める。

「いやいや……ええよ、コレ！　ええと思う！」

「ほななんで笑うんですか!？」

「いや……竹中、お前身長何センチ？」

「178ですけど？」

「森田は？」

「168です」

「その10センチ差！　それがええねん！　可愛い！」

大地は相変わらず笑い声を上げながら改めて二人を見つめる。

「ふん……ええな。おもしろい、おもしろい。今度は笑わんからさ、ちよつと初めから終わりまで通してみよう」

「約束ですよ？」

将輝と周平はなんとなくまだ恥ずかしさが吹き飛ばせずにはいたが、やはり安定した部員たちの演奏を聴きながらであれば、ダンスは完璧に覚えている二人にとって、踊ることはまったく苦ではなかった。ふと、将輝と目が合った周平は、その瞬間に笑みを浮かべていた。

「！」
それに気づいた将輝も少しだけだが、ニツコリ笑ってくれていた。誰も気づいていない、二人だけのわだかまりが溶けた瞬間であった。合奏が終わってからすぐだった。

「森田」

将輝が周平を呼んだ。

「ん？」

「お前……今日部活終わった後、予定ある？」

「いや……。なんもあらへんけど。どないしたん？」

「ちよつと俺とメシ、行かん？」

「お前と俺が？」

「嫌か？」

将輝が少し残念そうな顔を浮かべる。周平は何だか断るのも悪い気がしてしまい「嫌なわけないやろ。ちよつとビックリしただけ」と答えた。

将輝はすぐにイタズラっ子っぽい顔になる。

「やった。ほな、片付け終わったら部室で待ってる」

どろろという風の吹き回しなのか。将輝の考えがまったく読めずにいた周平は、イエスと返事したことを今になって若干後悔していた。

楽器を片付け終えてから、いつもなら周平は特に用事もなく、悠馬や大輝、洋平とタイムリングが合えば一緒に帰る。そうでなければ、サツサと一人で帰ることがほとんどだ。しかし、今日は将輝が来るまで待たねばならない。

ソワソワ落ち着かない周平。目の前から次々と後輩や同級生が出て行く。気づけば、残っているのは将輝、周平、未樹。それからトランペットの木下きのした美里みさと、バースンの八木沼久美、ホルンの安本やすもと桃ももが残っていた。

「モーりたっ！」

将輝が嬉しそうに周平の前に顔を出す。

「お、おう。片付け、終わった？」

「うん。ちよつとな、音楽室来てえな」

「へ？」

「お願い！ ちよつと教えて欲しいことあんねん！」

「……はあ」

周平は将輝に促されるまま、音楽室へと向かっていく。そして、

音楽室に入って開口一番、将輝が言った。

「お前……俺らに黙ってること、あるやる」

「へ？」

「隠そうったって、無理やで」

将輝はそう言ってひとつのDVDをセッティングした。それを見た瞬間、周平の胸がドキドキと激しく脈を打ち始めたのだった。

コラム 1 周平と洋平の関西弁講座

「なんや、このタイトル」

周平が渋そうな表情をする。

「そんな顔すんなやー！ タイトルのままやないか！」

「え？ じゃあオレらが関西弁の説明すんの？」

「せやせや」

ますます渋そうな顔をする周平。

「何が気に入らんねん？」

「全部」

「全部で……」

洋平が苦笑いする。周平は声を大にして言った。

「そもそも、毎日オレらが喋ってる言葉を今さらなんで説明せなアカンねん！」

「いや、でも関西地区に住んでる人ら以外は明らかにわからへん言葉とか、なんとなくく雰囲気でしか意味わからん、っていうコトあるかもしれへんやろ？」

「ん……それはあり得るけど」

「せやる？ んでな、今回は標準語」

「ちよつと待て！」

周平が洋平の言葉を遮った。

「今度は何やねん！」

「標準語言うのやめろや！ オレ嫌いやねん！」

「はあ？」

洋平が今度は渋そうな顔をする。

「ほな、どない言うねん？」

「東京弁って言え。なんか、何でもかんでも東京を基準にされんの、

「ごつつ嫌いやねん！」

「せやけど、東京の言葉はみーんなどの地方行ってもたいがい通じるんちゃうか？」

「ウ……………」

「まあ、周平の気持ちわからんでもないけど、ここは妥協しようや」「うん……………」

周平はまだ不服そうであったが、とりあえずは折れたようだ。

「ほんで！ 関西弁と標準語を比較するために今回は特別ゲストです！」

「で、ゲストが彼女と？」

「そう！ この部唯一の関東出身、バスクラリネット奏者の安西菜砂さん！」

菜砂が恥ずかしそうに出てくる。

「よろしくなあ！」

「は、はい！」

少し赤くなりながら菜砂がうなづく。

「ほな、早速やけど……………。とりあえず、関西弁と東京弁の比較する？」

周平は意地でも標準語と言わないつもりのようなうだ。二人は苦笑いしつつうなずいた。

「じゃあ、たとえばさっきのオレらの台詞を標準語に言い換えよか？」

「おう」

< 関西弁 >

「そもそも、毎日オレらが喋ってる言葉を今さらなんで説明せなアカンねん！」

「いや、でも関西地区に住んでる人ら以外は明らかにわからへん言葉とか、なんとなくく雰囲気では意味わからん、っていうコトあるかもしれへんやろ？」

「ん……それはあり得るけど」
「せやる？ んでな、今回は標準語」
「ちよつと待て！」

「この文章を安西さんに標準語に書き換えてもらったんが、下のヤツやねん」

<標準語>

「そもそも、毎日オレらが喋ってる言葉を今さらなんで説明しないといけないんだよ！」

「いや、でも関西地区に住んでる人ら以外は明らかに分からない言葉とか、なんとなくく雰囲気では意味わからん、っていうことあるかもしれないだろ？」

「ん……それはあり得るけど」

「そうだろ？ それで、今回は標準語」

「ちよつと待て！」

「……なんか文字にすると東京弁って堅苦しいなあ」
周平がしかめ面をする。

「まあ、そう言っなや」

「他になんかないんか？」

「じゃあ、続きで換えてもらおか」

<関西弁>

「今度は何やねん！」

「標準語言っのやめろや！ オレ嫌いやねん！」

「はあ？」

「ほな、どない言っねん？」

「東京弁って言え。なんか、何でもかんでも東京を基準にされんの、ごっつ嫌いやねん！」

「せやけど、東京の言葉はみーんなどの地方行ってもたいがい通じるんちゃうか？」

「ウ……………」

「まあ、周平の気持ちわからんでもないけど、ここは妥協しようや
「うん……………」

<標準語>

「今度は何だよ！」

「標準語言つのがやめろよ！ オレ嫌いなんだよ！」

「はあ？」

「それじゃあ、どう言つんだよ？」

「東京弁って言え。なんか、何でもかんでも東京を基準にされんの、とても嫌いなんだよ！」

「だけど、東京の言葉はみーんなどの地方行ってもたいがい通じるんじゃないか？」

「ウ……………」

「まあ、周平の気持ちわからなくもないけど、ここは妥協しようよ
「うん……………」

「なんか全然違う国の言葉みたいやな……………」

「おおげさやな。他にも、関西特有の言い回しあるから比較してみただ」

<「関西弁」

【標準語】>

「いがむ」

【歪む】

今日は「えらい」疲れた 今日【とても】疲れた
プレゼント「ぎょうさん」もらった プレゼント【たくさん】
もらった

この楽譜「なおしといて」 この楽譜【片付けておいて】

その紙くず「ほかしといて」 その紙くず【捨てておいて】

「じつじいなー！」 【すごいなー！ 大きいなー！】

「しんどい！」 【疲れた！】

めっちゃ「ちっこい」な！ めちゃくちゃ 【小さい】な！

「南京」食べる？ 【カボチャ】食べる？

今日は「ぬくい」なあゝ 今日【暖かい】なあゝ

「はよ」食べるや！ 【早く】食べるよ！

「なんや！？ オレら普通に使ってるやん！」

「これも全部他の地域では通じへんからな。おっと。この『へん』
つていうのは否定語のことやで」

「関東では、これも全部他の地域では通じないからな、ってなりま
す」

菜砂がフオローを入れる。

「あと、下の言葉は全部言葉の一部省略しとんねん。関西人、いら
ちが多いから」

「えっと、下の言葉は全部言葉の一部を省略しています。関西人、
せつかちな人が多いから」

菜砂も即座に標準語に言い換えるのが大変なようだ。

<単語 関西の発音>

学校 がっこ

勉強 べんきょ

先生 せんせい

煎餅 せんべい

貧乏 びんぼう

蚊取り線香 かとりせんこう

辛抱 しんぼう

「それから、形容詞の連用形は『く』は普通省略して言うねん
「連用形とかムズいコト言うなや！」

周平が耳を塞いで顔を左右に振る。
「見ればわかるって！」

< 単語 関西の言い回し >

暑（熱）くなる あつなる

寒くなる さむなる

暑（熱）くて あつーて

寒くて さむーて

冷たくなる つめたなる

長くなる ながなる

安くなる やすなる

「んで、形容詞の前に『ああ』つけたら『い』は消えるねん」

「意味不明やん！」

「見ればわかるって！」

「お前さつきからそればっかやんけ！」

周平が呆れて洋平にツッコんだが、洋平は気にせず続ける。

< 関西弁 標準語 >

ああ、しんど ああ、疲れた

ああ、暑！ ああ、暑い！

ああ、寒！（さぶ！） ああ、寒い！

ああ、おもしろ！ ああ、面白い！

ああ、汚な！ ああ、汚い！

「どない？ 関西弁と標準語やったらだいぶちやうやろ！？」

「どうですか？ 関西弁と標準語でしたら、ずいぶん違つてしょう？」

周平は几帳面に東京弁に直す菜砂に感心していた。

「なあ、もうこのへんでええんちゃうの？」

「そう?」

「わからへんことあったら、いつでも作者にメッセージ飛ばしても
らえばええやん? アイツも関西人やし」

「そやな……。そうしてもらおか」

「それでは! 引き続き『じよいふる! Music』をお楽し
みください! 以上、佐藤 洋平と」

「安西 菜砂に」

「森田 周平でしたー!」

〈周平と洋平の関西弁講座

完〉

コラム 1 周平と洋平の関西弁講座 (後書き)

今回、この講座を作るにあたり「関西弁基礎講座」を参考にさせていただきました。 <http://homepage2.nifty.com/GANSO|hirokun/kouza00.html>

第011話 ひた隠し

DVDに映った画像を見て、美里と久美が首を傾げた。

「竹中先輩……これと森田先輩、どう関係あるんですか？」

「ええから見ててみ。すぐにわかる」

DVDに映るのは、明らかに大人の男性と女性ばかり。楽器を持っている様子から、どこかの楽団であるというの是一目瞭然であった。しかし、それ以上のことは久美たちにはサッパリわからない。

「これ、いつですか？」

「2002年。今から8年前や」

「ふう〜ん」

久美にはまったく興味のない様子が見受けられた。8年前と言えば久美が9歳の頃だ。周平たちはそのひとつ上、10歳だから小学4年生ということになる。

「それでは、スペシャルゲストにも加わっていたいただきましたんで、早速第3部を続けてまいりたいと思います」

司会者がにこやかに次の曲の紹介をする。

「次にお送りします曲は、ヤン・ヴァン・デル・ロースト作曲『プスタ』です。プスタとはドナウ川の中流域に広がる平原を意味しております。その大半はハンガリー領となっており、ハンガリー随一の穀倉地帯ともなっております。そんな平原をイメージした『プスタ』、お聴きください」

プスタは吹奏楽経験者なら一度は耳にしたことがあると言っても過言ではない有名な吹奏楽曲である。元は室内楽曲として作曲されたのだが、今はもっぱら吹奏楽で演奏される機会が多い。

印象的な序章を経て、第一楽章に突入する。次第にテンポがアップしていき、木管楽器がどんどん加わって最終的に全楽器が演奏す

る形式になっている。そして、有名なピッコロのメロディが始まった瞬間、映像が切り替わりピッコロ奏者がアップで映された。

「えー!?」

美里が声を上げる。驚いて久美と桃が振り返る。周平がしかめ面をしていた。

その画面に映る少年は、面影が確かに残る周平、彼自身だったのだ。

「ど、どういうことですか!? え? 竹中先輩……これ、どこの楽団ですか!？」

美里が驚きを隠せず、詰まりながら将輝に尋ねる。

「神戸市で有名な、シンフォニカ神戸吹奏楽団の映像」

「シンフィニカって……!」

毎年全国大会に常連出場する、一般バンドの強豪団体であった。

そんな団体の中に、明らかに子供と思われる姿があるのか。しかもそれが、いま自分たちの後ろにいる周平の子供時代だと確実に思われる姿をしているのだから、久美たちが驚くのも無理はなかった。

さらに彼らを驚かせたのが、周平がピッコロを吹いているということであった。今の周平は承知のとおり、アルトサクソ奏者だ。

その彼がなぜ、小学校4年生時点でピッコロを吹いているのか。それも、周囲の大人に引けを取らないレベルである。

「次に見てほしいのが、3年後の定期演奏会」

2005年なので、将輝は13歳、中学1年生。久美たちはまだ小学校6年生ということになる。

映像が変わる。そして、流れてきたのは2004年の一般・職場・大学向け課題曲『列車で行こう』であった。かなり複雑なメロディのあるこの曲で、シンフォニカ神戸は見事全国大会に出場した。当然ながら高校生以下はこの曲を演奏する機会というのは極端に少ない。

「まさか……」

久美たちは画面に釘付けになる。しかし、ピッコロ奏者は周平で

はなく、20代後半と思われる女性だった。

「おらへんやん」

桃がちよつと安心した様子でため息を漏らす。

「あっ！」

美里が声を上げた。

「おった！ 絶対これやん！」

「ウソオ!？」

久美と桃が画面にへばり付いた。中間部の怪しげなメロディが始まってすぐ、アルトサクスのソロがあるのだ。そのソロを吹いているのは間違いなく周平だった。

「どういうこと……!？」

ますます理解が追いつかなくなる女子3人。そして、将輝は何も言わずに早送りをしていく。

「俺が見つけたんはこれが最後。2006年の定期演奏会」

将輝中学2年生、久美たちは1年生になる。流れてきたのは『空中都市マチュピチュ』隠された太陽神殿の謎』であった。

「どっかにおるん……?」

しかし、奏者の中に周平らしい少年の姿は見当たらない。そのまま曲は流れていく。そして、中間部の祈りを捧げるようなイメージの部分へと差し掛かったとき、ピンスポットが当たって、花道にいるクラリネット奏者3名、オーボエとフルート奏者、グロッケン奏者が映る。

「……!」

そして、ハープの席に少年はいた。この部分は、ハープ奏者の有無によって大幅に曲のイメージが変わる箇所であった。

曲のあまりの美しさに言葉を失う3人。周平はいても立ってもいられず、DVDの停止ボタンを押して映像を切ってしまった。

「……。」

沈黙が起きる。将輝が小声で言った。

「お前……もしかしてさ」

周平は小さくうなずいた。

「お前の予想どおりやと思う」

「どういうことですか？」

久美が将輝に尋ねる。

「知らんか？ 八木沼。シンフォニカ神戸のコンサートマスターの名前」

「……あつ！」

桃が声を上げる。

「も……森田もりた 一輝さんかずき……」

周平が引き取る。

「そうや。オレは、森田 一輝の一人息子や」

「……うそ」

それからしばらく、誰も何も言わなかった。

「あ、あたし……噂で聞いたことはあるんです」

桃が震えた声で言い始めた。

「一輝さんの息子さんで、ほぼ全部の木管楽器を完璧に吹きこなせて、おまけにハーブとか打楽器もある程度の技量を持った子がおるつて……。でも、それが……」

「オレやってこっちや」

突然の展開に、美里も久美も頭が熱くなって処理が追いつかないようだ。

「なんでや？」

将輝が尋ねた。

「なんで、それを誰にも言わんねん？」

「それ言うたら、絶対チヤホヤされてさあ……。嫌やねんもん。オレはオレや。森田 一輝……父さんのことは尊敬してるし、めっちゃ好きやけど、オレはオレや。父さんの名前を振りかざしてどうこうするのは、嫌い。父さんも絶対、そんなん許さんハズや」

「……。」

将輝が続ける。

「ほな、せめてお前のその技量……。發揮してくれば、俺らの部は絶対変わる」

「オレも最初はそう思ってた！」

周平が声を荒げる。

「でも！ この部は伝統とかどーのこーの言うて……。オレ、部を変えようとしてたんは竹中かて知ってるやろ！？」

「……。」

将輝が言葉に詰まる。しかし、周平のすごさを部員に少しでも知ってほしいという気持ちが強くあるのは嘘ではなかった。

「ほな……。せめて、お前と仲の良いヤツらにだけでもそれ、言うてみいひんか？」

「言うたところでどないなんねん？」

「それは……。」

将輝も答えに詰まってしまふ。

「ほらな。別にどうにもならへんねん」

周平はDVDを抜いて将輝に手渡した。

「オレはずっとこのまま。いい？ 4人とも絶対、何も言うなよ」

周平のきつい目つきに怯んで4人は周平に何も言えなかった。

「！」

周平が急にこちらへ向かってきたので未樹は慌てて部屋に隠れる。しかし、部屋に来そうな気配がしたのでさらに彼女は慌てて部屋の奥へ隠れた。

戸が勢いよく開き、周平が部屋に入ってきた。

「……バテてしもたか」

周平は以前から心配していた。YouTubeに自分の姿が映った映像が流れていることに、かなり危機感を抱いていた。いつか、これが何かややこしいことに繋がるのではないかと懸念していたのだ。そして、遂にそれが現実となってしまう。

「ああ言うたけど……。きつと竹中は……。言うやろなあ」

周平は半ば諦めた様子で笑った。

「でも」

次の周平の言葉に、未樹は顔が熱くなる思いがした。

「後藤とかなら、まだ良かったかも」

周平はそのままカバンを持って部室を出た。

(今の……は、どういう……)

未樹はしばらく呆然と部室の片隅で座っていることしかできなかった。

第012話 メロディ繋ぎ

「起立！ 礼！」

「お願いします！」

愛美の挨拶から始まる浜唯高校の合奏。まもなく新入生歓迎会なので、部員たちはその練習をするつもりで臨んでいた。もちろん、大地もそのつもりだ。

「じゃあ、じよいふる！」

「はい！」

しかし、将輝と周平が2人とも自分の席から動こうとしない。昨日の経緯を知っている久美、美里、桃も心配そうな表情をしているし、何より偶然の流れだが彼らの経緯を知っている未樹も心配そうであった。

「ん？ どないしてん！ 踊り子！」

ブツ！と弓華が吹きだした。踊り子という言葉がツボだったようだ。

「竹中と森田やる？ まさか、恥ずかしくなってきたんか？」

「そんなん違いますけど！」

将輝が慌てて立ち上がる。

「ほら、森田！ 早う！」

「ああ、うん……」

それでもやはり、ぎこちない二人。さすがの大地も心配になったようで、二人に何があったのかを尋ねた。

しかし将輝も周平も「何でもないです」と呟くだけ。事情を知っている久美たちも何も言えずに俯いていた。

「まあ……とりあえず、通すで」

とりあえず通す大地。しかし、何かが気に入らないようでしたら

くしてから曲を止めた。

「ははくん……。わかった。わかったで」

部員たちは大地の独り言に首を傾げる。

「竹中も森田も、みんなの演奏がシツクリ来えへんから踊りのノリがイマイチやってんな！」

将輝も周平も完全に見当違いな大地の解釈に笑わずにはいられなかった。

「やっぱり当たりか！ まあ、しゃあないな。ほな、こついう練習しよう。いいか？ 伴奏は一切休み。メロディだけずーっと繋いでいって」

「え」

部員たちが一斉にそう言った。

「先生すいません……。いちおう、どこがどのパートメロディか教えてください」

「言いません！」

「ええ！？」

部員たちはさらに戸惑った様子でざわつき始める。

「いきものがかりのじょいふるやで！ 原曲、知ってる人！」
部員のほとんどが手を上げる。

「ほらあ！ 何も心配いらん！ うまーいこと繋いでいけ。そしてら、そのメロディが途切れた場所が二人の踊りがどことなくシツクリ来えへん原因になってるんちゃうかな？」

「なるほど……」

これには照が深くうなずいた。

「伴奏と思って吹いてるから、踊る二人がメロディであるべき音に乗れずに上手く踊られへんってわけですか？」

「そう！ 氷室の言うとおり。せやから、メロディが途切れたら……：そつやな。本来そのメロディパートの人たちにはちよつと罰ゲーム受けてもらおか！」

ザワザワと騒ぎ始める部員たちをよそに、大地は指揮棒を上げた。

「ええかー！ 行くで！ あ、ドラムセットはずっと叩いてや
！」

「はい！」

「1、2、3、4！」

こうして妙な合奏が始まった。しばらく調子よく進んでいく合奏。しかし、ふとした瞬間にメロディが途切れた。それは最後の部分で「ぴゅぽぽぴゅぺ！」という歌詞の部分だった。ここで誰もメロディがいなくなったのだ。

「ストップ！ ここかあ、原因は！」

小悪魔のような表情を浮かべる大地の顔を見て部員たちの顔が青ざめる。

「誰や思う？ このメロディは」

トランペットが手を上げる。

「ブーッ！」

次にクラリネットが手を上げる。

「ブーッ！」

「えー……じゃあ俺らか？」

ホルンが手を上げるが、大地はまたしても「ブーッ！」と言ったのだ。

「じゃあ、誰ですか？」

未央の問いに信じられない答えを大地は言った。

「答えは！」

全員が息を吞んで答えを待つ。

「全員です！」

「ええ！？？」

これには全員が度肝を抜かれた。

「ぜっ、全員でどっいうことですか？」

「つまり、トゥッティや！ お前らそれくらいわかるやろ？」

「は、はい」

小さくうなづく部員たち。

「はあい、残念でしたあ。ハズレの皆さんには先生からプレゼント！」

そして出てきたのは小瓶に詰められた緑色の液体。

「ま、まさか」

「そう！ 青汁です！」

「嫌やあ！」

実香子が珍しく大声を上げた。

「嫌がってもあきませーん！ 言っただやろ？ 失敗した奏者は罰ゲームって」

「ええ〜！ 最低やあ」

洋平が大きく肩を落とす。

「はいはい！ 竹中と森田以外、飲んだ飲んだ！」

なぜか巻き添えを食らったパークションのメンバーも一気に青汁を飲む。

「マズい！」

悠馬が顔をしかめて叫ぶ。

「うえー！ こんな本番前に飲むもんちゃうやん！」

利緒も舌を出して顔を激しく横に振った。

「どや？ 悔しいか？」

「めっちゃ悔しいし！」

雅貴が大声で答える。

「よっしゃその意気で今日の本番行くで！ 悔しさを本番でぶっ飛ばせー！」

「はい！」

「よし！ ほなもう1回今度は全員で吹いて、じょいふるだけ通すで！」

「先生」

晴菜が聞いた。

「なんや？」

「他の曲は？」

「演奏だけやる？ とりあえず、踊りがダサかったら二人がかわい
そうやから。心配かもしれへんけど、優先したって」

「はい。わかりました」

晴菜はすぐに納得して楽器を構える。

「ほな、行くで」

「はい！」

本番直前の最後の合奏が始まる。

「お」

その頃、体育館に向かっていた1年生の列の中から数人が楽器の
音に反応していた。

（なんや……？ 噂と全然違うやん）

数人が聞いていた噂。それは、浜唯高校吹奏楽部がいかなる行事
でもクラシック曲攻めで来るといふものだった。しかし、チラツと
聴こえてきたのは明らかにじょいふるである。

その中の一人 脇川^{わきがわ} 美琴^{みこと}は驚いた様子で音楽室のほうを見上
げるのだった。

第013話 音楽は世代を超える！

「え！？ ウソやん！ あんなに見てる人おんの！？」

クラリネットの近江亜梨沙が大声を上げる。

「シーツ！ 静かに！」

それに気づいて将輝が注意を促す。

「す、すいません」

「気持ちわかるけど。近江さんたちは去年、見てる側やったもんな」

慣れてしまっている将輝、未央、朋子の3人は冷静に楽譜の準備を整える。それを見て2年生の雅貴、亜梨沙、明巳、晴菜の4人も慌てて楽譜の準備をする。

一方の周平たちサックスパートも楽譜の準備を整え、いつでも表へ出られる状態だった。

「すまんけど、よろしく頼むわな」

周平は華名に両手を合わせて言った。

「いいですけど……」

華名がジーツと周平の衣装を見る。

「先輩、思い切りジャージですね」

「え？ あー、これ？ なんか、竹中がじょいふるのPVの雰囲気出したいからって……」

そのいきものかきの『じょいふる』という曲は、学校内で撮影されているためほぼ全体に渡って学生服やジャージを着た学生の姿が映っている。将輝としては、それを反映させた衣装にしたいと強く言っていた。そしてジャンケンの結果、将輝が浜唯高校男子の冬服を、周平が3年生の指定ジャージである青色の上下ジャージを着ることになったのだ。

「いいんちゃうの？ ウチらの部、なんかお高く留まった人らの集まりって思われてるみたいだし」

横から優花が笑いをこらえながら言う。

「おい大西！　なんで笑ってんねん！」

「別に笑ってなんかおらへんよ」

優花の顔がニヤケっぱなしのまま、否定の言葉を発するので周平は真っ赤になった。

「ウソつけ！　その緩みっぱなしの顔のどこが笑ってへん言うねん！」

「やかましな！　静かにせんかい！」

大地の声に3人が口を塞ぐ素振りを見せる。

「ええか？　本番は本番やねんから、氣い抜くなよ」

「はい……」

口を塞いで小声で返事をする3人。

「それから森田」

「はい？」

「お前、まだ恥ずかしがってるやろ？」

「そ、そんなこと」

「あるやろ？」

否定の言葉を言おうとしたが、大地に聞かれて周平は小さくうなずいた。

「ええか？　森田。こういうな、踊りとかマーチングとかそういう動きを入れてやるヤツは恥ずかしがって中途半端にするほうがもっと恥ずかしい」

「……。」

「恥ずかしがって、ナヨナヨでへなへなことやったら、見る側としてはそっちのほうが恥ずかしくて仕方ないからな」

「はい……」

「竹中見てみ」

大地に促されて将輝を見てみると、彼はやる気マンマンでなぜか

準備体操までしている。

「……………」

しかし、それを見ても周平はあまりやる気が沸いてこないようであつた。

「お前、なんか知らんけどローテンションやな」

大地が本当に心配そうに周平に聞く。

「まあ……………いろいろありまして」

周平が苦笑いすると、優花と華名も困つたように笑つた。

「そんな暗い顔されたら、新入生が入ってくるモンも入ってけーへんなるで！」

そして大地がバシバシと周平の背中を叩いた。

「しつかりせーよ！ 3年！」

「痛つて……………」

周平は苦笑いしながらも、自分より年上の大地がああテンションなのだから、まだ高校3年生の自分ももっとテンションを上げて行つてもいいのではないか、と思つた。

「よっしゃー！」

突然の様子の変わりように、優花と華名が驚いて目を丸くする。

「一丁やつたるやないか！」

「その気合いや！ よっしゃ！ ほちぼち本番行くで！ みんなテンション上げて行きや！」

「はい！」

舞台が暗転する。椅子や打楽器の搬入が始まつた。その様子を見ながら、将輝と周平は最後の打ち合わせをする。

「打ち合わせってほどのモンやないけど」

将輝が笑う。周平も笑つてから言つた。

「ノリと勢いでドーン！ やろ？」

「よおわかつてるやんけ！ ほな！」

右手をグーにして重ね合わせる。

「こ武運をー！」

大地が指揮台に立つ。

「ア、ワン！ ア、トゥ！ ア、ワン、トゥ、ワントウスリーフオウ！」

悠馬の掛け声を合図に『じょ・い・ふ・る』が始まった。その上昇音系と同時に周平と将輝が思い切り部員たちの前に立つ。

「おおー！」

男子からどよめきが起きる。無理もないだろう。周平がジャージ姿、将輝が詰襟の制服姿なのだ。ちなみに、浜唯高校の制服はブレザーである。詰襟学生服は周平の中学時代のものであった。

箒を持ってギターを弾くような素振りを見せる周平。その調子に合わせてテンションが上がってきたのか、普段は冷静な拓久が同じようなノリを見せ始めた。まだ前奏部分であるにも関わらず、周平と将輝のテンションはかなりハイになっていた。

歌部分に差し掛かる。将輝が最前列にいた1年生を呼びかけるように踊りを見せる。そしてサビ部分で周平がクラリネットのメンバーに立つように指示した。はっきり言って予想外の展開であったが、そういったアドリブには慣れている吹奏楽部員たちはすぐに立ち上がった。そして、何度か周平と将輝の踊りを見て自然に覚えたのか、雅貴や未央と一緒に飛び跳ね始めた。これには朋子も合わせなければマズいと思い、いつの間にかそれがクラリネットの全員に伝染していた。

再びメロディ部分に戻る。周平が1年生のど真ん中に飛び込んでいく。大地はまさか将輝と周平がここまでアドリブを利かせるとは思っていなかったたので、驚くばかりだ。

2回目のサビ部分に差し掛かると、将輝がホルン、サクスメンバーに起立を促した。バリサクの猛まで飛び跳ねて踊っている。

「あんな大きい楽器でも踊れるんやなあ！」

男子生徒の一人が声を上げているのが、周平の耳に入ってきた。

間奏部分のような、曲調が他のものとは異なる部分に差し掛かる。ここで将輝と周平は元の位置に戻る。そして「びぶへばびぶへ」

の部分で全員に起立を大地が促した。

(なるようになれ！)

愛美も何かを吹っ切ったようで、立ち上がった。メロディや伴奏も乱れなく踊ったり飛び跳ねたりしながら演奏を続ける。いつの間にか教頭先生や校長先生まで立ち上がり、拍手をしていた。さらに、本来であれば見学できない2年生や3年生が外から見ていた。部活をしていたが、気になって見に来ているようであった。裏方を仕切っている放送部員や生徒会の生徒も出てきて一緒になって手拍子をしていた。

最後の最後で、周平と将輝が放送部員のマイクを借りて、大声で叫んだ。

「じょーい！」

それと同時に拍手が沸き起こった。周平と将輝は4月にも関わらず汗だくになっていた。

「森田！」

将輝が笑顔で右手を上げてきた。

「よかつたで！」

「お前こそ！」

周平も右手を上げてハイタッチする。一気に吹き終えた部員たちも、予想外の1年生や先生の反応に満足そうな笑みを浮かべていた。

第014話 今年の面子

4月20日火曜日。

「ふーん……」

大地は職員室で提出された入部届けを見つめていた。現時点で入部届けを提出したのは以下のとおり。

フルート：柳下 明莉 / 粟田 雛

オーボエ：葛和 良平

クラリネット：住友 麻衣 / 竹中 美波

アルトクラリネット：上杉 翔太

アルトサクソフォン：秋吉 和洋

テナーサクソフォン：榊 郁斗

トランペット：下条 都夢 / 琴弾 音弥

トロンボーン：島本あずさ

ホルン：小林 樹 / 古舞このは

チューバ：皆見 陽菜

ストリングベース：脇川 美琴

パーカッション：稲葉 紗重 / 吉田 達矢

「バランスはまあまあ取れてるんか……。せやけど、ユーフォが欲しいところやなあ。クラリネットも2年後のことを考えると欲しいし……。トランペットが2人おるのは助かったけど」

ボールペンをクルクルと回す大地。ため息が漏れた。

「しっかしなあ……。パーカッションが2人とも初心者ってどないやねん。それも、入部理由聞いたら、『立花先輩がカッコ良かったからですう』かいな！ ええ加減にせえよ！」

これは稲葉 紗重の口調を真似しているのである。

「ほんでもってコレもややこしそうやで……」

ホルンの小林 樹。実際は相内良輔、岡本充香と同年である。つまり、留年して1年生として入学したのだ。しかし、彼も好きで留年したのではなく、病気によって不可抗力で留年したというわけである。

「岡本が偉そうに言いそうやしなあ……。なんかトラブルりそうやわ」他にも初心者がまだいる。今回、初心者として入部したのは稲葉、吉田に加え古舞、栗田の4名。大地が今まで聞いた話では、浜唯高校は全国レベルで奏者レベルもかなりずば抜けている。

「足を引つ張るとかギャアギャア言われて、辞めんかったらええけど……」

初心者とはいえ、貴重な部員であることに変わりはない。一瞬、稲葉と吉田の入部動機に文句を言った自分が少しだけ、大地は嫌になっただ。

「なあ」

その頃、周平は優花に質問をしていた。

「何？」

「お前がやつぱり、ソプラノ吹いたほうがええんちゃうか？」

「ええ？ なんでよ？ 今までずーっと、森田くんが吹いてたんやん。それに秋吉くんより森田くんのほうがええ言うたやん。島崎先生」

優花が不思議そうに笑う。

「ええ？ ああ……まあ……」

周平の微妙な反応に、優花が「あ……聞いたらマズかった？」と聞き返した。

「いや！ そういうわけちゃうねん。実際なあ、その島崎先生にお前、大西にソプラノ譲れって言われた」

「エー！ えらい急やんなあ。どういいうつもりなんやろ？」

「先生いわくな……」

周平は一連の大地の説明を優花に再現した。

大地が言うには周平は息が分厚く、温もりのある息だそうだ。その息がアルトサククスを通すと、色っぽい音になる。その音が活かされるのは、スピードのある音楽よりもゆったりした音楽だそうだ。「じゃあつまり、島崎先生が言うのは」

「多分、ウィークエンド・イン・ニューヨークなら前半部分のアルサクのソロがええってことやと思うねん」

「へえ〜……。あの先生、テキストそうに見えている見えてんねんなあ」

2人は天井を見上げながらため息を漏らす。

「あ。でもちよつと待ってよ」

「何？」

「中盤にもアルトサククスのソロあるやん」

「あ……ホンマやなあ」

そこでまた新たな疑問が生まれる。

「ほな、俺の音色のことは何やったんや？ 意味不明ちゃうんか」

「さあ〜……」

「何やお前。長いこと楽器吹いてて自分の音色の特徴もわからへんのか」

驚いて2人が振り返ると、大地がいた。

「先生……」

優花が目丸くする。

「俺の音色の特徴って？」

周平が興味深そうに尋ねる。

「エロいねん！」

「……は？」

周平と優花は呆然とした様子で聞き返した。

「エロいって何スカ！」

「お前の音色はちょうどええんや！ まさにお前の音色はウィーク

エンド・イン・ニューヨークのソロを吹くためにあるようなもんやな」

「……。」

大胆発言に唾然とすることしかできない2人。

「とにかく！ 大西はソプラノ練習しといて。ほんで、森田はアルトサックスのファーストな！ よろしく！」

そう言い残すと大地は部屋を後にした。

「なんかもう……マイペースすぎてぶっ飛んでる」
へへ、と周平がおかしそうに笑った。

「下手すぎるー！」

フルートのパート練習の部屋で怒声が飛んだ。その声に初心者の栗田 雛が首をすぼめた。しかし、その怒りの対象は雛ではない。明莉なのだ。

「アンタ、ホンマに経験者！？」

「は、はい……」

「それやのに、ビヴラートもろくにかけられへんの！？」

「す、すみません！」

いきなりブルブルと震える明莉。この険悪な雰囲気には、さすがの由里や照も口が出せる状況ではなかった。

「もー！ 経験者も大したことないし、初心者やしもう一人は！もうアカンわあ今年も！」

「そうやって端から諦めんのかい」

5人が驚いて振り向くと、大地が腕を組んで不機嫌そうに立っている。

「そういう程度なんか？ お前らの意識」

「どつという意味ですか？」

菜々香が不機嫌そうに返事をする。

「なあ、大平。お前、生まれた時からフルート吹いとん？」

「は？ 何言うてるんですか。そんなわけないじゃないですか」

「そやる？ 誰だつて練習を重ねて、今のレベルにまで持ってきてるんやろ。でも、それが限界か？」

今度こそ菜々香が怒りをあらわにした。

「いい加減にしてくださいよ！ あたしは限界とは思ってません！」

「んじゃー練習するよな！」

「当たり前やないですか！」

「やって！ そういうわけやから、柳下も栗田も頑張れ！」

雛と明莉の顔が赤くなる。

「は、はい……」

「下条！ 氷室！」

「は、はい！」

由里と照が思わず大声で答える。

「1年生にや・さ・し・く！ 教えたってや」

「は、はい……」

由里と照をも黙らせる大地。そんな彼の背中を、菜々香だけが悔しそつに見つめていた。

第015話 企画委員

「んー……そうなんや。企画委員なんておってんな」

大地は部員の名簿を見ながら呟いていた。

「それにしたって、なあんかアンバランスなメンバーやなあ」

大地がそう言うのも無理はなかった。メンバーは5名。福崎利緒、岡本充香、武田尾真咲、京谷航平、そして後藤未樹である。

「確か……まあ、京谷と後藤は同じパートやから仲はいいやろ。岡本と武田尾はどないやろ……。武田尾はマイペースやしなあ。岡本は自分の主張を押し通そうとするし……。福崎はどないやろなあ。誰と仲ええんやろ」

まだまだ知らない部分がある大地は、ひとまずこのメンバーを呼び出すことにした。

「吹奏楽部、福崎さん、岡本さん、武田尾さん、京谷くん、後藤さん。職員室までお願いします」

呼ばれた航平と未樹が顔を上げた。

「ええ？ せつかく1年生来てんのに……」

航平が不服そうな顔を浮かべた。

「しょうがないやん。多分、このメンバーやから企画委員ちゃうん？」

「チエーツ！ 俺、企画委員なんてやめといたら良かった」

「立候補したくせに。行くで」

未樹が意気揚々と立ったのに対し、航平は未だに不服そうである。

「じゃあ悪いけど行ってくるね。よろしく、三沢くん、月島くん」

「はいよ」

大輝が明るく返事をしたが、拓久は何も言わないままだった。

「先輩」

廊下を歩いていると、航平が未樹を呼んだ。

「何〜？」

「先輩ら、やっぱりまだ仲悪いんすか？」

未樹が驚きのあまり、立ち止まってしまつ。

「嫌やなあ……。なんかこう、もうちょっと包み隠して言えばいいのに」

未樹は苦笑いしながら再び歩き始める。

「なんでこう、この部ってこんなに仲悪いんでしょうね」

「さあ……。なんかもう、この部の伝統みたいな感じちゃうのん？」

未樹の諦めたような言い方に、航平が苛立ちを見せた。

「なんでそんな初めっから諦めてるんですか？」

「……しょうがないやん」

「なんでそう思うんですか？」

「京谷くんがおらん頃に、いろいろあつたの」

うまくかわされたような気がして、航平はまだ納得していないようであった。しかし、職員室がもうすぐそこだったので、そこでこの話は終わってしまう。

「失礼します」

未樹と航平が部屋に入ると、既に充香たちは揃っていた。

「おー！ こつちや、こつちー！」

相変わらずデカい声、と思いつつ二人は充香たちのいる場所に座る。

「話つちゅーのは他でもない」

5人が目を丸くする。

「聞いていいか？ 後藤」

「はい」

未樹が小さく返事をする。

「なんで、この学校の吹奏楽部は学外行事が少ないん？」

「学外行事……ですか？」

充香が口を挟む。

「学外行事って、具体的にはどんなんですか？」

大地は少しムツとした様子になるが、すぐに返す。

「たとえば、地域の祭、市民祭、老人ホームへの慰労演奏、幼稚園とか……も含めて。学内でも文化祭しか出てへんみたいやし」

「学外は前の顧問の先生が、あまり出えへん方針にしてたんで」

充香がアツサリ答える。

「は……そうなんや」

大地が頭を掻きながらしかめ面を浮かべる。

「続き、聞いていい？」

「はい」

充香がうなづく。

「合宿は？ ないん？」

未樹と航平が顔を合わせる。

「そいえば……ないですね」

航平がうなづく。

「なんでないんやろ」

真咲が呟いた。

「後藤先輩が入ったときにはもうなかったんですか？」

「うん。あたしの中にはもう……」

利緒と顔を合わせてうなづく未樹。

「なくなった理由はわからへんけど」

大地が笑顔で言う。

「このままやらへん理由っていうのは、ないやろ？」

「え。それって」

「合宿再開するで！」

「……。」

言葉の意味をよく解せない5人。

「話、聞いている？」

「……。」

「おい。後藤？ 福崎？」

「あ、はい……」

利緒が大声で返事をする。

「んでな。合宿の行き先やねんけど」

大地が旅行社のパンフレットを5人に手渡した。誌面には「南国リゾート」、「沖縄」、「美ら海」の文字が躍っている。

「ちょうど、今年はウチの部もコンクールで『うちなーのていだ』演奏するやる？ 沖縄の雰囲気知っとくにもちようどええ機会やし、コンクール前に1年生はもちろん、2・3年生でも親交を深めるって意味で、ゴールデンウィーク中に合宿、行こうや！」

「……ホンマに言うてるんですか？」

充香が理解できないという表情で大地に聞いた。

「ウソ言うために企画委員呼んでどないすんねん！」

未樹はこの人本気や、と戸惑ってしまう。

「とりあえず、現段階では行き先が沖縄県っていうアバウトなことしか決まってへんねん。宿泊先とかいろいろ考えんとアカンやろうから、それを企画委員でなんとか練ってくれへんもんやるか？」

「はあ……」

5人は呆気に取られつつもうなずく。

「よーし。とりあえず、明後日には返事ちょうだい」

「早っ！」

航平が大声を上げた。

「だってもう4月やしな！ 急がんと飛行機も取られへんし。頼んだでー！」

そう言つて5人は職員会議が始まるから、と職員室を追い出されてしまった。派手なパンフレット片手に佇む5人。

「……どないします？」

充香が呟いた。利緒が答える。

「とりあえず、部室帰って皆に聞こうや」

「そうですね……」

5人はトボトボと部室に戻って、招集をかけた。

「どないしたん？ なんの用事やったわけ？」

愛美が聞く。

「今年、合宿するんやて」

未樹の言葉に1年生を除く全員が目丸くした。

「いつ？ あ、普通夏休みか」

悠馬が自問自答する。

「うん。5月のゴールデンウィーク」

「はあ!？」

未樹の答えに未央が大声を上げた。

「ホンマに!？」

「うん」

「行き先は？」

将輝の問いに利緒が答える。

「具体的には決まってへんけど、とりあえず沖縄」

「沖縄!? なんでまた？」

質問が次々飛んでくる。今度は菜々香だった。

「ほら、課題曲が『うちなーのていだ』やる? せやから、雰囲気
知るためにつて……」

「……。」

誰も何も言わない。

「あのさあ」

周平が手を上げた。

「この中で、沖縄行ったことある人手え挙げて」

たったの3人。周平、弓華、明巳だけだった。

「ほら。日本国内やのに行ったことある人、たった3人やで? ほ
とんどが行ったことないのに、沖縄の曲演奏しても上手くいくハズ
ないんちゃう?」

周平の言葉に愛美がうなずく。

「それもそうやね……」

「でも」

晴菜が手を挙げた。

「泊まる場所は？」

「そうですね」

菜砂が心配そうに言った。

「こんな大人数で、しかももうゴールデンウィークが目の前なのに……。宿泊場所、確保できないと思うんですけど……」

沈黙が起きてしまった。こればかりは未樹にも周平にも良い案が浮かんでこない。その時だった。

「あのさあ……」

手を挙げたのは実香子だった。

「ウチ……その、中学時代の友達が沖縄に引っ越しておるんやけどね」

「それが？」

周平が驚きつつ聞いた。部内の揉め事などには一切関与してこなかった実香子の言葉だけに、期待できるものがあつたのだ。

「その子の家、結構大きいペンションやつてるんよ。まあ、コテージみたいなんが並んでて、その中央にペンションって感じで」

「すごいですよ、それ！」

久美が嬉しそうに飛び跳ねた。

「そやる？ そこなら……ウチの友達やし、なんとか料金も安めでやってもらえるかもしれへんねんけど……どう？」

愛美が決を取る。

「どないでしょう？ 園田さんのご友人に一度、尋ねてもらいますか？」

答えは文句なし。

「はい！」

全員一致だった。

「ほな、悪いけど園田さん。お願いできる？」

「わかった」

実香子も嬉しそうに笑って答えた。

「あ、そうや」

未樹に愛美が言った。

「なあ、後藤さん」

「う、うん？」

まさか愛美に呼ばれるとは思わなかったので、未樹は少し戸惑いつつ答えた。

「企画委員で、合宿の企画立ててくれへん？」

「あ、あたしらで？ 部長とかやなくて？」

「だって、企画委員がこの話持ち出したんやろ。責任持ってやってよ」

相変わらず物言いはキツイものの、未樹もそれは嫌ではなかった。

「わかった。任せといて」

「ヨロシクね」

愛美の笑顔に少しだけ未樹は部員の距離が縮まったのではないかと感じていた。

（ま……そんな甘くないと思うけど）

現状をどうしても樂觀できない周平だけは、まだ何か起きるのではないかと懸念していたのだった。

第016話 思いのほか厳しい

「うう……」

未樹、航平、陽菜の3人が青ざめている。

「思ったより……難しくない？」

「はい……」

未樹の問いかけにうなずく二人。

「そっちは、どう？」

「全然合いませんなあ」

悠馬がフーツとため息を漏らした。パーカッションとチューバ、弦バスがしているのは前打ちと後打ちによる伴奏練習であった。大地の強制的な変更に伴い、課題曲はマーチでなくなった。そのため、前打ち後打ち伴奏から解放されたと思っていた彼らであったが、実は自由曲となった『ウィークエンド・イン・ニューヨーク』にも前打ち後打ちの部分があつたのだ。

チューバ、弦バスは前打ち。そして、後打ちはドラムセットのスネアとウッドブロックである。実は、既にチューバ3人で時々ズレることがあるのだ。それに加えて、スネアドラムとウッドブロックもズレる。そしてさらに、チューバとパーカッションでズレる。ズレ放題の5人なのだ。ちなみに、ドラムセットは悠馬、ウッドブロックは詩音が担当している。

「とりあえずさ、俺としいちゃんて先にしっかり合わせんとアカンわな」

「……はい」

詩音が小声で答える。

「しいちゃん、ここはどんな風に叩いてる？」

「え……と……。とりあえず、黙々と……」

それだけ言うと黙り込んでしまう詩音。

「黙々つて……お経違うねんぞ、野田」

航平が苦笑いして言うが、詩音は真っ赤になったまま何も返さない。

「どないしてん」

たまたま表を通りかかった洋平が声をかけた。

「あ……ちよつとね。前打ちと後打ちで上手いこと合わへんから困つてて」

「ふーん……」

洋平はメトロノームを未樹たちの前に置いた。コチコチと規則的に鳴るメトロノーム。

「はい。ほんじゃ、ユーマとしーちゃんは前打ち」

「え。後打ちやなくて？」

「うん。前打ち。ほんで、チューバの3人と弦バスの2人は、後打ち」

「え！ 俺、そんな急に無理やねんけど！」

拓久が顔をしかめる。しかし、洋平は気にせず「はい、グチャグチャ言うてんといきまーす！ 1、2、3、はい！」と始めてしまった。

パチ、パチ、パチ、パチと規則的になる手拍子。しかし、未樹たちの後打ちはてんでバラバラである。それに釣られて悠馬たちまで乱れてしまう。

「はい、ストップ！」

洋平の声に全員が手拍子を止める。

「はい！ じゃあ下手くそ選手権！」

「は！？」

全員が啞然とした。

「この中で一番、後打ち下手くそな人決めます！」

「なんでやねん！」

悠馬が不服そうに声を上げた。

「後打ちができへん人は、前打ちもマトモにできるわけがありません！」

「なんでそないなるんよ？」

これにはさすがの未樹も不服そうであった。

「だって、前打ちはそりゃメトロノームで合わせるんやから誰でもできるわいな。大事なんは、後打ち。後打ちがしっかりできれば、きちんとリズムを体で感じ取れてるってこっちゃ。結局、後打ちもわからへん人に前打ちなんてできへんよ。できてるフリしてるだけ。真髓はわかってへんわ」

誰も上手く返せなかった。

「はい、ほんじゃ……皆見さんから」

「わ、私ですか!？」

「そ、私から。はい、行くで！」

「は、はい！」

規則的に鳴り響く手拍子。陽菜の手拍子は乱れることなく安定を保ったまま、2分近く続いた。

「オツケー！ はい次！ ワッキー！」

「はい！」

ワッキーというあだ名を急につけられたことも気にせず、美琴が手拍子を始める。彼女も安定を保ったまま、2分近く続いた。

「次、航ちゃん」

「はい！」

航平。彼も安定した様子で問題なく続けられた。

「オツケ！ んじゃ、ユーマ」

「おうよ！」

自信满满という様子の悠馬。しかし、30秒ほどするとリズムが乱れ始めた。

「はい！ ストップ！」

「ぐあー！ クソー！ できへんかったあ！」

「はい！ 残念でした！ 次！」

拓久が自信ありげに笑う。そして始まった拓久の手拍子。しかし、ものの20秒ほどでリズムが乱れ、あっという間に前打ちになってしまった。

「はい下手！」

下手、とハッキリ言われて唇を噛み締める拓久。

「はい、最後はごとちゃん」

「う、うん！」

未樹も必死でリズムを刻もうとするが、すぐに乱れてしまい「ストップ！」と止められてしまった。

「はい。お疲れ様です」

洋平が笑う。

「オモロいことに……下手くそ勢は全員3年生でしたあ！」

「……。」

あからさまに凹む3人。

「ちょお待てや！ ほな、お前はどないやねん佐藤！」

「俺？」

拓久が必死で洋平に聞く。

「いいで。やったるわ」

洋平が自信満々の表情を浮かべる。そして、未樹たちよりも明らかに速いテンポで安定した後打ちの手拍子を2分近く続けた。

「……。」

明らかに動揺する未樹たち3人。

「どない？ これで文句ないやろ」

ニツと笑う洋平。

「ほな、まあ。お三方は後輩に負けへんように頑張っておくれ。頑張ってな！」

ガラガラと引き戸を閉めて、洋平が退散する。それと同時に、一気に未樹、拓久、悠馬の闘志に火がついた。

「しーちゃん！」

「脇川さん！」

「航ちゃん！ 皆見さん！」

3人が一斉に同じ言葉を口にした。

「俺を指導してくれ！」

「オレを指導してくれ！」

「あたしを指導して！」

後輩全員がしばらくポカンとした後、小声で「はい……」とうなずくのだった。

「やーっちゃったあ」

ご機嫌な様子で歩く洋平を見つけた周平が尋ねる。

「何したん？」

「んー？ 低音の闘争心に放火してきたあ」

「はあ？」

「ま！ 俺らもガンバ口ってこっちゃ」

「はあ……」

洋平はご機嫌なまま、ホルンの部屋に入っていく。

周平は洋平の言葉がわかるような、わからないような微妙な気分のまま、サクスパートのパー練部屋に向かうのだった。

第017話 進学校の定め

「え？ ホンマに？」

晴菜が驚いた声を上げる。隣にいるのは亜里沙だ。

「ホンマ、ホンマ！ いま、職員室修羅場やで！」

「ほな、島崎先生叩かれてるん？」

亜里沙が心配そうに口に手を当てて聞く。

「めっちゃ文句言われてるけど、あの島崎先生が黙ってる思っ？」

「何？ 何の話？」

周平も気になって話の輪に加わる。

「すごいんですよ！ 先輩。いま、園田先輩と大平先輩、氷室先輩のお母さんが職員室に島崎先生のことと抗議に来てるんです」

「抗議……か」

周平はある程度予想していた。おそらく、どこからか今回の合宿の話聞いたのだろう。日程がちょうど、補講の日と重なっていることが、周平にとってネックであった。そして、この浜唯高校の特徴を忘れてはいけない。

そう、この浜唯高校は兵庫県内でも五本の指に入る有名進学校なのだ。3年生では東大・京大・神大・阪大などの国立大学の合格者は当然多い。関関同立などは滑り止めという生徒も少なくない。

事実、この吹奏楽部でも国立大学合格率が3月実施の模試でB判定だったのが数名いる。美香子、菜々香、照、そして洋平である。バリバリの進学校なのだ。その進学校に在籍する生徒のほとんどは5月の補講に抜かりなく出席するのがもはや恒例であった。恒例というよりも、義務であると言ったほうが正解かもしれない。いずれにしても、これに出なければ置いていかれるという妙な焦燥感を感じる子も多いのだ。

「進学校なんはわかるけど、ねえ」

「ウチの部に入部した時点で、コンクールがあることはわかってるんやから、そこまでヤイノヤイノ言わんといてほしいよねえ」

これが本音なのだろう。亜里沙と晴菜が同時にそう言った。

「ほんで？ 園田とかは知ってるん？ お母さんたちが来てること」

「いやあ、どうでしょうね？ 職員室にはおりませんでしたけど…」

…

「知らないほうが幸せじゃないですか？」

「まあ……せやろな」

周平も下手に何かを言うよりも、黙って流しておけばいいと思い、そのまま練習に移ることにした。しかし、既に時遅し。

「あ……しもた。課題提出してへんやん」

実香子が部室へ行くこうとしている最中に、英語のノートを提出し忘れていることに気づいたのだ。幸い、実香子の英語担当は大地である。職員室に寄って渡すにも、顧問ということもあり渡しやすい。実香子はそのまま職員室に向かい、英語のノート片手に戸を開けた。それと同時に、聞き慣れた甲高い声が耳を突き抜けた。

「非常識な先生ですね！ ウチの子の将来かかっているのに、何ですの！？ 沖繩に旅行って！」

「旅行ではないと先ほどから説明しているでしょう！ 合宿です！」

「そんなもん！ 旅行と似たようなモンです！ 受験を控えている

3年生は、今からが正念場なんですよ！？」

「それは百も承知です！」

「ほな、なんでこんな非常識な計画できるんですか！？」

実香子は目を丸くした。そして、その文句を言っている女性が自分の母親だと気づくと、眉をひそめた。

「お母さん！ お言葉ですが、今にしかできない貴重な経験っていうのも、あると思います！ 僕としては、それを優先したいんです！」

「そんなん、受験に何の役にも立たへんでしょうが！ 勉強したほうがずっとマシです！」

大地と実香子の言い争いに、周りの教師もタジタジである。実香子はしばらく呆然としたままであった。周囲には菜々香と照の母親もいた。

「強情な先生やね！ 何ですのん!？」

「それはこっちのセリフです！ そないに受験が大事なら、なんで1年生のときに部活入部させたんですか!？」

「他の部は部活が3年生の7月までなんです！ それがどうですか？ 吹奏楽部は。11月までとか言うてるやないですか!？」

「それは入部の時にお伝えしてあります！ ですので、承知の上だと私としては受け止めています!！」

「まあー！ なんて言い方！ どんな教育してるんでしょうね！ 浜唯（こ）も落ちましたわねえ!！」

さすがに立場が悪くなるのを警戒した周りの教師が、大地にひとまず謝るように促す。しかし、頑固な性格なのか、大地は折れようとしなない。

「とにかく！ ウチの部員たちも全員、沖縄合宿には賛同してくれただんで行きます!！」

「んまあ！ 親の言うことなんててんで無視ってことですか!？」

さすがに居心地が悪くなってきた実香子は、大声で叫んだ。

「お母さん!！」

驚いて振り返る実香子、照、菜々香の母。大地も驚いて目を丸くしていた。

「やめてよ！ こんな場所でみっともない!！」

「何て言い方すんの!？ お母さんは実香子のためを思って……!！」

「誰も頼んでへんやんか!！」

実香子が叫ぶ。

「だいたい、鬱陶しいねんお母さん、ホンマ！ あたしのやるコト成すコト全部に横から口挟んできて！ もう鬱陶しい！ やめて!！」

直後、乾いた音が響く。実香子の右手に握られていた英語のノートが手から離れ、バサツと音を立てて落下する。

「まったく……最近、家に帰って来るのも遅いし！何をやってんのかと思ったら、まだ部活になんか熱を注いで……アホらしい！」
アホらしい、という言葉を聞いた瞬間、実香子の顔があっという間に青ざめるのが大地の距離からでも一目瞭然であった。

「……何よ」

実香子が震える。

「何よ！お母さんなんか……あたしらの演奏、1回も聴きに来たこともないクセに！」

涙がボロボロと溢れ、実香子の大きな目からそれがこぼれ落ちて頬を伝っていく。

「わかりもせえへんくせに、どうのこうの言われたない！」

実香子は英語のノートを拾い上げるや否や、思い切り母親にそれを投げつけた。悲鳴を上げる実香子たちの母。

「園田！」

大地が職員室を駆けて出た実香子の後を追う。

「おおっ！なんや？」

ちよつど職員室に向かっていた洋平と悠馬が、実香子と鉢合わせになる。

「え？」

実香子の真っ赤な顔を見て、二人は目を点にした。実香子はそのまま何も言わず、階段を駆け上がったいく。

「佐藤！立花！」

大地が遅れて姿を現した。そして、こう叫んだのだ。

「園田を追いかける！」

第018話 好きなものやって何が悪い！

「おい！ 周平！」

練習をしようとしていたサックスパートの部屋に、悠馬が駆け込んできた。周平だけでなく、優花と華名もそこにいたので驚いて全員が目を丸くした。

「どないしてん、えらい慌てて」

「園田のお母さんが来て、島崎先生に直談判してんねん！」

周平は落ち着いて答える。

「知ってるよ」

「知ってるんかい！」

思わずツツコミを入れる悠馬。

「ほんで、それがどないしてん」

「それを見た園田がな、キレていまどっか行ってまいよってん！」

「はあ！？ どっか行った！？」

「せやから、皆で探さんとアカン！ 普段おとなしいヤツがキレると、何しよるかわからへんからな」

周平もさすがにそれを聞いてジツとしているわけにはいかなかった。周平に続き、優花と華名も部屋を飛び出す。

周平は悠馬の隣で彼に聞いた。

「ほんで、どっか行ったって見当もついてへんのか？」

「それがわかってたら、苦労せんわ！ とりあえず、上に行ったんはわかってんねんけど……」

行き当たりバッタリに探していたのでは、ムダ骨である。周平は悠馬に一旦落ち着くよう、声をかける。

「とりあえず、上に行ったんは間違いないから……」

その時だった。階下から女子生徒の悲鳴が聞こえた。

「なんや!?」

二人は近くの教室に入り、窓から顔を覗かせる。すると、その真上から何かがいきなり降り注いできた。

「うわーお!?」

驚いて退く二人。そして、バサバサ!と激しい音が下から響いた。
「なんやねん!?」

覗き込むと、昇降口のあたりに教科書やノートが散乱していた。上を見上げると、カバンからノートやら教科書をすべて放り投げている実香子の姿があった。

「おいおい! 何やっとなねんアイツ!」

「行くで、悠馬!」

周平と悠馬は大急ぎで階段を駆け上がり、実香子のいる屋上へと向かった。

「きゃあ!」

4階の踊り場で周平は女子生徒と衝突して尻餅をついてしまった。

「す、すんませ……あ!」

「あ!」

女子生徒は、未樹だった。

「……。」

フィツと顔を背け、周平はそのまま階段を駆け上がっていく。

「大丈夫か?」

悠馬が未樹に手を貸した。未樹は素直に悠馬の手を握り「ありがとうね」と言った。

「おい、悠馬! さっさとせえや!」

「待てやお前。お前のせいで後藤さんが……」

「知らん!」

大声に未樹と悠馬は思わず肩をすくめる。

「ゴメンな、なんか……」

悠馬は呆れ顔で未樹にそう言った。

「ええよ。気にせんといて」

ひとまず、未樹と悠馬も急いで実香子のいる屋上に向かった。二人が屋上に着いた頃には、周平が暴れ回る実香子の体を必死で押さえ込もうとしていた。

「おい、落ち着けや園田！」

「放して！ もう私、嫌やねん！ こんな勉強道具、死んでも見たくない！」

そう言って実香子はターゲット3000を放り投げた。思い切り投げ飛ばされたターゲットはそのまま落下し、昇降口横にある楠に引っ掛かってしまった。

「どないしてん！ お前、そんなヤツ違うやろが！」

「放してよ！ こんな勉強道具あったら、私は一生私らしくならんへん！」

「園田！」

周平があまりに耳に近いところで大声を出すので、これにはさすがに実香子も驚いて手を止めてしまった。

「やめろや！ こんなことしたって、何にも解決にならん！」

「……せやけど、こんな方法くらいしか私、反抗する方法知らんもん！」

「アホちゃうかお前！」

周平の一喝に、実香子は黙り込んでしまう。

「物に当たるな！ 人のせいにするな！ 自分が何にも抵抗も訴えもせんと、偉そうにモノ言うな！」

「……。」

ふと気づくと、屋上には未樹、悠馬以外に大地、実香子の母、利緒、洋平、智香子、愛美がいた。

「園田。お母さん、いてはるやん」

周平が泣きべそをかいている実香子に優しく言った。

「素直な気持ち、言わんとアカンのちゃうか？」

実香子は小さくうなずく。

「お母さん……。」

実香子の声が静まり返った屋上に響く。

「私な……部活、続けたいねん」

彼女の母も、黙って実香子の話を聞き続ける。

「勉強、大事なんはわかってる。でもな、私、ホンマこう思ってるねん。お姉ちゃん見てたら、確かにお姉ちゃんええ大学行って、いい会社入ったけど……毎日毎日、残業で。お姉ちゃん、まあ仕事頑張ってるし、それが嫌っていう風には私も、思っへんよ？」

実香子の声が震える。涙声になっているせいである。

「せやけど……私、こういう部活って、なんとなく、今しかでけへんのちゃうかなって思ってる」

大地が小さくうなずいた。

「私な！ ずっと……ホンマは、全国大会行きたかってん！ 今まで確かに、何かが足りへんかって、私ら関西大会止まりやったり、ヒドいときには県大会も突破でけへんかったけど……」

次の言葉は紛れもなく、実香子の本音であった。

「今年は、行けそうな気がする！」

その言葉に、周平が笑顔になった。

「島崎先生が来て、雰囲気変わってんもん！ 私もワクワクしてるし、そこにおる……森田くんも、元気になった。部の雰囲気、変わってん！ 私、これがチャンスやと思ってるねん！ せやからお母さん、お願い！ 合宿行かせて！ 私に……私たちに、もっと吹奏楽するチャンスちょうだい！」

実香子の母がようやく、口を開いた。

「そこまで……言われたら、しょうがないわね」

「お母さん……」

実香子の母が、大地のほうを見た。

「先生。お願いがあるんですけどね」

大地の表情が少し強ばる。

「完全に、ウチの子たちの指導、任せてよろしいですか？」

「もちろんです」

大地は間髪いれず答えた。

「部活だけではありませんよ。勉強面も、すべてです」

「それが教師としての努めです」

即答する大地に、実香子の母も実香子も、周平も未樹も驚きを隠せなかった。

「……そこまでハッキリ言うてくださったら、もう信用するしかないですね」

そして、母は実香子に向き直って言った。

「しっかり、頑張るんよ」

「うん！」

その表情を見て、ようやく周平の顔が緩んだ。

「……。」

その周平を見つめて、少し赤くなる未樹。そして、彼女は自覚していた。

（やっぱりあたし……）

春風がそっと未樹の頬を撫でる。その春風の中に少しだけ、新緑の薫りが漂っていた。

第019話 感情を出せば？

「なあ、未樹！」

弓華が未樹の顔を覗きこむ。実香子の一件が無事片付き、その日の部活も無事終えて、未樹と弓華は帰宅の路についていた。

「何？」

「アンタ、さっき屋上で森田くん見てたとき、顔赤くしとったやろー？」

それを言われた途端、未樹の顔が真っ赤になった。

「あつ！ やっぱりなあ！ めーっちゃわかりやすいやん、アンタ！」

弓華があまりに大声で言うので、未樹は慌てて弓華の口を塞いだ。

「なんなんよお？」

「声が大きいんよ、アンタ！」

「別にいいやん！ アンタが森田くん好きなコトに変わりはないんやから」

「せやから！ あたしと森田くんの状況知ってたらそんなん普通大声で言わんでしょ！」

未樹がそう言うのも無理はない。なにせ、1年生の後半から未樹と周平はご承知のとおり、口すらまともに利かない状況である。そんな二人なのに、未樹が彼のことを好きだなんて話が広まったりすれば、とんでもない状況になりそうなことは、容易に想像できた。

「なんでよお。つまんないの〜」

弓華が口を尖らせる。

「人の好きとかどうとかを、つまんないとかオモロいとかで判断せんといえよ」

未樹がそれ以上に口を尖らせて答えた。

「それよりさあ、どないなんやろね。ウチの部」

弓華は話を切り替えた。

「どないなんやろなって？」

「ほらあ。今日の調子やと、実香子はどっちかって言つと、なんていうか……島崎先生寄りになったよな？ そうなると、実香子もウチらの考え寄りってことに」

「ちよつと待って」

未樹が遮った。

「ウチ『ら』って何よ、ウチ『ら』って」

「そんなん決まってるやん。ほら、あたしとか森田くんとか佐藤くんとか未樹とか」

「なんであたしが入ってるんよ!？」

「ほな、何？ あんたは部長寄りなん？」

「ちよ!」

未樹が慌てる。

「何よ」

「声が大きいいねん！ 弓華、基本的に」

「あたし間違ったことは言うてへんけどな」

弓華は飄々とした感じで未樹の先を歩く。未樹はため息を漏らしながら弓華の後を追った。

「……。」

未樹と弓華が今しがた走って行った交差点に、周平が気まずそうに姿を見せる。

「ホンマ声デカいっつーのな」

その顔は赤くなっていた。

「おやおやあ？ 顔が赤いですが、森田さん」

周平の横から洋平が顔を覗かせる。

「そんなことあれへんわ」

「でもお、鼻の下若干伸びてますよお？」

八木沼久美が洋平の真似をして顔を出した。

「なんやねん、お前ら。いつの間に俺の後ろにおってん」

「後ろに気をつけないとアカンやないですかあ、先輩！」

久美がププツと笑った。

「やかましわ！ それより、明日ウィークエンド・イン・ニューヨークの合奏やで！ 八木沼ちゃんもソロあんねんやろ？ 園田と揃って先生に怒られへんようにせえよ！」

「はぁーい。それじゃ、お先に失礼しまーす」

久美が笑いながらそそくさと走っていく。洋平が隣で不服そうな顔をしている。

「何？」

「……別に。ただ、後藤もお前も素直やないなあ〜と思って」

周平がムツとした表情を浮かべた。

「別に、アホ正直になる必要はあれへんやろ」

「アホ正直で……バカ正直やろが」

「似たようなモンや」

周平は相変わらずの態度で先へ歩いていった。

「あのさあ？」

洋平があえて大声で言った。

「何？」

「そんなんで、後藤さんもお前も楽器できるわけ？」

「は？」

周平は洋平の言わんとしていることがわからず、顔をしかめた。

「ブサイク。その顔」

「やかましわ。それより、どういう意味やねん今の」

「言つたままやん。そんな素直にならんで、よお楽器吹いてるわお

前ら

「それが何やねん」

クツと洋平が周平の頬を突いた。

「痛いやんけ！」

「ほら！ それ」

「は？」

洋平が笑う。

「お前さあ、ほら。新しく決まったウィークエンド・イン・ニューヨークやっけな。あれのソロ吹くとき、めえっちゃエロい音吹くやん」

「エッ……！」

はつきり言っただけで下ネタが大の苦手な周平は、エロいという単語だけであつという間に真っ赤になつてしまった。

「ほんで？ 周平はあのソロ吹くときどんな感情込めて吹いてるん？」

周平は小声で恥ずかしそうに言い始めた。

「冒頭の……ゆっくりの部分のソロは……こつ、えつと……スラツとした金髪のお姉さんが、なんていうか……バーを歩いている……感じ……で……」

洋平はフンフン、とうなずきながら聞いている。

「んで……まだ、夜やけど段々夜明けで……ウィークエンドやから……金曜日の朝で……木曜日からまあ、バーで飲んじゃったけど今日も一日仕事がんばろーってなつて……」

「へえ〜！ それ、自分で考えてるん？」

周平は赤くなつたまま、小さくうなずいた。

「ほんで？ 中間のソロは？」

「あれは……あれやな。まさに夜に入つたばかりのバーやん！ ほんで、仕事帰りの男女がバーに集まつてこつパーツとさあ！」

周平のテンションが一気に高まる。そうなると周平はもう止まらない。

「ほんで、あの何やっけ？ 名前忘れたけどキラキラしたボールがパーツと回つて男女がテンションあげあげで踊りまくつて〜！」

「ミラーボールな」

洋平が地味にツツコむ。

「そうそれ！ ほんで、中盤のサックスソロはそのバーの映像って感じやで〜！」

周平が満足気に言い終えて座り込んだ。

「えらい感情を素直にぶつけたな」

「当たり前や！ 音楽には素直な気持ちぶつかけやんとアカンやろ」

「ほな、今の後藤さんとお前はどないなん？」

周平の動きがピタリと止まった。

「なんでそこに来るねん」

「だって。お前ら二人、全然感情出してへんやん」

洋平がブーツとワザとらしく頬を膨らませた。

「別にむき出しする必要ないやん」

「アカーン！ いまお前、音楽には素直な気持ちぶつけないアカン言うたトコやろが！」

「それとこれとは……」

周平は、それが別だとは言いつれなかった。

「別ではないやろ？」

洋平が聞くと、周平は小さくうなずいた。

「園田さんも今日、気持ちぶつけたよな？」

「うん……」

「周平もまあ、ちょっとは考えてみればって、俺は思うよ」

「……」

それから周平と洋平はひと言も言葉を交わさなかった。

「ほな」

洋平がスーパーの前で声をかけた。

「うん」

周平は小声で答え、すぐに洋平と別れた。

「素直……ねえ」

周平はそれからすぐに新学期始まってすぐのことを思い出した。

洋平と会い、新入生のことには期待していないと言い、寝転んだ拍子に見えたものを。

「あれはヒューツて感じやったな！」

思い出したのは、未樹のスカートの中。

「なるほど？ 感情とか出すって、こつこつこと……？」

少し路線がズれているものの、なんとなく洋平の言わんとすることがわかった周平は、妙に上機嫌で家へ向かって行った。

第020話 厳しい基礎練習

「起立！ 礼！」

「お願いします！」

4月24日（土）。今日の浜唯高校吹奏楽部は終日練習である。午前中からみっちり合奏をすると宣言した大地は予定どおり、9時に音楽室にやって来た。

「はい。じゃあ楽器を」

1年生も含めて全員が楽器を構える。しかし、大地の言葉は予想外のものだった。

「置いて」

「え？」

将輝は目を点にしている。

「ほら、何やっとな！ 楽器置いて、置いて！」

「は、はい！」

不満そうな表情の部員の視線も感じないまま、大地は続ける。

「ほんで、足首掴んで。おなか圧迫されるん、わかるか？」

「はい」

訳のわからないまま、実香子や将輝が返事をする。こればかりは周平や洋平も意図を読めなかった。

「はい。では、オレが5、6、7、8と言います。その後4拍かけて息を吸ってください。で、最後の1拍で限界が来とっても、さらにそこで1拍思い切り吸う！ その後、4拍息を止める！ で、8拍かけてゆーっくり、おなかに貯めた息を吐ききってください。で、4拍息を止めて吸って止めて……をしばらく繰り返し返してください。いいですか？」

「はい！」

「はい……」

やる気のない部員と、やる気を見せる部員の温度差がハッキリ感

じられる。しかし、大地はまったくそんなことなど気にしていない。
(何よ……楽器せつかく温めたのに、また冷めるやないの)

愛美は不満げに頬を膨らませる。

「金木！」

自分が急に呼ばれたので驚いて愛美は顔を上げた。

「ほっぺ！ 膨らませたらアカンで。絶対な」

「……はい」

「それじゃ、行くぞ。5、6、7、8」

スウウツ……と息を吸う音が音楽室中に響き渡る。

「止めて」

愛美と智香子が息を同時に止める。しかし、予想以上に苦しかったのか智香子が「ぶへっ！」と息を吐き出してしまった。その声を聞いて愛美が耐え切れず「ぶへっ！」と吹き出し、それがどンドン波及していく。トランペットが全滅してしまった。

「ストップ！ やり直し！」

「ええ〜？」

部員からブーイングが飛び交う。大地が「文句あるんならトランペットに言え。真剣な雰囲気壊しよったん、アイツらやからな」と言うと、部員全員から冷たい視線がトランペットパートに注がれた。「う、ごめん……なさい」

愛美が小声で謝る。

「はい！ もう1回！ 行くで！ 5、6、7、8！」

スウウツと再び息を吸う音が響き渡る。中学時代、これと同じ基礎練習をしていた周平にとってはなんでもない練習であった。しかし、こうした練習をする機会が少ない学校と多い学校ではその差が歴然だった。

大地には、半分以上の部員が真っ赤になっているのが明らかにわかった。特に金管パートでそれが顕著である。愛美や智香子、利緒、大樹、航平など大丈夫そうに見える部員でも顔を赤くしていた。

「吐いて」

その声に応じて苦しかったとばかりに息を思い切り吐き出す部員たち。しかし、やがて息が足りなくなつてプルプルと体を振るわせ始める始末。結局、この練習だけで部員たちは疲れを見せ始めたのだ。

大地はそんなことなど気にせず、すぐにロングトーンを始めた。

「はい。ベーの音階16拍吹いて4拍休んでの形で上がつて、上2回吹いて下がってください」

「はい」

「声小さい！ 特に1年！」

「はい！」

「行くで！ 5、6、7、8！」

入った途端に高音楽器、特にフルートとピッコロの音が乱れた。

「フルート！ アホ！ 音汚い！」

それに怯んだ菜々香が一瞬、吹くのをやめた。それからすぐに復帰しようとするが、それを大地がさらに嗜める。

「アホ！ 途中から入ってくんな！ 次の音から確実に入ってこい！」

「は、はい！」

「ええかー！ 落ちたらキリのいい場所で綺麗に入つてこい！ 焦つて中途半端に入られたら、作つてるハーモニーが潰れる！ 返事はええから、気をつけてくれ！」

音が変わる。ツエーの音に移った。

「汚い！ 周りの音聞かんか！ 先輩の音基準や！ ええか？」

大平、竹中、園田、森田、佐藤、金木、福崎、三沢、後藤を基準に各パート必死で合わせ！」

「はい！」

音階が上がるに連れて、次第に音がまとまっていっていった。それにつれて、大地の檄も減っていく。それに安心したのか、上のベーの音を吹いた途端、最後の部分でクラリネットの音程が乱れた。

「アホクラリネット！ 最後まで神経注げ！ 何やそのへニヨンッ

て音は！ アホ！」

将輝自身、これほどアホアホと言われるのは初めてであった。しかし、それが逆に悔しいと言う気持ちを生み、負けてたまるかという意識へと繋がっていった。

ロングトーンが終わる頃には大地も予想しなかったことだったが、全員の目がしつかりと彼を捉えていた。次は何や？ 何でも言うて来い。そんなことを言いたげな視線であった。

「よし！ ほなロングトーンはこれくらいにしとこか」

これくらい、と言いつつ大地は1時間半もロングトーンをしたのだ。時刻は既に10時半を回っている。

「ほなな」

ガサガサと部員たちは譜面入れを開け、課題曲と自由曲を取り出した。しかし、大地はまったく別の話をし出した。

「5月2日の日曜日に、この高校で地域のお祭あるやろ？ あれに出ることになったから」

「え！？」

「あの祭に！？」

部員たちがざわめく。愛美が言った。

「ホンマですか？ 外なんですよ？」

「ホンマやで。ほんでなあ〜」

明らかに嫌そうな顔をして北堀 きたほり 朋矢 ともや が言った。

「木管は日々に弱いんです。外の本番なんてやめてください」

「ほな、タオルぐるぐる巻きにして出たらええやろ」

「はあ！？」

続いて立ち上がったのは桃だ。

「金管、チューニング管抜いたら砂が付きます！ よおないやないですか！」

「洗えば終わりやろが」

「洗ったら調子変わります！」

「そんな偉そうなこと言えるレベルになってからそういつことは言

え」

桃が「ムカつく！」と言い捨てて座った。

「ほな、こうしよか。その行事には有志が出る。それで文句ないやろ？ ほな、いま採決取るで。2日の日曜日、本番出てくれる人」
真つ先に手を上げたのは周平。それから優花、未樹、航平と続いていく。最終的に各パート半分ずつ程度が揃った。明らかに足りないのはクラリネット（将輝と未央、雅貴）、オーボエ（ゼロ）、トランペット（木下美里のみ）、フルート（栗田 雛のみ）だった。それでも大地は気にせず、出ないと言った部員たちは午前中、個人練習にして合奏を始めるのだった。

不安顔の参加者をよそに、大地は楽譜を配布した。

明日の記憶

蘇州夜曲

コパカバーナ

A列車で行こう

デイズニー・メドレー

鹿男あをによし

ジャパニーズ・グラフィティ〜時代劇絵巻〜

「どないや？ 時間は少ないけど、全部やったことある曲やろうから、大丈夫やる！？」

確かに時間はあと1週間と迫っているものの、すべて1年生を除いて全員が経験済みの曲であった。

「1年生も！ やったことある曲、揃ってるやろ！」

「はい！」

「よし。ほなな、今からサツと合わせてみよ。ほんで、明日個人練習の日にするから練習しっかりして、ほんで金曜日と土曜日の午前中でバチツと合奏や。ええな？」

「はい！」

「ほな、明日の記憶から！」

「はい！」

部員たちは参加しない者たちのことを考える余裕もなのまま、合奏へと移っていった。

第021話 心底震えた

「はい、じゃあ『鹿男あをによし』開けて」

「はい！」

『明日の記憶』を通してから、大地は次に『鹿男あをによし』を開けるように指示した。鹿男あをによしは、玉木宏と綾瀬はるか、多部未華子などが出演したドラマで2008年に放送された。漫画が原作となっている。

冒頭はホルンのソリから始まる。ホルンは今回洋平、良輔、樹、この4人が出る。各パート1人ずついるので、ひとまずは問題なく演奏ができる。しかし、樹は病気で1年間入院していた影響もあり、ブランクがあるので音量が少し弱くなっている。

「相内、そこしっかり小林をカバーしてあげてくれるか？」

「はい！」

「それで、佐藤は古舞をカバーしてあげて」

「はい！」

「小林と古舞は先輩二人の音しーっかり聴いて、真似してや」

「はい！」

ホルンのソリが終わり、すぐにほぼ全員がメロディや伴奏で演奏をする。雰囲気が一変し、テンポが上がって調も短調に変わる。バスドラムには友、ティンパニは詩音、スネアドラムは悠馬、ウインドチャイムは未紅、鈴は紗重、サスペンドシンバルは達矢。とにかく打楽器の忙しさもハンパではないため、空気を読んだのか単純に全員が積極的なのはわからないが、打楽器だけは全員が揃っていた。

「トロンボーン！ チューバに負けとる！ しっかりー！」

その声に応じて利緒の音が大きくなった。

トランペットのメロディがクラリネットのトリルの後に入ってくる。そのメロディはクラリネットが呼応する形で合いの手を入れ、トランペットが吹き、木管が応えるという形を取っていた。

「スネア！ もっと目立て！ お前ある意味ソロや！」

「ういっす！」

「今中！ ウッドブロック勢いよくー！」

「はい！」

「鈴！ 稲葉！ 聞こえへん！」

「はい！」

単に演奏をいちいち止めて指示をするのではなく、曲中で指示をするのが大地のスタイルだ。そのほうが印象的だという考えの元であつた。

そして、いよいよ周平のソプラノサクスのソロが入る。

「いいかあ？ 思い切り来い！」

周平の眼差しが大地にしっかりと注がれる。そして、指揮の要求以上に周平が鋭いソプラノサクスの音色を響かせた。これにはさすがの大地も鳥肌を立ててしまった。

（ここまでとは……）

驚いたのは大地だけではない。洋平と良輔も吹くのを忘れ、呆然とそれを見ていた。洋平も初めて見るような周平の眼差しと音色。しかも、これが初見の楽譜というところがさらに彼らを驚かせていた。

しかし、それだけではなかつた。その後続くフルートのソロ。ハナからフルートは参加者が一人であつたため、元からソロなのだがそのフルートを吹く栗田 雛の音色にも部員たちは思わず感嘆の息を漏らした。

周平の華美なソロの後に将輝、雅貴、未央がメロディを吹いてそれを引き継ぐように雛が4小節だけソロがあるのだが、そのソロが実に響きが良く秀逸なものであつた。これにも大地は驚いていた。

「よっしゃ！ テンションもっと上げてええぞー打楽器！」

その言葉を聞いた途端、悠馬の表情がイキキしたものに変わった。もはやノリノリで、そのテンションに合わせるようにトロンボーンの伴奏がテンションを上げる。そしていよいよフィナーレだ。

「ホルン！ 吠えるやー！」

ベーの音が爽快に響く。スネアドラムとティンパニの打ち込みもテンションを上げ、最後の最後でスネアを基準としたトゥッティでの打ち込みが入った。

「……はあ〜」

演奏を終えるなり、ため息を漏らして大地が座り込むので部員たちは意味がわからず、目を丸くしていた。

大地はものすごい高揚感に包まれていた。正直言って、この吹奏楽部のレベルでここまでの演奏ができるとは思っても見なかったのだ。

「どないしてん、お前ら」

「……？」

大地の言葉が理解できず、キョトンとしている部員たちを見て大地がようやく笑った。

「めっちゃいい演奏できるやないか……！」

その言葉を聞いてようやく部員たちが笑った。それまでハッキリ言って、大地のことが苦手だったパーカッションの部員数名も笑顔を浮かべる。

「相内」

「はい！」

特に笑顔が印象的な良輔に大地が聞いた。

「どないやった？ 今の合奏」

「最高っていうか……最高です！」

答えになっていない答えに航平が「わけわからんコト言うてんちやうぞー！」とツツコミを入れた。ドツと笑い声 que 起きる。

「よっしゃ！ ほな、みんなやればできるんや。いいか？ 今の演奏はどこが良かったと思う？」

「うーん……」

部員たちが真剣な表情になっていく。しばらくの沈黙の後、未樹が呟いた。

「ホルン……」

「え？」

洋平、良輔、樹、このはの4人が未樹のほうを見る。

「ホルン。いつもより、なんていうか……カッコ良かったです」

それを聞いた大地がニカッと笑う。

「せやな！ いつもより音が太くて、響きのある音してた。それはやっぱり、お互いがお互いをカバーしてたからやろうな」

見つめあう4人。洋平と良輔はこのはと樹をカバーし、樹とこのはは二人の音をしっかりと聴いて、できる限り寄り沿うようにしようとした。結果として音が融合し、綺麗なひとつの音となって飛んだのだ。

そして、そのホルンに刺激を受けたトロンボーンとチューバが、テンポが上がってすぐに勢いを上げて行く。トランペットやクラリネットの呼応するメロディがこだまのように響き、やがて周平のソプラノサクソスに伝播する。

「全員が関係し、影響する。それが吹奏楽とか、管弦楽とか、軽音楽、合唱、とにかく音楽全般に言えることやと思うで。それにこれは、スポーツでもそうやろう？ 野球で応援する側が盛り上がりれば選手側も刺激されて良い結果出せるやろうし。チームが沈滞すれば応援席にもそれが波及する。お前らもテレビでそういうの、見たことあるやろ？」

「はい！」

「やったら、自分勝手に吹くんやなくて、ここは目立っていいのかわ、それとも控えめにすべきか。そういうのをしっかりと考えて吹くようにしいや。少なくとも、この場における君らは、それができるはずや」

未樹がそこで気づいた。大地が「お前ら」ではなく未樹たちのこ

とを「君ら」と呼んだことに。

未樹がニコニコしながら大地を見てみると、「どないしてん、後藤ご機嫌やんけ」と笑った。

「いえ！ ただちよつと嬉しかったんです」

「なんやそれ！ 何が嬉しいねん！」

悠馬のツツコミに今度は爆笑が起きる。

その爆笑を、たまたまお手洗いに来た良平が聞いていた。思わず楽しそうな雰囲気誘われ、良平はそつと音楽室に近寄った。

「……。」

笑顔を浮かべる達矢、良輔、美里の姿が見えた。

「ええなあ……。楽しそう」

「何が？」

驚いて振り返ると、下条 由里が後ろに立っていた。由里は怪しげな笑みを浮かべて良平に言う。

「別にええんよ？ 未樹たちの所に行っても」

良平の顔が強ばる。

「その代わり、わかるやんね？ 中途半端なことやってるっていうのは。別にええんよ、あたしたちは全然困らんからね。別にアンタ一人おれへんなったところで、こつちには北堀くんがあるから。

ただ、わかっているとは思うけど。さっきの栗田さんの音、聴いた？

明日の記憶のオーボエソロ、彼女ひとりで十分やったやんね。今さら戻ったところで……。意味あんのかなあ」

良平の顔色が悪くなる。由里はそれに気づかないフリをして「まあ、最後に決めるのは葛和くんやしね」と言い残してその場を去っていった。

「よし！ 次はディズニーメドレーしよか！」

大地の快活な声が響いた後に「はい！」と参加する部員たちの声が良平の耳にうるさいほどに聞こえてきた。

「……帰る」

良平は重い足取りで音楽室の傍の階段を降り、昇降口へと向かう

て歩いて行くのだった。

第022話 かかってこんかい！

「よし。そしたら次の曲を……」

大地がそう言っつて総譜を捲ろうとしたところで、視線が窓の外へ向いた。

「先生？」

「あー……いや……ちょっと待ってくれへんか？」

そう言っつなり、大地は思い切り窓から身を乗り出して大声で叫んだ。

「こらー！ なんで黙って帰ってるねん！」

あまりの大声に周平も未樹も、音楽室にいる全員が目を丸くして言葉を失った。それはもちろん、その声を差し向けられた人物

葛和 良平も驚いてそちらを見て目を丸くしていた。

「は……」

良平は突然の出来事に呆然としてしまい、思うように足が動かない。帰ろうとしているのに、足が言うことを聞いてくれないのだ。

「なんか用事かー？」

飄々とした雰囲気で大抵は良平に聞き続ける。良平は苛立ちが出てしまい、つい大声で返してしまった。

「先生には関係ないでしょ！ 俺、もう今日は練習する気ないから帰るんです！」

「関係ないことあるかあ！ 俺、吹奏楽部の顧問やぞ。お前の入ってる吹奏楽部の顧問やぞ」

紛れもない事実をあつさり告げられ、モヤモヤとした気持ちのまま募る良平。知らん振りを決め込んでそのまま帰ろうとしたのだが、その背中にまた大地の声が飛んできた。

「まあ、お前も今年で16歳になるし！ そろそろ大人に指図され

へんでもいろいろ物事決めれる年齢や思う！ 練習したくなったら、いつでも音楽室来いよー」

「……。」

「ほな！ 今日は気をつけて帰れ！ よし！ 練習続きやるでえ」
大地の声を聞こえないフリをしながら良平は帰ろうとする。しかし、その後聴こえてきた、大好きな吹奏楽の曲。それが良平の足を止めた。

「えーっと……よし。ほな『明日の記憶』出して」
「はい！」

曲が進んで行き、そしてオーボエのソロに差し掛かる。オーボエの朋矢も良平も本番には欠席なので、フルートの雛が代吹きをする。しかし、やはりオーボエとフルートの音色は根本的に違うため、響きも大きく異なってくる。

物足りへんなあ、と大地が言う前にボソツと同じ声が聞こえてきた。

「物足りへん気がする……」

その声は未樹の声だった。

「後藤？」

未樹がハツとした様子で大地のほうを見た。

「何て言うた？」

「え……いや、別に……」

未樹は恥ずかしそうに俯きながらごまかそうとする。

「言いたいことは、ハツキリ言えばええんやで？」

「え……いいん、ですか？」

未樹が驚いたように聞き返す。

「いって……誰かアカン言うたんか？」

その言葉で音楽室の空気が一瞬で変わった。周平や洋平、弓華、久美などほぼ全員が何かに怯えるような、そんな表情をしたのだ。大地もそれをすぐに察知した。そしてその方向 空席になった下条 由里のほうを見ていた。

「はは〜ん……なるほどね」

大地がニカツと笑う。そして、教師の立場であれば普通は言わないようなことを言ったのだ。

「下条のこと、お前ら気にしとんねやるー」

周平には地雷を踏む予感がした。しかし、地雷を踏んだところで本人はいない。

「気にせんでええって！ アイツ、高飛車なところあるけど、実際そんなに偉そうな権限とか持ってへんやる？ 2年生やしな！ まあ、部長も下条と仲ええみたいやけど、俺、あんな澄ましたヤツ嫌いやしな！ アイツおつても、なあんか空気悪いっていうか。あれやる？ みんな今、それを一瞬気にしたやるー！」

あまりに言いたいことを全部大地が言い切ってしまったため、全員が啞然としている。

「ん？ どないしてん？」

全員がポカンとしているので、大地は不思議そうに部員たちに聞き返した。

「いや……」

悠馬がポカンとしたまま答えた。

「俺の思ってること、全部言われたから……」

「え？ 立花、俺と同じこと思ってたんか！」

「う、うん……」

「じ、実は」

久美が手を挙げた。

「あたしも思ってたました」

「え。やだ。久美も？」

菜砂が驚いた様子で久美に聞く。

「え？ 菜砂も？」

「そうなの！ 私、由里のこと正直苦手でさあ〜」

いつの間にか久美と菜砂から始まった部活内での不平不満が噴出し、ぶつちやけたことを言い倒す時間のような状態になっていた。

周平は特にその話の輪に入ってはいなかったが、部員たちが思い思いに自分たちの思っていることをハッキリと言っている様子に、新鮮な雰囲気を感じ取っていた。

「はい！ ストップ！」

そこで大地がストップをかけた。

「お前ら、文句多すぎるねん！」

「だあーってえ。なあ！」

久美が口を尖らせている。

「あんなあ、ええか？ 文句とか不満があるんやったら、その場で言わなアカン！」

「せやけど先生」

洋平が手を挙げる。

「なんや、佐藤」

「金木とか、櫻井とかがそんなこと言わさん嫌な雰囲気作ってきたよんねん。せやから、部員が何かハッキリ物を言う機会っていうのがウチの部、極端に少ないねん。こういうの、なんて言うんかはわかれへんねんけど」

「あれやな。独裁政治的やねんな」

「そう！ それ！」

ドツと音楽室が笑いに包まれる。

「それにハッキリ言い返すような気持ちを、お前らも持たなアカン。ええか？ 音楽するのにもなあ、そんな中途半端な気持ちやったらアカンねん！」

そこで全員がハツと顔を上げた。大地がニカツと笑う。

「音楽的なことでも、それ以外の不平不満でも何でもええ！ 俺にガツーンぶつけてこい！ かかってこい！」

「……。」

「返事！」

「はい！」

それと同時に。音楽室のドアが勢い良く開いた。

「そ、そしたら俺もこの合奏に入れてください！」

そこには譜面台と譜面、そしてオーボエを大切そうに抱えた良平が立っていた。

「葛和くん……！」

雛が嬉しそうな声を上げる。

「よっしゃ！ ほな、オーボエも入れてもう一回『明日の記憶』！」

「はい！」

先ほどとは少し違う、明るさのこもった返事が音楽室から響き渡った。

第023話 平等に行くので

4月26日月曜日。一昨日の件もあり、音楽室に集まった部員たちの空気は微妙なものであった。部長にもかかわらず、本番に出ないことを表明した愛美も、少し居づらそうにしている。それとは逆に、半分脅迫のようなことを言われても合奏に参加し、本番参加側へとシフトした良平も居づらそうにしている。

誰一人口を利かない。こんな部活があるのだろうかと思うが、いまここに現実として、そのような部活があるのだ。

「起立」

大地の姿が見えたので、愛美がしょげた（ように聞こえる）声で号令をかける。

「礼」

「こんにちは！」

一応、挨拶は大声でする部員たち。さもないと、何度も挨拶をやり直しさせられることぐらいは覚えたからである。

「はい。着席して」

大地が座るのを確認したように部員たちが着席した。

「後藤」

「は、はい！」

「今日は何月何日？」

「4月26日ですけど……」

「はい！ そうですね。じゃあ……氷室」

「はい」

「コンクールの西阪神地区大会はいつですか？」

「7月31日です」

「はい！ そうですね。正味、3ヶ月弱です」

その言葉に緊張が走る。

「そこで。そろそろ……コンクールに出場する部員を選定します」「え?」

全員が声を上げた。

「ま、待ってください先生!」

納得が行かないのは利緒だ。

「なんや?」

「ウチの部、ちょうど60人なんですよ!? 60人やつたら、ちょうど規定の人数いっぱいっばいやから、全員で出られるんちゃうんですか?」

「せやなあ。全員で出られるなあ」

大地が思い出したように言う。それを聞いて利緒も安堵の表情を浮かべた。

「ほな、何も選定なんかいらへんのんと違うんですか?」

「せやけど、福崎。例えばお前が最高の音を吹いたときにヘッポコな音吹かれたら、どないする?」

「え……」

利緒が言葉を失った。

「しかも、その音のせいで福崎の音は台無し」

「……。」

「困りませんか?」

「それは……さすがに……」

「やろ?」

「でも!」

次に手を挙げたのは朋子だ。

「何? 和泉」

「みんな、コンクール出場して、上位の大会進むの目標に頑張ろうって思ってるんです」

「ふーん。その割に、他の本番ないがしろにするんや?」

「それは……」

大地の言葉に朋子も黙り込んでしまった。嫌な沈黙が起きる。

「いいですか？」

それを破るように手を挙げたのは、副部長でもある大輝だった。

「はい、三沢」

「俺は先生の意見に同意です」

「なんでや!？」

これには周平が真っ先に反応した。立ち上がって何かを言いかけたが、すぐに大輝が遮った。

「まあ、聞けや。シユウ」

「……。」

いまひとつ納得が行っていないようだが、周平はひとまず席に着いた。

「俺は、今の部の状態はハッキリ言っただけで不健全極まりないと思っただけです」

「不健全で……。」

愛美が困惑した様子になる。

「ホンマのこと言っただけで何が悪い？」

「……。」

大輝の言葉に愛美は返す言葉もない。

「この状態を打開するには、全員が何かしらに向かって努力せなアカンと思います。幸いにも、大なり小なり俺たちの部は『コンクールで上位に進む』という目標があります。これをうまく考えれば、お互い切磋琢磨するいいキツカケには、なりませんか？ どうですか？」

誰も特に反応しない。大輝はある程度予想していたので、そのまま気にせず続けた。

「もしも、コンクールがオーディション形式になるくらいなら、こんな部辞めるって言う人、手え挙げて。ほんで、手え挙げたならここに退部届あるんで、今すぐ書いて出て行ってください」

「ちよ……。」

周平がさすがにそれはやりすぎだと感じて、大輝を制しようとした。しかし、優花が周平の制服を引っ張って「いいから!」と無理やり彼を着席させる。

「いませんか?」

もう一度優しく問う。誰も手を挙げなかった。

「先生。質問があります」

「ん?」

「選定、って言いましたよね?」

「ああ」

「それは、合格すれば60人全員が選ばれる可能性もあるって解釈して、いいですか?」

その質問に大地は思わず目を丸くした。しかし、すぐに笑顔で彼はこう答えた。

「当たり前やる」

大輝がそこで全員に言う。

「聞いたか!? 選定も、俺らの努力次第! どないや? 負けてられへんで、みんな!」

その言葉に、大なり小なり部員たちの闘争心に火が点いた。

「先生、この場合は3年も2年も1年も関係ありませんよね?」

「当たり前やる。学年なんて関係あるか」

「よっしゃあ! ほな、今日から俺と武田尾はライバルや!」

「ラ、ライバルですか?」

真咲が戸惑っている。

「おう! お互いライバルやから、負けんように練習バリバリするで!」

「……。」

「武田尾! 返事!」

「はっ、はい!」

真咲が釣られるように答えた。

「ほな先生! 話、続けてください」

「よし」

大地は様々な条件や期日を話していく。大輝の言葉どおり、選定には制限がない。60人全員が出られる可能性もあれば、結果次第で半分の30人になる可能性もある。それもこれも、部員たちの努力次第。

選定には課題がある。課題曲の各パートで1回はメロディがあるので、その部分と伴奏で特に重要だと大地が感じた部分を演奏。そして、自由曲でも各パートで重要な部分を選び、それを演奏する。それを聞いて、判断するのは対象パート以外の部員たち。つまり、選定対象パートがサククスであればサククスパート以外の部員たちがサククスパート全員の演奏を聴き、良かった者と悪かった者を選定するのだ。

そして、悪かったという票が10票以上を占めた部員は必然的に第一次選定の時点ではコンクールメンバーから外すという条件だった。

期日は5月5日。1週間弱という厳しい日程である。さらに、2日の本番に出演する者は練習時間が取れない。

「ほな、本番に出る者も出えへん者も、しつかり練習頑張るように！」

「はい！」

周平は一気に意識が高まった。本番に出るからといって、出ない部員たちよりも劣った演奏などしたくない。今までそのような闘争心が燃え上がったことはいまだかつてこの部ではなかったが、初めてその闘争心に火が点いた瞬間であった。

第024話 男子のやる気、女子の気持ち

「なあ……」

未樹が楽器を片付け終えて楽譜をロッカーにしまっている最中、実香子が話し掛けてきたので未樹は少し驚きつつ、答えた。

「どないしたん？ 園田さん」

「あの……な」

「うん」

実香子はモジモジした様子で口をゴニョゴニョ動かしている。未樹もどうしていいかわからず、困った表情を浮かべるばかり。そこへ、弓華と未央がやってきた。

「どないしたん？」

弓華が珍しい組み合わせに興味深そうな表情をしている。

「あ……えっと」

実香子が急にやって来た弓華に少し遠慮しているのが未樹にもわかった。

「あ！ そうや！ なあ、もう残ってるんであたしらとサトツペと森ちゃんとか男子だけやん。鍵閉め男子に任せて、あたしら一緒に先帰らへん？」

未央が弓華に同調する。

「ええやん、それ！ やっぱさ、もう夜遅いし大人数で帰ったほうが安心やろ？」

「え……でもええの？」

実香子が心配そうに聞き返す。弓華はバシバシと実香子の背中を叩きながら「ええに決まってるやないの！ な、未樹！」と笑顔で答えた。未樹は複雑そうな表情を浮かべつつ、小さくうなずく。

「ほな、決まり！ あたしサトツペと森ちゃんに言うてくるわ」

弓華はバタバタと音楽室のほうへ走っていく。扉を開けると周平、

洋平、悠馬、光晃の4人がいた。

「どないしたん？ まつもっちゃん」

悠馬が弓華に気づいて聞く。

「あんな、あたしらボチボチ帰るんやけど、アンタらどないすんの？」

「あー、悪い。俺らもうちよい練習して帰りたいねん。先帰っててもろてええかな？」

答えたのは周平だった。弓華は「ええよ！ ほな、悪いけど鍵閉めよろしく！」と言って音楽室を後にする。

「どないやった？」

未央が戻ってきた弓華に聞く。

「大丈夫！ 閉めてくれる言うてるから、あたしら先帰ろう！」

「よし！ 決まり。行こ、ミキティ、園田さん」

「うん」

実香子と未樹はまだ少しよそよそしい感じを残しながら、一緒に部室を出た。出る直前、未樹は音楽室のほうを振り返る。するとアルトサククス、テナーサククス、ホルン、スネアの音が響いていた。どうやら『ウィークエンド・イン・ニューヨーク』のメロディ部分を練習しているようだった。

「ミキティ！ 何やってんのー？」

「あ、うん、いま行く！」

未樹は急いでスリッパを履き替え、先に歩き出した弓華たちを追いかける。

「あたしら、全員梅田方面やんね？」

阪急電鉄芦尾川駅に着いてから、未央が確認する。

「うん。あたし、園部」

未樹が答える。

「あたしは宝宮北口で乗り換えて大林。園田さんは？」

「私は武庫荘。松本さんは？」

「っていうかさあ、実香子ちゃん」

呼ばれなれないあだ名で呼ばれ、実香子がギョツとした様子になる。しかし、弓華は気にせず続けた。

「せっかく同じ部でさあ、こうやって一緒に帰ってるんやから、苗字呼びとかやめへん？」

「え……でも、そんなに急に」

「ええやないの！ 仲良くなつた証拠やん！ なっ！」

実香子はしばらく戸惑っていたが、「ほな……弓ちゃん」と恥ずかしそうに弓華のことを呼んだ。

「きゃー！ 嬉しい！ 実香子ちゃん！」

弓華がギョツと実香子を抱き締める。

「ちよつとお！ アンタらだけズルい！ なあ、実香子ちゃん！

あたしも気軽に呼んでえよ！」

「え……ほ、ほな、未央ちゃん」

「いやー！ なんか嬉しいわあ！ ちよつと、ミキティのことも気軽になんか呼んだって！」

突然自分に話題の矛先が向いて、未樹は戸惑って変な笑い方をしってしまった。

「嫌やあ！ 未樹、なにその変顔！」

「ちよ！ あたし別に意識してやったわけちゃうのに……あっ！」

実香子が笑っていることに気づいた未樹は、真っ赤になってしま
う。

「アハハ！ 見てえ！ ミキティ、めっちゃ赤い！」

「……もう！ やめてえよ！」

「ほらほら、実香子ちゃん！ なんか親しみ込めて呼んだって！」

実香子は笑いつつ、こう未樹を呼んだ。

「ほな、ミキティで」

未樹は未央以外の人にそう呼ばれるのは初めてで、なんだかむずがゆくなるのだった。

「それにしてさあ」

阪急電鉄の各駅電車に乗り込んだ後、弓華が尋ねた。

「どないしたん？ 急に」

実香子のことだろうと未央と未樹はすぐに察しがついた。実香子も気づいたようで「うん……」と恥ずかしそうに俯く。

「あつ。その表情かお。あたしは気づいたで」

弓華がニコツと笑う。そしてそつと実香子に耳打ちして何かを言う。実香子はあつという間に真っ赤になった。

「え？ 何、何？ めーっちゃ気になるやん！」

未央がジタバタとしているうちに、宝宮北口に到着する電車。

「あーん！ 残念。あたし、乗り換え。高津方面やねん」

弓華が口を尖らせる。

「あたし大林。残念やわあ」

未央も口を尖らせた。

「未樹！」

「え？」

弓華がビシツと未樹を指差す。そして、そつと耳打ちした。

「実香子ちゃんの恋愛相談、乗ったって」

「え？」

「ほな！ ミキティ！ 実香子ちゃん、また明日ね！」

「うん。バイバイ」

「バイバーイ」

弓華と未央はそう言うつと電車を降り、乗り換えのために改札方面へ階段を上がっていく。そして、ポツリと残された未樹と実香子。車内には偶然にも、二人しかいない。

アナウンスと共に、特急・梅田行きが滑り込んでくる。特急から武庫荘、塚橋、園部の各駅方面に乗り換えるサラリーマンや学生が多く各駅電車に乗り込んできた。それまで静かだった車内がにわか賑やかになる。

「あんね」

実香子はその賑わいに紛れて、喋り始めた。

「ん？」

未樹がぎこちなく反応する。

「変なこと、聞いていい？」

「変なこと？」

未樹は首を傾げる。

「違っかつたら、すぐ否定してくれたらええんやけど」

「うん……」

「……と……ううん、ミキティ……さ」

「うん」

そして、未樹は実香子の言葉に一気に顔が赤くなってしまった。

「ミキティ、森田くんのこと、好きやんね？」

ドクン、と心臓が鳴り響く。

「わかるよ。ミキティの森田くんを見る目、弓ちゃんや未央ちゃんと違っやん」

「……。」

未樹は緊張と戸惑いでうまく口が開かない。そうこうしているうちに、電車が発車する。実香子が下車するのは次の武庫荘駅だ。

「あたし……」

驚くほど素直に出た。

「好き」

実香子が一瞬驚いた表情になったが、すぐに笑顔になった。

「良かった！ あんね……あたし、仲間が欲しかってんよ」

「仲間？」

「うん。だって、あの妙な雰囲気の中でさあ、誰かが誰かを好きとか、そんなん言える状況ちゃうやん？」

それは確かにそうであった。未樹もこうした話をしたことは、部活ではなかった。奇妙とも思えるほど、3年間で一度も。

「せやから、今日こうして言えるようになって嬉しいわ」

実香子が笑う。そして、電車が武庫荘に向かって減速する。やがて、ゆっくりと停車した。

「ほな」

実香子が立ち上がる。未樹は実香子が誰を好きなのか、聞こえようかと考えるのだが口が開かなかった。すると、降りる直前に実香子が未樹にそっと耳打ちした。

「あたし、立花くん好きやねん」

「えっ」

「じゃあね！」

プシューッ！と音がしてドアが閉まる。本当？ともそうなの？とも言えない。微妙な表情をしたまま、自分が実香子を見送っているのを未樹は感じ取っていた。

あたし、立花くん好きやねん。

「好き……か」

未樹はいろんなことを思い出す。今も昔も、吹奏楽が好きなことには変わりはない。小学校から吹き続けているチューバ。それを人に話すとしても驚かれるが、未樹には当然のことだったので、驚くことではない気がしていた。

初めて出会ったときの周平の顔が一瞬、蘇った。最初で最後の彼の笑顔が、胸に突き刺さる。

未樹は顔を左右に振りながら気を紛らわせて、もうすぐ降りる駅なので荷物の準備をするのだった。

第025話 オレら、いつまでも腐ってません

「先生！」

職員室に飛び込んできたのは、利緒だった。

「おお、どないしてん福崎」

「先生、話ちやいますよ!？」

「え？ 何のや？」

「参加人数です！ ヤバいですよ！」

利緒が先日、参加人数の話をしたときに彼女は「60人が規定人数なので、いっぱいいっぱい出られるのでは？」と聞いたことだ。大地はこう言ったのだ。

全員出られる、と。

大地の顔がみるみる青ざめていく。

「……違っかつたんか？」

「違っんです……」

利緒もあからさまに落ち込んでいる。何しろ、既に部員たちは「頑張れば全員出られる」という風に考えてしまっているからだ。

「マズいな……。どないしたもんか」

大地も頭を抱え込んだ。まさか今さら「実は全員出られない」などとは言えない状態であるからだ。

実際、コンクールに出られるのは高校生の場合、55名である。浜唯高校の場合は5人がコンクールメンバーから外れてしまうことになるのだ。しかし、それをいま告げてしまえば一部とはいえ、やる気が出てきている部員たちのそれを削いでしまうのではないか。大地はそこに不安を覚えていたのだ。

「失礼しまーす」

そこに飄々とした雰囲気であったのは、他でもない周平だっ

た。

「お、おお！ 森田あ」

「なんですか？ 変な声出して」

周平はあからさまに警戒しているように見えた。大地は人数のことを言おうかどうか迷っているようにも見えた。

しかし、次の瞬間周平から出てきた言葉は大地と利緒の心配を吹き飛ばすような言葉だった。

「あ、せや。先生」

「ん？」

「先生こないだウソついたでしょ？」

利緒と横目で目を合わせる大地。冷や汗のようなものが背中を伝っていくのがアリアリと感じられた。

（どないする！？ ここで謝ったほうがええんか？ どないすんねん、俺！）

しかし、周平は次にこう言ったのだ。

「先生もズルいですよね！ ああやって、オレらに違和感持たせて、自分らでコンクールのこと調べようって仕向けたんでしょ！」

「へ？」

周平が言うには、こういうことがあったのだ。

あの60人と言う言葉に違和感を抱いたのは、洋平だった。そんな人数ではなかった気がする、と彼は言ったのだ。そこで、すぐに大輝が調べたところ、なんと55人であることが判明したのだ。

そこで普通なら吹奏楽部顧問のクセに人数制限も知らないのか、という話になるのだが、そうはならなかったのが大地の今までの指導のせいだったのかもしれない。

「島崎先生のこっちゃん。なんかいらんこと企んでるんやで」

そう言ったのは悠馬だった。

「俺らにもつと意欲持ってもらうためにそうやって、けしかけてきたんか！」

そのときそう言ったのは洋平だったが、それはそれは嬉しそうな

表情だったという。

「……………」

「先生も悪い人やけど、福崎もよおやるわあ。お前の演技、すっかり騙されてしもたで！」

周平は笑いながら利緒の肩をつついた。

「……………」

利緒が大地のほうを見る。先生、どないします？と聞く視線だった。大地は目配せしてこう訴えた。

そのままうまく話を合わせる。

利緒は小さくうなずき、すぐにこう返した。

「なあーんや！ バレちゃってんなあ！ せやねん、実はウチと先生グルやねん！」

利緒はペロツと舌を出してそう答えた。

「うわあ、気持ちわる！ お前、そんなんでも全然かわいくないで」

「ちよっ……………女の子に普通そんなこと言う！？」

利緒は真っ赤になって周平に食って掛かる。

「あー、はいはい！ ここ職員室！ 静かに！」

「へーい。ほら、福崎。そろそろ行くで。部活始まる時間やる」

ギヤーギヤーと騒ぎ立てる利緒を無理やり周平は押しながら職員室を出て行く。

「先生」

周平の声に振り返ると、イタズラっぽく笑いながら彼はこう言った。

「俺たち、いつまでも腐ってるわけ、ないですからね！ そこらへん、よろしくお願いしますね！」

「……………あ、ああ」

大地はしばらく呆気にとられていたが、もうすぐ合奏の時間だということを書いて出して慌てて総譜スコアを探し始めるのだった。

一方、職員室を出た利緒はまだ半信半疑であった。本当に部員た

ちは55人だということを知って、やる気がなくなっていないのか。
「なあ、森田くん」

「あー？ どないしたん。声、暗いやん」

「今日は……どれくらい、合奏来てるん？」

利緒の心配するところはそこであった。大地が着任して以来、合奏に全部員が揃ったことはまだないのである。初回の合奏を除いて。
「心配してんの？」

利緒は小さくうなずいた。彼女のパートであるトロンボーンは真面目な後輩たちが揃っているのでまったく問題ないのだが、他のパートが何しろヒドすぎるからである。トランペットは美里だけという始末であるし、サククスも微妙なメンツ。クラリネットもあまりまとまりがない。

「そっかあ。ま！ とにかく音楽室戻ろう！」

そして、利緒は音楽室に入って目を疑った。なんと、トランペットの場所に部長の愛美が座っていたのだ。

「なんで……」

「なんでってことあれへんやろ。部長やねんから。当たり前」

周平はニカツと笑ってから、すぐに部室に戻って楽器の準備を始める。

「おーい、福崎！ 何しとん！ 早よ楽器出そうやー！」

「あ、ああ、うん！ すぐ行くー！」

利緒はチラツと愛美のほうを見た。愛美がその視線に気づき、言った。

「言うとくけど、あたしまだ島崎先生のこと、認めたわけちゃうからね」

「あ、ああ、そうなん？」

「当たり前やん」

愛美はツンとした様子でそう言い放った。

「ほな……なんで？」

「……最後のコンクールやし？ 出たいし」

愛美は恥ずかしそうにそう言って、再び楽器に口を戻した。

「……そっか！」

利緒は嬉しそうに笑ってから、すぐに楽器を出しに部室へと向かうのだった。

第026話 地元に愛を！

「はい！ では、今日の合奏はこれで終わります。部長、号令」
「起立」

8割方揃っている部員が一様に立ち、愛美の号令に合わせて礼をする。

「ありがとうございます！」

「はい、こちらこそありがとうございます。では、企画委員」

「はい！」

嬉しそうに立ち上がったのは航平と末樹の二人。それから、真咲と利緒が率先して何やら薄い冊子を配り始める。

「何？」

部員たちは冊子を受け取り、タイトルを見ると歓声を上げた。

「おお！ 合宿のしおり！？」

「そうです！ はい、みんな日程注目！ とりあえず、5月1日の土曜日から4日の火曜日まで、3泊4日で行きます」

「きゃー！ めっちゃ楽しみ〜！」

久美が一際大きな歓声を上げる。何を隠そう、周平も実はソワソワしている。旅行気分がどうしても抜けきらないのは事実だった。「集合時間、持ち物、流れとかはしっかり各自で読んで把握しててな」

周平は冊子を開き、その濃い内容に度肝を抜かれた。何しろ、初日は宿舎到着後からいきなりパート練習が3時間も取られている。午後2時からミツチリ5時まで。しかも、どの時間に何をするか、キツチリ細かく分けられていた。

「うへえ……」

これには悠馬も驚いたようで、嘆息している。

「誰や？ 行く前からため息ついとんのは」

大地がニヤニヤと笑っている。そして、翌日は午前7時起床。朝食を終え、なんと8時半から正午まで課題曲をひたすら練習するのだ。同じ曲を3時間、多少休憩を入れるとはいえ、ぶっ通しで練習するのは彼らにとっては初めての経験となる。

さらに、午後1時から自由曲をなんと4時間。地獄とも思える内容であった。

その翌日、3日の午前中はセクション練習。金管、木管、打楽器に分かれてそれぞれ、前日の合奏で指摘された箇所を徹底的に練習する形になっていた。その午後は課題曲と自由曲、2時間ずつ。できていない箇所を中心にミッチリするそうだ。

そして最終日。午前中に仕上げの合奏をし、帰路に着く。

「……あれ？」

そこで弓華が違和感に気づいた。

「先生？」

「どうした？ 松本」

「夜……の練習予定が全然組まれてませんけど」

大地がニーツと笑った。弓華もつられてニーツと笑う。

「そこにはな、お楽しみ企画があるねん！」

「企画！？ なんですか？ めっちゃ気になる！」

弓華と未央が身を乗り出して大地に内容を教えてくれ、と言わんばかりの顔をする。

「それは当日までのお楽しみや！ 楽しみにしとってくれよ」

これには他の部員たちも多かれ少なかれ、ウキウキ感が増したように見える。

「さてと……。この冊子、今日来てへん部員にも渡してくれるか？ ちなみに、この合宿に参加せえへんかったら強制的にコンクールメンバーから落とすって言うといってくれ」

その言葉に全員の表情が固まる。

今日、部活に来ていないのは菜々香、由里、朋矢、明巳、和洋、

郁斗、智香子、都夢、音弥、充香、陽菜、佳穂の12人。各パートで一人か二人は抜けていることになる。特にトランペットは半数以下という状態。このままこの12人がコンクールメンバーから落ちると、今年も県大会止まりになってしまうことも考えられた。

たとえ、数合わせでも無理やりにも連れてこなければ。部員たちにそんな危機感が静かに漂っていた。

「ところで！」

ビクツと全員が体を震わせた。

「そないに驚かんでいいやる。実はな、あさって29日に、J R 芦尾駅前広場でな、演奏を依頼されてるねん」

「依頼演奏……！」

久しぶりの言葉に、部員の半数が目輝かせた。どうやら、地域に出て演奏をすることも浜唯高校では減っているようであった。そのため、一応駅前商店街の役員さんが声を掛けてくれたときに大地が即座に返事をしたことに、彼らも驚いていたような様子だったのを大地は今になって思い出した。

「そんでな、一応ジャンルは最近のポップスと演歌、メドレーを1曲の合計3曲やってほしい言われてるねん」

「おお……」

部員たちは久しぶりに演奏できるポップス系の曲という言葉にも胸を躍らせていた。しかし、あまり時間がないのも事実。練習できるのは明日だけなので、おそらく今までの演奏曲を使いまわしすることになるだろうと予想していた。

そしてその予想どおり、大地が封筒を取り出した。

「ほんでな、演奏曲に関しては先生がもう選んできた。言うで」

部員たちはワクワクした様子を抑えきれないようで、特に周平や洋平はそれが顔に丸出しの状態だ。

「まず、1曲目はPerfumeのポリリズム」

「えー！？」

途端に全員が声を上げた。何しろ、曲の中間部がどうなっている

のかわからなくなるような曲であるのは全員が承知なのだ。なぜ、そんな曲を選んできたのか周平たちには理解できなかった。

「それから、涙そうそう」

180度異なるジャンルの曲に、これもまた部員たちは驚いていた。どう気分を切り替えるかが大事になってくる。

「そんで、最後は崖の上のポニョメドレー」

これもまたジャンルがまったく違うもの。果たして明日だけの練習で間に合うのか、不安を隠せない部員たちに大地はこう言った。

「下手でもいい」

その言葉に全員が顔を上げる。

「下手でもいい。わかってる。練習時間は明日しかないからな。でもな、下手でも一所懸命やれば、絶対伝わる。お前らの頑張りとか、伝えたいこととか。伝わるんや」

「……。」

「地元の人たちってな、見てないようでみんなの事を見てるんや。その感謝を明日、伝えてくれ」

「……。」

「頑張れよ！」

「はい！」

部員たちの目の色が変わった。

「よし！ 譜面係と部長、副部長はすぐに職員室に！ 楽譜、コピーするからな！」

「はい！」

「先生！ 俺も手伝っていい？」

周平が手を挙げた。

「おっ！ 助かるなあ。ほな、頼むわ！」

未樹も手を挙げようとしたが、タイミングを逃してしまい、結局周平の背中を見送ることしかできなかった。

第027話 部長×副部長×副部長×雑用係

「……………」
「……………」

職員室の横にある印刷室。愛美、洋平、大輝、周平の4人が並んで黙々と楽譜のコピー作業をしていた。特に会話は生まれず、ただコピー機の機械的な音だけが響き渡る。普段から仲の良い洋平、大輝、周平の3人であれば会話も弾むのだが、そこに愛美が加わるだけで妙な緊張感のようなものが生まれ、一気に会話が途絶えてしまふのだ。

コピーを取っているのは愛美と洋平。楽譜のパートごとへの仕分けを大輝と周平がやっていた。

不意に愛美が呟いた。

「あのさあ……3人も、あたしに気い使ってる？」

「え。何やねん、急に」

洋平が笑った。しかし、明らかに愛想笑いであるのは大輝にも周平にもすぐにわかった。愛美がそれに気づいているかどうかはわからなかったが。

「だって、普段みんなもつと楽しそうにしてるやん」

「いや〜あ。別にそんなことあれへんよ。なあ？」

「せやな。別にこんな感じやでな？」

「悪い。俺トイレ行ってくる」

急に周平が立ち上がり、印刷室を出て行った。

「なんやアイツ」

洋平と大輝がククツと笑っている。しかし、その横で突然愛美が涙をこぼし始めた。

「お、おいおい！」

洋平が慌てて愛美の隣に戻る。

「どないしてん！ え？ 金木ってそんなキャラやったか！？」

「せやでえ！ どないしてん！ 急に泣くなや！ なんか俺らが泣かしたみたいに見えるやん！」

「ごっ、ごめん！」

愛美はすぐにゴシゴシと涙を拭って顔をブルブルと左右に振った。

「あたしらしくないよな……」

愛美は苦笑いしながら鼻声でそう言った。

「あのさ。金木」

洋平が優しい声で言った。

「俺ら、副部长やる？ 曲りなりに」

「うん……。いや、曲りなりやなくて、副部长やん？」

「ほな、もっとごう……俺らを頼りにしてほしいっていうか……な

あ。大輝」

大輝もうなづく。

「せやで、金木。お前、何でも一人で背負い込んでしまいうけあるんや。俺も洋平も、前からそれ気になってん。特に部長になってから、めっちゃそれが目立つようになってる気がする」

「あたし、そんなつもりは全然なかってんけど……」

「せやろなあ。金木、1年生のときからせやもん。なあんでも自分でがんばろーとしてもうて、結局オーバーヒートして爆発しよんねん」

「そ、そんなことあった！？」

愛美が慌てて大輝たちに尋ねる。すると、彼らはいろいろと愛美が入部以降に起こした出来事を次々と上げていった。1年生の冬のアンサンブルコンテストで練習しすぎて本番前に唇を壊したこと、始業式や終業式では友人がいるので力んで校歌などを吹いて毎回派手に音を外したこと。

合宿でも気合いを入れて楽器運びをしていたら、足を滑らせて思い切り転んで鼻を擦り剥いたこと。

「も、もうやめて！ そんな恥ずかしいことホジクリ返さんとい
よお」

愛美が情けない声を出す。洋平と大輝が大笑いし出した。

「せやけど、ホンマはめっちゃおもしろい子やのに。なんでそないにツ
ンツンした感じになるわけ？」

洋平がもつともなことを聞いた。すると、愛美は胸のうちを初め
て彼らに打ち明けた。

愛美は入部当初から、由緒ある全国大会常連校であるこの浜唯高
校に入学し、入部できたことをかなり誇りに思っていたのだという。
自分も練習を頑張り、必ず普門館の舞台に立つ。1年生当時はそう
意気込んでいた。

しかし、入部して待っていたのは1年生という立場上、致し方な
いことであるが雑用の連続。それが当然という風潮があったので、
特に疑問も持たずに愛美は日々、活動に取り組んだ。

1週間足らずで、見学に来ていた1年生で次々と仮入部の時点で
退部する者が増えていった。けれども、愛美は諦めなかった。普門
館という言葉が愛美を支えていたのだ。

ところが、必死で頑張る愛美に予想外の出来事が起きる。それが
周平たちの起こした行動であった。それが、先輩たちの逆鱗に触れ
た。そしてあつという間に愛美たちにもその影響が及んだのだ。

雑用が以前にも増して増えた。練習時間は割かれ、雑用ばかりに
なる。それでも愛美は耐えた。2年生になれば、この苦痛から解放
される。

そして、気づけば3年生になっていた。正直言つて、2年間の記
憶はほとんどない。2年生のときにもコンクールメンバーになった
が、結局関西大会はダメ金で終わった。いつの間にか、愛美の目的
は全国大会出場から、部を仕切ることに変わっていた。

そして、部長になったときには自分がかつて経験させられた雑用
などを2年生たちに押し付けるようになっていた。そして、すべて
の元凶を作った周平には特にキツイ雑用などをさせた上に、精神的

にも負担を与えた。

だが、周平はちつとも気にする素振りを見せなかった。それどころか、周平はかつて愛美が持っていたような強い意志を持っていることに彼女は気づいた。そして、そのときに彼女はようやく気づいたのだ。

自分のやっていたことの空しさを。

「……これが、あたしの本音なんよ。ホンマは、森田さんに謝りたい。ホンマ、何を今さら……って思われるかもしれないけど」
すると、洋平が優しく愛美の頭を撫でた。愛美の顔が真っ赤になる。

「え！ ちょ、何!?!」

「言えばいいやん」

「……今さら、遅すぎる気がする」

「全然そんなことないで」

大輝が言った。

「まだ、4月や。コンクールまでたっぷり時間がある。とりあえず……周平にだけやなくて、部員みんなに1回、金木の気持ちをおつけてみたらどないや?」

「えっ……」

「上が動かんかったら、何も変わらへんぞ」

「……」

愛美の眼差しが変わった。

「せやね……。うん。あたし、言うてみるわ」

愛美の目の中に、かつてのような強い意志が蘇る。

「あ、せや。二人にお願いがあんねんけど」

「何でも言うてや」

「今日、部活に来てへんかった人らに、連絡取ってほしい。明日は絶対、部活に来るようにして」

洋平と大輝がニツと笑う。

「おやすい御用」

そしてその話が終わった途端に周平が戻ってきた。

「ん？ なんや、この微妙な空気……」

「なんでもあれへん！ それより周平、楽しみにしとけよー！」
洋平が思い切り周平に飛び掛かる。

「わ！ 何を楽しみにすんねん！」

「まだ内緒じゃー！」

「意味わからん！」

じゃれあう洋平と周平を見ながら、愛美は必ず自分も部活を変えてみせると密かに誓うのだった。

第028話 彼女の本音

「え？ マジで金木がそんなこと言ったん？」

学校を出て電車を降り、愛美の話をし出した大輝と洋平。周平は大輝と洋平の言葉が本当なのかどうか信用しきれず、思わず聞き返してしまった。ちなみに、4人は同じ市の出身である。

「そやで？ ウソ言うて何の得にもならへんから、ウソなんか言うかいな」

「ええ〜……？ なんや、もひとつ信用できへんな。なあ、悠馬」
そばを歩いていた悠馬に周平が聞く。どうやら悠馬も同意見のようだ。

「俺も。あんな金木が、そんなこと言うかなあ」

愛美が言ったことは、今日来ていなかった部員に明日は必ず来るように告げること。なぜ急に愛美がそんな積極的なことを言い始めたのか、周平にはサッパリ理解できなかった。

「ホンマやて！ 疑り深いヤツらやなあ」

洋平が呆れて首を左右に振る。

「そうは言うてもなあ……。急にそんなん、信じられへんわ」

周平がフウツとため息を漏らした。

「ま！ 信じる信じへんは別としてやな。とりあえず周平はサックスやねんから、秋吉さんと榊さんに声かけて。よろしく」

「げ！ マジで!？」

「当たり前やる。パート同じやねんからさ」

「う、うん……」

周平がしり込みするのも無理はない。和洋とはソリが合わない。郁斗とは最近、まともに会話すらした覚えがないのだ。そんな2人を果たして説得できるのか。周平はそんな自信など、微塵もなかつ

た。

そして悠馬や洋平、大輝と分かれてから周平は一人で自宅までの道をトボトボと歩いていた。ひとまず携帯電話のメールで郁斗と和洋にメールをしてみた。明日の部活には来れそうか、という内容のメールを送る。

するとすぐに返事が来たのだ。思いのほか早かったので、周平は脈アリかと思つて思わず笑顔になる。

しかし、メールのタイトルはサーバーエラー。開いてみると、なんと郁斗のメールアドレスが変わっており、連絡がつかなくなつていたのだ。

「ホンマかいや……。信じられへん」

周平は初めてここに来て自分の無力さを感じ取つていた。まさか、メールアドレス変更の連絡が来ていないとまでは予想していなかつたのだ。

「シヨツクやなあ……。大西なら知つてるかな。それかみつちゃんか……。たけやんでもいいか」

みつちゃんとはテナーサックスの藤田 光晃、たけやんとはバリトンサックスの七瀬 猛のことである。二人とは幸い、関係が良好なのでこういつたことも聞きやすいのだ。

家の近くに来て、狭い路地の角を曲がつた時だった。誰かがすぐそばに立つていたので周平は大声を上げてしまった。

「どわーい！ 誰や!？」

「あ、ご、ごめん！ あたし……」

なんと、愛美だったのだ。

「な、なんやねん！ ビックリするやんか」

「ゴメンな。あたし、どうしても森田くんをお願いしたいことがあつて」

愛美がそういうので、ひとまず周平は話を聴くことにした。

「わかつた。せやけど、暗いしまだ微妙に寒いやん？」

「あ……そっか。そやね。明日のほづが」

「俺ん家で話さん？」

「え？」

愛美はこれには度肝を抜かれた。

「ちょ、何言うてんの！？」

「え？　せやから俺ん家で話そうって。寒いし。ほら、行くで」

「ちょ、ちよつと待って本気！？」

「本気やっちゅーねん。ほれ！」

周平はそういうとサツサと自宅に入って行く。愛美は困った挙句、思い切って周平の後を追った。

「あ」

そのときだった。声がしたのは。

「部長……やんね？」

愛美が周平の家の門を潜ろうとした時に声を掛けてきたのだ。そして、それは未樹だった。

「後藤さん……」

「どうしたん？　ここ……森田くんの家やんな？」

「……うん。ちよつと用事あつて。ホンマは家の前で済ますつもりやっつてんけど、森田くんが入らんかった」

「……。」

愛美は未樹の目線がいまひとつ信用していないということ伝えるものであることを感じ取っていた。しかし、ウソではないのでこれ以上の説明のしようがない。

「部長　！　何しとん！　早く！」

「あ……」

愛美は困った挙句、なんと未樹の手を引いて門の中に入ったのだ。

「森田くん！　偶然、いま後藤さんとも会ってん！」

「！？」

周平が驚いて振り返ると、確かに未樹の姿があった。

「後藤さんも一緒に、ええかなあ！？」

「……うん」

ダメ、とは言えず周平は渋々承諾した。けれども、すぐに承諾したことを後悔することになる。

「あらまー！ 可愛らしいお嬢さん二人！」

「オカン！ うるさい言うてるやる！ 金木さんと後藤さんも困ってる！」

周平が怒って母親を怒鳴りつけた。

「なんやの、この子は。ゴメンなあ、あの子生意気で」

「い、いえ」

「大丈夫ですよ」

周平の母・博美が紅茶とお茶菓子を愛美と未樹の前に差し出した。ホンマはねえ、お食事出してもええんやけど、やつぱりよその男の子の家でご馳走になったなんて、言いにくいもんねえ。あ、残してくれてええんよ？ おうちでご飯食べるやるから、叱られへん程度にしときやあ

「は、はい」

すると再び周平の声が飛んできた。

「オカン！ そういうんやったら出さんでええやる！？」

「うるさい子やねえ！」

博美が負けじと怒鳴り返した。あまりの勢いに、そして学校と自宅での周平のギャップに驚きを隠せない二人。

「ゴメンねえ。あの子。素っ気ない子ちゃうん？ 学校でも」

「いえ……そんな。ねえ、後藤さん」

「うん」

実際にはそうですよ、と二人は言いたいところであったが、自分たちが原因でもあるのでその言葉は飲み込んでおいた。

「ウチねえ。父親がおらへんから」

突然衝撃的な言葉が飛んできたので、愛美と未樹は思わず手に取ったカップを落としそうになった。

「私も働いてるからね。家事やら何やら、あの子に任せっぱなしで放任過ぎるのがアカンかったかなあ。最近、イライラすることも増

えてなあ。中学の頃までは素直でええ子やってんけど」

「……………」

愛美と未樹はなんて返せばよいのかわからず、黙り込んでしまった。ふと未樹が前を見ると、電気のついていない和室に、リビングの明かりを少しだけ受けて姿を見せている仏壇が見えたのだ。愛美も未樹の視線に気づき、その仏壇に気づいた。

「まあ、仲良くしたってね。冷たい子かもしれへんけど」

「はい……………」

しばらくすると、周平が降りてきたので愛美はひとまず、話したいことをすべて話した。その話とは、下条姉弟のことだった。二人して部内で結構な幅を利かせている二人を何とかしてほしいのだという。

「なんであの二人、あんな幅利かせとん？」

周平はもつともな疑問をぶつけた。

「あの子んトコな……………学校の理事長やねん。せやから、いろいろと……………ね」

「へー！ そうかいな。えらいさんやん」

周平は素直に驚いたようだった。

「金持ちやねんなあ。ええなあ、俺も下条ん家生まれてたら、こんな貧乏くさい家で生活せんですんだのに……………痛っ！」

ゴツン！と音がして博美のゲンコツが周平の頭を直撃した。

「何すんねんなー！」

「自分ん家貧乏言つたら、余計貧乏なるやろ！？ やめなさい！」

「わけわからん！ なんじゃその理論！」

ギヤアギヤアと口論をしばらくしてから、周平が言った。

「わかりました。俺がなんとかしましょ」

「ホンマ！？」

「その代わりやねんけど、部長と後藤さんをお願いあるねん」

「何？」

「秋吉と、榊の連絡先わかる？」

二人は顔を見合わせた。

「私は榊くんなら」

未樹が答える。

「あたしは秋吉くんなら」

「ホンマ？ 助かるわ。秋吉、俺と連絡つかんから後藤さん、お願いしていい？ 部活来るように言うて。ほんで、部長は榊に」

「わかった」

「頼むわな。めっちゃ助かる」

ニカツと周平が笑顔を見せる。その笑顔を見て、未樹は急に顔が熱くなった。

「遅くまでお邪魔しました」

未樹と愛美が深々とお辞儀する。

「いえ！ 汚い家やけど、また来てね」

「ホンマやで。また掃除しとこ」

博美が再びゲンコツを振り下ろし、周平の頭周辺から鈍い音が響いた。愛美と未樹は笑い合いながら、周平の家を後にする。

そして、周平の家を離れてしばらく行き、交差点に出たときだった。

「後藤さん」

愛美が真剣な顔で言ったのだ。

「何？」

「後藤さん……森田くんのこと、好きなん？」

「え……！？」

未樹の顔が赤くなる。

「どうなん？」

「わ、私……別に……」

「ほな、ええの？」

「何が？」

「あたしが、森田くん好きになっても、ええの！？」

「……………」

シンと静まり返る。そして、未樹は言った。努めて笑顔で。

「ええよ」

「……………」

「そんなん、いいとか悪いとかあれへんやん」

「……………」わかった。ゴメン、急に变なこと聞いて

「ううん」

そして再びの沈黙。

「それじゃあ私、帰るね。またね」

「うん……………」

未樹はそう言って手を振り、愛美に背中を向けて自宅へと向かい始める。

ホンマによかったん？

自分の声が胸に響き渡る。

「よかったもん……………」別に」

未樹はそう呟き、本音に耳を傾けないまま、自宅へと向かうのだ。
った。

第029話 これ、マジ？

「……………」

4月28日。悠馬が楽譜を片手に部屋で佇んでいる。

「……………ユーマ？ どないしたん？」

周平が気になって悠馬の顔を覗きこむ。

「いや……………これ、マジやと思う？」

「どれ？」

周平が覗き込むと、悠馬の手にはドラムセットの楽譜が握られていた。

「へー。これ、何のドラムセットの楽譜？ ポリリズム？」

悠馬が首を振る。

「あ、ほなあれか。崖の上のポニョか？」

また首を振る悠馬。

「え？ ほな、もう涙そうそうしかないやん」

「それも違うねん」

「えー？ ほな……………何や？ 他にポップスなんてあったか？」

「違うねん、周平。これな、自由曲の楽譜やねん」

「ええ！？ ウソやる！？」

周平が慌てて楽譜に書かれているタイトルを確認すると、確かに今年の自由曲になった『ウィークエンド・イン・ニューヨーク』だった。

「うへえ……………！ マジで？ コンクールでドラムセット使うの？」

別に、ドラムセットを使用する曲が珍しいわけではない。そういう曲もあるだし、そもそも課題曲でもそう言ったものは存在する。

もちろん、この課題曲も全編にわたってドラムセットを使用するが、普通、自由曲でそういったドラムセットを使用するような曲という

のは、それほどメジャーではない。

しかし、この曲では本当にすべてにわたってドラムセットが使用されるのだ。

「……コンクールで、ドラムセット使うなっていう規定はないよな？」

悠馬が周平に確認する。

「確かなかったで……？」

「……。」

悠馬はその答えを聞くと、すぐにドラムセットの前に座った。

「ほな、練習するしかないわな！ よっしゃー、腕鳴るでー！」

悠馬がニヤリと笑った。悠馬が一番得意な楽器、それは他でもないドラムセットだ。

周平は嬉しそうな悠馬の顔を見ながら、そっと部室を後にした。

それからサックスのパート練習部屋に行くと、郁斗と和洋以外の部員は揃っていた。

「どない？ やっぱ難しい？」

ソプラノサックスを吹いている優花に周平が尋ねる。優花は苦笑いしながら「なかなか思うように息が入らへんよ」と答えた。

「アルサクと違って、直管に近い楽器やからな。抵抗もそないに多くないハズやねん。やから、比較のリラックスしてゆっくり息入れてみ？」

「こ、こっつ？」

優花が指示どおりに息を入れる。すると、比較的すんなりと音が鳴った。

「そうそう！ やわらかく、優しくっていうイメージで吹けばバツチリ！ それでええねん！」

「ありがとー！ うん、なんかわかった気がするー！」

「なんでも聞いてや。だいたいのは答えられると思うから」

周平はニカッと笑うとすぐに自分の楽器をセッティングした。それから、すぐに自由曲の冒頭部分にあるソロの練習にかかる。さす

がにニューヨークまでは大地が連れて行ってくれることはなさそうなので、自分なりにこのニューヨークという町のことを調べ、解釈してみた。

大人っぽい、色っぽいイメージがあった。夜のニューヨークはまさにそのようなイメージ。冒頭のゆったりとした部分は、真夜中から明け方へ、そして朝へと移行する部分の描写だと周平なりに解釈している。アルトサククス、ソプラノサククス、トロンボーン、クラリネット、バスクラリネットのソロなどが相次ぐあたり。このあたりは特に大人っぽい雰囲気をまず出してもよいだろうと周平な考えていた。

そして周平のソロのあたり。ここでは菜砂のバスクラと悠馬のドラムセットが周平のソロを引き立ててくれる。合うようになってくれば、二人と合わせたいと彼は考えていた。

同じ頃、ホルンではテンポが上がってからのメロディにかなり苦労していた。音が細かいので、管が極めて長いホルンにはかなり苦しいものがあった。さらに、音が高いことも起因し、プスパスと外す音がよく聞こえてくる。

我慢できなくなった洋平が腹立たしそくに手を叩いて止めた。

「ちょっと待って、待って！ 音めちやくちやん！ ちゃんと楽譜見て吹いて！ テキトウな音、吹いたらアカン！ 誰なん？」

「……。」
「……。」

しかし、誰も応答しない。

「じゃあないな。一人ずつ行こう。まずはリョウ」

「はい」

良輔が楽器を構えてスツと息を吸い、該当部分を演奏する。

「オツケ。ありがとう。次…… やすもつちゃん」

「はい」

桃は緊張しつつもその部分を吹ききる。

「オツケ。ちょっとあれやな、音が不安定。もうちょっとしっかり

息入れて？ あんまり緊張しすぎんでええから」

「はい！」

桃はすぐにシャーペンで楽譜にメモをする。

「よし。じゃあ次、岡本さん」

「……。」

「返事」

「はい」

少し指がもつれたものの、なんとか吹ききった充香。

「ちよっと指、まだもつれてる。しっかり指使い練習して？」

「はい」

「じゃー……次、たつちゃんとか古舞さん、いこか？」

「は、はいー！」

このはの表情が強ばる。

「いくで？ 1、2、3、4！」

達樹がスツと息を吸う。このはがそれに合わせて息を吸い、演奏を始めた。まだまだ初心者であるこのはやはり、プスッ！ パスッ！ と音のミスが目立つ。しかし、初心者だというのは洋平も承知なので、特に指摘はしない。

「オツケ。ほな、ちよっともう1回ゆっくりやってみよか」

「佐藤先輩」

洋平の声を掻き消すように、充香が割り込んできた。

「何？」

「お願いなんですけど……古舞さん、個人練習にしていただけませんか？」

洋平がムツとした表情を浮かべる。

「なんで？」

「初心者の子に構っていると、あたしらの時間がなくなるやないですか。ロングトーンとかの時間上げてたほうが、その子のためにもなると思います」

「いちおう、パーリー俺やからさ。そういうのも全部考慮して練習

時間組んでるんで……あ、ちょー！」

突然充香が立ち上がり、楽譜や譜面台、楽器を片付け始めたのだ。「何しとん!?」

「初心者や吹けない人に付き合ってられるほど、私はヒマじゃないんです。悪いですけど、個人練習させてもらいます」

「なっ……」

パツとこのはを見ると、今にも泣きだしそうになっている。まだ1ヶ月も経たない彼女には酷過ぎる言葉が飛んできていた。洋平は溜めていた怒りを一気に爆発させ、珍しく怒鳴り上げた。

「いい加減にせえや！」

「!?!」

右隣のトロンボーンと左隣のトランペットの部員たちが目を丸くする。

「放してください！ 私は一人で練習します！」

「なんでそない輪を乱すようなことばっかするんや！ ええ加減にせえー！」

あまりの大声に驚いて愛美や利緒が部屋を飛び出すと、今にも取っ組み合いになりそうな洋平と充香の姿があった。

「待って！ 何やってんの、二人とも！」

愛美が真っ先に二人の間に入り、ケンカを止めようとした。

「やめえや！ 二人とも！ 新入生もおるんやで!?!」

利緒も入って完全にモミクチャになる4人。様子を見かねた良輔が慌てて大地を呼びに行った。そして、しばらくすると大声が響き渡った。

「やめんかー！ お前ら、どんだけ子供やねん！」

「……!」

驚いて手を止める洋平と充香。そして、大地が今度は静かに言った。

「佐藤、岡本。すぐに音楽室来なさい。それと金木。三沢も呼んでお前らも来なさい」

「は、はい！」

愛美が慌てて小走りで大輝を呼びに行く。

「ほら、先行くで」

「はい……」

大地の後にそっと洋平と充香がついていく。明らかにうな垂れて
いる背中を見送ってから、良輔が言った。

「ほな、先輩戻ってくるまでちょっとロングトーンしよか。ほら、
古舞さんも一緒に」

「……。」

しかし、シヨックで涙を流して立ちすくんでいる彼女はしばらく
動きそうになかった。

第030話 ここで欠けるわけにはいかない

「はあ……まいった」

洋平が音楽室でグッタリしている。そばに座っている周平と悠馬が心配そうにしていた。

「どないやったん？ あれから」

周平が聞くと、洋平はウンザリした様子で答えた。

「もう最悪や。まず、岡本がごつつ先生に怒られてな。元々、岡本ってカンシャク起こしやすいつていうか、短気な感じやる？ 逆ギレしよって、転任したばっかの先生に偉そうに言われたくないとかワケのわからんこと言い出して……」

充香の普段の態度を考えると、ある程度予想ができることではあるなと周平は考えていた。洋平のボヤキはまだまだ続く。

「ほんでもってやな。まあ、そんな風に思わせるような環境作った俺も悪いってことで一緒に怒られるわけですよ」

「そうやるなあ。パーリーで副部長やもんな。責任者やし」

悠馬が同情するように呟いた。

「同じ扱いで、大輝と金木もかなり怒られた。今までどんな統率しとつたんやって」

「……情けないなあ、俺たち」

悠馬が大きなため息を漏らした。周平もため息を漏らす。時刻を見ると、既に8時を過ぎていた。いま現在、残っているのは周平たち3人だけだ。

「ほんで？ 古舞さん、どんな感じやった？」

「それがやなあ。これ以上、足引っ張ったらアカンから辞めたいって言うてんねん」

辞めるとい言葉にはやはり敏感になってしまふ。

「マジで！？ お前、それすんなり」

「受け入れるわけないやん。だいたい、自由曲が『ウィークエンド・イン・ニューヨーク』に変わってホルンは絶対人数いるのに。それがたとえ、どんな初心者でも今は辞められたら困るわけよ」

「よかつたー……そうやんな」

悠馬がホッと胸を撫で下ろす。

「とりあえず、今日もう1回古舞さんにメールか電話はしてみるわ」「せやな。頑張れよ、パーリー」

悠馬がバシバシと洋平の背中を叩く。

「おう。ところで、お前ら合宿の準備しとお？」

「おうよ！ 俺はもう気合い入りすぎて、3週間前から準備しとる！」

「どんだけ気合い入っとなねん！」

洋平と周平が同時に笑った。悠馬が「シューヘイは？」と聞いた。

周平は少し間を開けてから言った。

「まだ全然」

その言葉に二人が驚く。

「えー！ 几帳面な周平がなんで準備まだ？」

「ん……まあ、いろいろあつて」

「いろいろ？」

周平は少し気まずそうにしながら言った。

「俺……合宿、行かへんかもしれへん」

「……仕方ないやろなあ。無理やりなんて、できへんし」

周平が悠馬たちに合宿を行かないと伝えていた頃、職員室では大地が首を傾げていた。

「しっかし……俺としてはアイツは欠けてほしくないけど……でもなあ」

アイツとはもちろん、周平のことである。大地は周平こそがこの浜唯高校吹奏楽部の革新のためには欠かせない部員であると考えて

いた。

しかし、その周平が合宿に参加しないと、やはり影響が出てきてしまう。大地としては参加させたいのだが、周平自身が「沖縄への合宿」のために一歩踏み出すことができないのだ。

するとそのとき、ドアがノックされる音がしたので大地は「はい」と返事をして立ち上がった。その拍子に、切り抜かれた新聞記事が落下する。

そこには大地が既に聞き慣れた名前と、よく知っている名前が記載されていた。

「なんか疲れたわあ……」

愛美がウンザリした様子でため息を漏らす。

「大変だね……。あ、でも私たちにできることあったら、なんでも言っただけ」

未樹が親身になって答える。愛美は嬉しそうに「ありがとう、助かる」とにこやかに答えた。

「ところでさあ、後藤さん」

「ん？」

「森田くんトコの……あの仏壇」

未樹がうなずく。

「雰囲気的には……お父さん、やんね」

「多分ね……」

すると、愛美の隣にいた利緒が話に加わってきた。

「何？ 誰の話？」

「森田くんのお父さんの話やねん。なんかね、仏壇があつて、お父さんらしき人の写真があつたから……どないなつてたんやろ、って思っただけ」

「……。」

利緒の表情が変わる。未樹はそれに気づき、利緒に聞いた。

「利緒、何か知ってるん？」

「……誰にも言わへん？」

愛美と未樹は「約束する」とうなずいた。そして利緒は周りにもいないことを確認すると、こう言った。

「森田くんのお父さん……事故で亡くなってはるんよ」

その言葉を聞いた瞬間、未樹の頭は真っ白になってしまっただった。

第031話 周平の実力

「……………」

周平の父が事故で亡くなっているという事実を聞かされた翌日は、JR芦尾駅での依頼演奏本番だった。

未樹はあまり集中できず、何度もチラチラと周平のほうを見てしまふ。そんなことを知る由もない周平はしっかりと合奏に集中している。

「……………」

「後藤センパイ」

「……………」

「後藤センパイ」

航平が呼ぶ声も聞こえず、ポーツと周平のほうを見続ける未樹。

「後藤！」

「はっ、はい！」

大地の大声に未樹は驚いて大声で返事をした。大地も不思議そうにしている。

「どうしてん。今日は珍しく集中力ないな」

「……………すみません」

愛美が心配そうに未樹のほうを見る。

「地域の行事かもしれないけど、気い抜いて演奏したらアカンで。それは失礼やからな」

「はい。気をつけます」

「それじゃ、ポリリズム」

「はい！」

たった数日とはいえ、元々実力を備えている部員たちは少々複雑なパッセージがあるこの曲もすんなりと吹きこなしてしまう。しか

し、これには周平の実力が如何なく発揮されたことによるものであった。

フルートとピッコロ、オーボエ、シロフォンの伴奏が非常に複雑で、4拍子をいわば掻き乱すようなリズムを取っているのだ。そのため、途中で内部崩壊してしまうことが頻発した。さすがの照もこれにはお手上げ状態で、自分で吹くのに必死な状態。明莉や雛のことにまで手が回らないのが現状であった。

それは良平も同じで、むしろ彼の場合はオーボエが一人かもしれないという何とも言えないプレッシャーまであるものだから、音が震えてしまうこともあった。

「この場合、あんまりフルートとかピッコロはメロディ聴かんほうがええと思うわ」

周平のアドバイスに照が驚いている。

「ええ？ あたし、結構頼りにしててんけど……」

「ううん。むしろ頼らんとして。思い切りマイペースで言って。ただし、しっかりと胸の内を4拍子はカウントすること。せやないとだんだんとリズムが乱れてきよるから。これはあれやで？ 中盤のほぼ全員がそれぞれ違うことを演奏する部分でも同じ。しっかりと我が我がって言う状態ではなくて、リズムを刻んで楽譜を見て演奏すること。この場合、指揮を見ているとかえって混乱するから、いまここ吹いてて、最後にバチッ！とズレずに演奏止めること。OK？」

「は、はい」

「ただし、万が一に備えて先生にはこの部分だけ大げさに指揮振ってもらうから。ね？ 先生」

大地は大きくうなずく。

「ほいで……まあ、演出は演出係さんの指示どおりやな。後は……ほら、おい！」

将輝が自分のこととは思わずポーツとしていたのだ。

「なんや？」

「顔が暗い！ もっと笑え！」

「いや……だって、地域の演奏会とか久しぶりでなんかこう、変に緊張して……」

「よお言うわ！ 全校生徒の前でじょいふる踊り狂ったヤツが」

そこで大笑いが起きた。将輝は顔を真っ赤にしている。

「それ今ここで言うかあ!？」

「ナンボでも言うたるわ！ とにかく、ホンマあんまり練習時間なくて、みんな不安やと思う。俺も不安やし、先生も不安や」

「おーい！ ムチャクチャ言うな！」

大地が笑いながら言う。

「ほいでも、とにかく笑って楽しそうに演奏すればオールオッケー

！ みんな、ガンバロな！」

「はい！」

それだけ言い終わると、途端に部員たちの演奏が変わった。大地も驚くほどの変化だった。

浜唯高校があまり得意としないバラード系の曲に近い『涙そうそう』も珍しく、感情のこもった演奏がすんなりとできたのだ。一番驚かされたのは真咲の音色の変化だった。大輝も驚くほどに澄んだ音色が聞こえてくるのだ。

それだけではない。久しぶりにソロを吹くという進士の音色も変化していた。それまで緊張すると棒吹きに近かった音色に、綺麗なビブラートが掛かっていたのだ。曲で有名な部分を吹くフルートの音色も、1回目の雛や2回目の明莉の音色も次々とそれまでとは違った、クオリティの高い音色が発されていた。

サックスの全員も何らかの刺激を受けているようで、特に周平の近くにいる優花の影響は半端でないようだ。さらに、右隣の実香子たちにまでその影響が波及していく。

(さすがに……これはすごかったな)

大地は改めて周平の影響力に驚かされていた。稀にこうした生徒本人が意識しなくても自然と本人が持つ魅力などに影響されて周りの能力がアップする。そういった生徒がいると耳にはしたこ

とがあつたものの、まさか赴任直後にこうした生徒に遭遇するとは予想だにしていなかったのだ。

本番前最後の練習を終え、急いで大型楽器の積み込みをする部員たち。メドがついたところで男子部員数名が残り、後は会場のJR芦尾駅へ移動する。学校から自転車で20分少々かかるため、楽器降ろしのために移動するのだ。

「みんなが遅れたときのために積み終わったらお前ら、車乗っていけ」

「いいんですかー!？」

大地の言葉に残っていた周平、大輝、航平、良輔、良平が目を輝かせる。

「おうおう! ほら、早く積み込んで行くで」

「はい!」

楽器を積み終えて、周平が助手席に、残りがチューバやドラムセット(分解済み)とくつつきながら移動する。

「なあなあ、シューヘー!」

大輝が前のめりになって周平に声をかける。

「んー?」

周平は前を向いたままお茶を飲みながら答えた。

「あんさあ。ビックリすんなよ?」

「んー?」

「後藤さん、絶対お前んコト好きやろ!」

ブーッ!と周平が口に含んでいたお茶を吐いた。

「アホ! お前フロントガラス思い切り濡らしよって!」

「す、すいません! 大輝のアホ! お前、いきなり何やねん!」

周平は顔を真っ赤にしながら濡れたフロントガラスを拭く。それから後ろを振り返ると、航平、良輔のふたりもニヤニヤと笑っていた。

「だあってなあ。今日の後藤さんとか見てたら、わかるわ。あんな絶対シューヘーのこと好きやん」

「アホ言うな。それにとかって何やねん。他にそんな人おるんかい」
「あれですよ。部長、絶対そうでしょ」

良輔の言葉に周平があからさまに嫌悪感を剥き出しにする。

「ああ〜？ 金木があ？ 絶対ありえへん。っていうか、こっちからお断りやわ」

「ヒックシユン！」

周平が愛美に嫌悪感を剥き出しにしている頃、愛美が交差点で信号待ちをしているところであつた。

「大丈夫？ 風邪？」

実香子が心配そうに愛美に聞く。

「うっん。誰かが噂してんちゃうやろか」

愛美はそう言つて笑う。そして、カバンの中をそつと確認した。

「……うん。忘れてない。大丈夫」

愛美はそう呟くと再び視線を前に戻した。

4月。まだまだ新学期始まつて間もない頃。それぞれが少しずつ、動き始める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3504o/>

じょいふる！ Music

2011年10月16日16時59分発行